
steins;gate 二次創作 境界線上のクルーゼック

度会

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

steins;gate 二次創作 境界線上のクルーゼック

【Nコード】

N0308V

【作者名】

度会

【あらすじ】

鈴羽ルートのそれからの話の予定です。

ゲームをやっていない方に簡単に説明しますと、鈴羽が失敗するとわかってしまった岡部は、同じ一日を繰り返し、まゆりも鈴羽も失わない生活を選んだ。

しかし、そこに待っているのは、同じ一日を延々と薄く延ばし続けた拷問のような日々だった。

何度繰り返ししたか分からないほど精神が摩耗しきった岡部の様子を鈴羽は勘づき、そして言った。

「一緒に過去に行ってくれないか」と。

旅立ち（前書き）

もしかしたら不定期に更新するかもしれませんがご了承ください。
また二次創作ですのでキャラ崩壊があるかもしれませんがそこはご了承ください。

旅立ち

「ねえ…本当にいいの？岡部倫太郎？」

鈴羽は不安そうにこつちを見た。

「ああ、俺が決めたことだ」

そう。俺は後悔することはない。

俺は目の前にいる彼女は記憶を失うことを知っている。

俺だけが識っている。

思えば、まゆりや紅莉栖やダルはよく俺と共にいてくれたと思う。

あいつらがいてこそその未来ガジェット研究所だ。

誰か一人でも欠けてはならない。

俺はラボメンナンバー001狂気のマッドサイエンティスト鳳凰院

凶真だ。

まさかラボメンが増えるなんて夢にも思ってたなかった。

ただの三人だけのサークルのようなものままだと思っていた。

俺は、ラボメンの味方だ。

俺はあいつらには幸せな未来を付かんで貰いたい。

そして今目の前にいる未来から来た少女ダルの娘である阿万音鈴羽

もラボメンの一人だ。

ラボメンが困っているのに手をさしのべないわけにはいかない。

例え過去に跳んで未来に戻れないとしてもだ。

恐らく、もうラボメンに会うことはない。

縦しんば俺が今の時代まで生きていたとしてもその時はもういい年

だ。

誰も分かるはずがない。

そして、鈴羽も俺と過ごした日々を忘れる。

一瞬自分が世界から取り残された感覚がして背筋に冷たいものが流

れた。

「無理ならいいんだよ？」

俺の感情を読みとったかのように鈴羽は声をかけた。
俺はそれに答える代わりに鈴羽の頭を撫でた。

「え…な、なにすんのさ!!」

鈴羽は、顔を赤くして距離を取った。

「これが答えだよ。鈴羽」

なんだか、はぐらかされた気分だよ。と鈴羽は唇を尖らせた。

その顔が面白くて俺は少し笑みを漏らす。

どう言われようと俺はここに残るつもりはない。

俺は現実を受け入れる。

このままじゃまゆりも鈴羽も救えない。

同じ時間にしがみつくのはもう飽きた。

同じ時の流れを薄く伸ばすのはもうウンザリだ。

俺はこの未来を変える。

タイムマシンの中の造りは思ったよりも簡単だった。

「もっと色んな器具があるかと思っただが、意外とシンプルだな」

鈴羽は、そうかな？私にはこれが普通だから。と俺に問いにそっけなく答える。

細かい設定を終わらせた後鈴羽は俺の方に向き直った。

「ねえ、岡部倫太郎？私はこのタイムトラベルをしたあと記憶が消えちゃうんだよね？」

鈴羽は悲しそうに俺に尋ねる。

ああ。と俺が頷くと鈴羽は俺から目を逸らした。

やはり、辛いのだろう。

自分の記憶が消えるのを知っていても過去に跳ばなければならぬ
というジレンマに囚われているのだろう。

「ね、ねえ……岡部倫太郎？」

「ん？どうした？」

「えーとね」

鈴羽は、言いづらそうに手を遊ばせている。

普段は見ない珍しい光景だった。

「その、手を繋いで貰っていいかな？」
そう言つと鈴羽はおずおずと手を差し出す。

「ほ、ほら。だって過去に跳んだらこの気持ちも忘れちゃうんでしょ？、岡部倫太郎のことも忘れちゃうし……」

鈴羽の声は震えていた。

俺は黙つて鈴羽の手を握り返した。

その握られた手を見て鈴羽は意を決したようにこちらを見た。

「岡部倫太郎。あたしは……」

その言葉の続きを聞くことなく俺の体は強烈なGに襲われた。

視界が暗転する。

吐き気を催す程の強い振動。

「……くっ!!」

頭が痛む。

この感覚は……

「せ、世界線は変動した」

俺のリーディングシユタイナーが俺の脳に、直感的にそれを伝える。

やがて振動は収まった。

まだ二人の手は繋いだままであった。

タイムトラベルというたつた二人の孤独。

「おい。大丈夫か？」

手を離して、鈴羽の肩を揺さぶった。

「う、うん……」

まだ意識が混濁しているのか目をシパシパさせている。

鈴羽は、ようやく目を開けると、ゆっくりとこちらを見た。

「あ、あなたは誰…ですか？」

鈴羽は記憶を失っていた。

そう。

これでいい。

これが俺の選択だ。

旅立ち（後書き）

いかがでしたか？

まだ導入を書いたばかりですがこれからもよろしく願います。
なにかあれば遠慮なくどうぞ

二度目の初対面（前書き）

ああ、アニメではちょうど例のシーンをやってる頃ですかね。
せめて自分の話の中では幸せにしてやりたいですね……

二度目の初対面

「あなたは…誰ですか？」

鈴羽はもう一度同じ質問をした。

その自信なさげな声色を聞く度に俺の心は締め付けられる。

ああ、俺は孤独になってしまった。

だが、鈴羽が俺みたいな目に遭わないだけでも大分救われた気持ちになる。

「あの……」

「岡部倫太郎」

「え？」

「俺の名前は岡部倫太郎。そしてお前の名前は……」

橋田鈴だ。

俺はそう言つと鈴羽の頭を撫でる。

さようなら。そして、ありがとう阿万音鈴羽。

俺と記憶を失つと分かかっていても一緒に過去に跳ぶことを選んでく
れて。

未来を変える為に自分を犠牲にした少女。

もうここには阿万音鈴羽はいない。

「橋田…鈴。それが私の名前ですか？」

鈴羽は自信なさげに首をかしげる。

「あ、ああ、そうだよ。鈴羽」

「鈴…羽？私の名前は鈴じゃないんですか？」

「いや、ごめん。昔の知り合いに君にそっくりな人がいたんだよ。
それで間違えてしまった」

「そうですか……その…岡部さん。どこか痛いんですか？」

「え？」

「先程から泣かれていますので……」
ハツとして俺は自分の頬を触る。

確かに濡れていた。

涙なんて久しく流した記憶がなかった。

俺は恥ずかしくなって、慌てて自分の頬を拭った。

それからしばらくの沈黙が続いた。

「そういえば」

俺は、その沈黙に耐えられなくなって口を開いた。

「そういえば、す、鈴はなにを覚えてる？」

鈴？と自分の名前を呼ばれても一瞬誰のことだか分かっていないように首をかしげたが自分のことだと分かり、はい。と返事をした。

「そうですね……名前や出身などプライベートなことは何にも……」
ごめんなさい。と深々と頭を下げた。

「い、いや別にいいんだよ。だから謝らないでくれ」

2010年の時の鈴羽とは違ってかわってまるで赤子のようにだった。それも無理はない。

人の性格はその人生によって形成される。

言わば積み木の様な物だ。

それを根本から崩されては赤子のようになってもしょうがない。

アイデンティティの喪失。

俺だっけとそう思ったら鈴羽と同じような状態になっただろう。そう考えると、俺は少し感極まって鈴羽の頭を撫でた。

「え……あ、ひゃー！」

一瞬何をされたか分からなかったようだった。

「ああ、ごめんな」

俺が鈴羽の頭から手を離そうとすると、

「あ、あの……その……そのままにしてくれませんか？」

「え？」

「いえ、なんだかその安心するんです。岡部さんに頭撫でられると遠い昔にも誰かにやってもらったような気がして、と鈴羽は俯きな

がら答えた。

「そうか、ならいいが……」

もしかしたら、俺が今まで巡ってきた世界線でもあったように、記憶なんてものは失くしたのではなく忘れてただけなのかもしれない。きっかけがあればすぐに思い出すかもしれない。

そう思うと俺の心は少し楽になった。

いつか機会があったら俺たちがいた2010年のことでも話してみるか。

「一つ……いいですか岡部さん」

「なんだ？」

「ここは一体どこなんでしょうか？」

俺も改めて周りを見回した。

タイムマシンの中で間違いなかった。

いまいちタイムトラベルした感覚も余りなく、実は失敗してどの時代にも跳んでいなくて外に出たら2010年のままのような錯覚を受ける。

そんなことはあり得ないのに。

鈴羽が記憶を失った時点で時代は跳んだのだ。

「あの……」

「ここはタイムマシンの中だ……」

「え……でも」

そう言うと鈴羽は周りをキョロキョロ見回す。

「どうやってカー・ブラックホールの特異点を裸にしたんでしょうね……」

「なんだと……おい、鈴羽！……」

今なんて言った？

カー・ブラックホールだと？

俺が大きな声をあげると鈴羽は小さな声でごめんなさいと呟いた。

「ああ、ごめんな。鈴。怒鳴らないから許してくれ」

俺が謝ると、鈴羽は、はい。とうなずいた。

「それで、どうして、そんなことを知ってるんだ？」

「わかりません……ただ、例えば日本の首都は東京とか、1+1=2とかみたいに自分に関係ないことは少しは覚えていようなんてす……」

「そうか……」

流石ダルの娘だけあってタイムマシンに関する理論には詳しいいらしかった。

「あの、私どうしてこんなこと知ってるんでしょう？」

鈴羽は不安そうに俺を見てきた。

「それもきつとそのうち思い出すよ」

なに、時間はたっぷりとあるのだから。

そう言っつて俺は鈴羽を抱き寄せた。

「あわわわ……」

顔を真つ赤にして言葉にならない言葉を発していたが、やがて落ちて着いたようでゆっくりと顔を俺の肩に乗せた。

「最後に一つだけいいですか？」

「なんだ？」

「私と岡部さんの関係ってなんなんですか……？」

そんなもの決まってる。

あの日鈴羽を死なせたくなくてループし始めたその日から、

二人で過去に跳んだその時から、

「俺たちはな……恋人だよ」

自分の顔が熱かった。これまで経験したことのない恥ずかしさを感じた。

ただ自然と嫌な感じはしなかった。

鈴羽は、その言葉を聞くと目を細めた。

「やっぱりでしたか……」

安堵の表情を見せながら鈴羽は、俺の耳元で、

「私は幸せ者ですね。岡部さんみたいな人が彼氏で
そう言つと、目を閉じた。」

二度目の初対面（後書き）

皆さま読んでいただきありがとうございます。

まだ少ししか書いていませんが頑張っていくので応援よろしく願
いします。

なにかあれば遠慮なくお願いします。

では。

ふたりぼっち（前書き）

こんばんは。テスト期間なんで少しハイになっています。
もしかしたら編集するかもしれません。

鈴羽好きだー！！

ふたりぼっち

「ん……」

どうやら俺たちは寝ていたらしい。

タイムマシンの中にいると時間感覚が狂うようで今が朝か夜かすら分からない。

「すー……」

隣を見ると鈴羽が規則正しく寝息を立てていた。

俺はその頭を軽く撫でると起こさないようにそつとその場を離れた。ここに来て恐らく二日目。

俺たちの目的であるIBN5100を手に入れる前に衣食住を確保しなければならぬ。

住は最悪ここでも良いだろうが、食と衣はどうかしななければならぬ。

ふと、2010年の鈴羽は虫とか草を食べるとか言ってたが、恐らくその記憶もどこかに消えてしまったに違いない。

ここで悩んでいてもしょうがないので俺は意を決してタイムマシンの扉を開いた。

人間の習性とは見事なもので、どうやらちゃんと朝に起きたようだ。

俺は周りを見回す。

「ここは……どこだ？」

俺の周りには緑が広がっていた。

鈴羽の理論によると座標は移動出来ないはずなのだが、ここはどう見てもラジ館ではなかった。

とりあえず、近場にあった看板を眺めてみる。

「秋葉原……」

そこから先は掠れて読めなかった。

どうやらここは秋葉原であることは間違いなかった。

「岡部さん？」

鈴羽の声が聞こえた。

その声に振り返ると鈴羽がタイムマシンからひょっこりと顔を出した。

「ああ、おはよう。鈴。起こしてしまっただか？」

鈴羽はその間に首を横に振る。

「いえ、自然と目が醒めてしまいました」

「……」

いや、記憶を失ってるから当たり前なんだが、鈴羽が俺に対して敬語を使っているのはむしろ痒い気がした。

「どうかなされましたか？」

不安そうに鈴羽は、俺のことを上目使いで見た。

……むず痒いというか、この鈴羽も悪くない気がする。

「い、いやなんでもない。それよりは、腹とかは減ってないのか？」
平気です。と言ってタイムマシンから出てくる。

「しかし、岡部さんは起きるのが早いですね」

寝惚け眼を擦りながら鈴羽は体を伸ばす。

鈴羽の体から小気味のいい音が聞こえた。

さて、まずは今の状況を冷静に把握するが先決か。

「鈴羽。MTB借りるぞ」

少し見てくると言っただけ俺はMTBを走らせた。

太陽の高さから考えて、朝のようだが、秋葉原はやけに静かだった。

「それにしても、この時代の秋葉原は本当に電気街だな……」

まあ、当たり前と言えば当たり前前なのだが、俺が初めて秋葉原に来た時は既に、オタク街として機能していたので少々据わりが悪い。

「……俺が初めてここに来たのは何年後の話だよ」

そう皮肉気に笑うと、もう開店している店があった。

俺はその店の正面にMTBを停めると、その店に入った。

なにやら電気機器の部品関連を取り扱ってる店らしい。

ブラウン管が入り口のところに鎮座していた。

それを見て俺はおお、と、少し感激を覚えた。

まあ、この時代はブラウン管が主流だから当たり前なんだが。俺が入り口にいるのを気付いたのか店主が顔を出してきた。

店主はいかにも店主みたいな髭面をして、しかめっつらをしていた。

「お客さん……学者さんかい？」

俺の白衣を怪訝そうな目で店主は見つめた。

「いかにも、俺は……」

「ああ、別にいいよ。難しいこと言われても分からないから」

そう言くと店主は引っ込んだ。

久々に鳳凰院凶真を披露してもよかったのだが……

少し残念ではある。

しかし、考えてみるとこっちで鳳凰院凶真なんて披露する必要ないのかもしれない。

この時代にはきつと厨二病などは流行ってないだろうし……

もしかしたら奇人、変人扱いされてここらにはいれなくなってしまいかもしれない。

「すみません」

「……なんだい？」

奥に引っ込んだとは言え一応客が来ているので話は聞こえるようだ。

「IBN5100ってパソコン知ってますか？」

おう。という反応が返ってきた。

「なんか、もの凄く重そうなパソコンだよな？昔のプログラミング言語が使われてるとかなんとかの」

そんなものより俺は軽くて薄いパソコンが欲しいねと店主はぼやいた。

「そのIBN5100は最近出たものなんですか？」

「さあな。少なくともアポロが月に行ったのよりは後だと思うがな」
なにせ、情報なんてこんな専門誌でしか手に入らないしな。と店主は、薄い冊子を俺に投げた。

パラパラと目を通すと確かにIBN5100の情報が少し書いてあ

った。

「やはり高いな……」

当然俺の持ってきた新札なんて偽札と同じ扱いで逮捕されるに決まってる。

かと言って盗むつてのも変な話である。

最低限2010年までは俺か鈴羽の下に置いておかなければ俺達がここに来た意味がない。

「しかし、学者さん……あんた随分若そうなのにそんなものに興味があるなんて珍しいな」

「どういうことですか？」

「いや……大した意味は無いんだが、あんた位の年でそんなPCを知ってるのが珍しくてな」

「ええ……良く知ってますよ」

俺は口を歪めた。

へえ、なんか因縁がありそうだね。と店主は興味深そうに俺を見た。

「少しこのPCには縁がありましたね……」

俺の言い方にただならぬ雰囲気を感じたのか店主は、面倒事はごめんだな。と言ってそれ以上聞いてこなかった。

ありがとうございます。と俺は一礼して本を近くの机の上に置く
と店を出た。

少し話すぎたな……

別にこの程度話したとしても未来になんら影響を与えないだろう。

俺が携帯を見せたわけでも、新札を見せたわけでもない。

ただ、あの店主がIBN5100に少し興味を持っただけだろう。

俺は、MTBを借りてから大分経ったので一度鈴羽のもとに戻った。

「なにをやっているんだ鈴羽？」

「あ、おかえりなさい。岡部さん」

俺が帰ってくると鈴羽が何かを焼いていた。

「いえですね。このタイムマシンの中にライターが落ちてたんです

よ」

「それで何を焼いてるんだ……？」

「さあ……？」

そういえば2010年の鈴羽も草やら虫を食べてたと言っていたが、まさか覚えていたのか……

「あれ？どうされました岡部さん？」

「い、いやなんでもない」

「そうですか。あ、焼けましたよ」

岡部さんもお一つどうですか？鈴羽はソレを俺に手渡してくる。やはり、なにか動物のようだった。

「う……」

俺はそこまでアウトドア派では無かったので、そんなに刺激的なものを食べたことは無い。

ゴクリと生唾を飲む。

しかし、腹が減ったのも事実でさっきからたまに腹が鳴っていたのもまた事実だった。

「まあ、何事も経験だな」

ここで、病気にかかって死んだらこの時代に来た意味無くなるよな。と自嘲気味に笑いながらソレにかぶりついた。

ん……？

「意外にいけるな」

思ったより不味くは無かった。

ただ少し焦げすぎて苦い程度だ。

「そうですか。それは良かったです」

鈴羽は嬉しそうに目を細めた。

その顔を見て思わず俺は照れくさくなって目を逸らした。

その様子にふふ、と鈴羽は笑うと自分の分も食べた。

「でだ」

「はい」

俺と鈴羽は食べ終わったあと公園の隅に二人していた。

「とりあえず当面の目標は家を探そう」

「はい」

俺は決まったことをそこら辺に落ちていた枝を使って地面に書いた。傍から見たらいい年した二人が公園で地面に絵でも描いて遊んでるようにも見えるだろう。

「まずは、お金をどうするかですね……」

「そうだな……」

色々話して結局そこに行きついて、俺はため息を吐いた。

何かいい案は無いかと俺は顔を上げた。

「あ」

見つけた。

これは、盲点だった。

しかし、と俺はまた下を向く。

確かにアレを売れば大分金になるだろう。

でもそれでいいのか？

「鈴……」

「はい？」

「タイムマシンをばらして売ろう」

俺の提案に鈴羽は少し驚いたように目を丸くした。

確かにこの時代に存在しないものは売れないだろうが、中には売れるものがあるだろう。

ただ、あのタイムマシンは、鈴羽とダルの親子の血と涙の結晶なのだ。

鈴羽は記憶を失った。

この状況でタイムマシンを失ってしまったら鈴羽とダルを繋ぐものは無くなってしまおう。

俺は神じゃない。

多分強引に売ってしまうことは簡単だろう。

でも、俺にはそんなことは出来なかった。

唯一父と娘を繋ぐ絆を……

「いいですよ」

答えは……

俺の予想していたものと違っていた。

その言葉に俺は鈴羽を見つめた。

「岡部さんは相変わらず優しいですね。私は記憶を失いました。きつと岡部さんがそこまで言いだし辛かったってことはきつと私の記憶に関係しているものなんですね」

ですけど、と鈴羽は続けた。

「アレがタイムマシンか判然とはしませんが、もし本当だったら、私と岡部さんは未来から来たってことですよね」

俺は何も答えなかった。

「岡部さんがいなかった時に中を観察してましたけど、もう燃料がなくてあのタイムマシンは動きそうにないですね」
驚いた。俺がいない間にそんなことをしていたのか。

「岡部さんも未来から来た。タイムマシンが動かない。未来に帰れない。つまり私達は……」

因果の輪から外れてしまいましたね。

そう鈴羽は言った。

確かにその通りなのだ。

俺達は本来この時代には存在してはいけない存在。
いるだけで世界はいびつに歪む。

「だからですね……」

俺の頭を鈴羽の腕が包んだ。

「一人で悩まないで下さいよ」

私達は孤独な二人ぼっちなんですから……

そう言っただけ俺の頭を包んでいる力が強くなった。

「過去も大事ですけど、私達は今を生きていますからね」

失った過去にしがみついて死ぬのなら今を生きますと鈴羽は俺を諭すように言った。

「そ、それにですね。さっき調べた時にバッジとか私物みたいな物は回収したから平気ですよ」

「……………ああ、ありがとうございます」
なんでお礼を言うんですか。

そう言っただけで鈴羽は笑った。

「いや、辛はずなのに……………」

「もう、岡部さんはしつこいですね。私の記憶は私の物です」

いつか思い出しますって。と鈴羽は立ちあがって両手を広げた。

それに……………」

鈴羽は急に俺に背を向けた。

「……………記憶が戻らなくても、岡部さんがいてくれれば…私は……………平気です」

俺の方から表情はうかがえなかった。

泣いてるのか、はたまた笑っているのか見当もつかなかった。

俺は今の台詞を思い出して少し口が緩んだ。

「流石ラボメンだけあるな！！自らの記憶を犠牲にしてまでこの俺、鳳凰院凶真と破滅の混沌の世界を共にすることを選ぶとは。バイト戦士よ。今一度聞く！！本当に……………いいんだな？」

「オーキードーキー。当たり前じゃん」

「え？」

今なんて言った？

一瞬で鳳凰院凶真の仮面が外れる。

鈴羽の方もなぜ自分がそんな言葉を口走ったか不思議そうな顔をしていた。

「今の言葉なんでしょう？やけに自然と口に出てしまいました」
不思議そうな顔をしている鈴羽の頭を俺は撫でる。

「これもまたシュタインズゲートの選択か」

「なんですかそれ？」

鈴羽が上目遣いで俺を見た。

「なに、大した意味はない」

そう言っていると俺は笑みを漏らした。

ふたりぼっち（後書き）

いかがでしたでしょうか。

こつも鈴羽の性格が変わってしまうものかはわかりませんがそこはまあ気にしないで下さい。

では、読んでいただきありがとうございました。

迎合（前書き）

そろそろ話も中盤に行きますかね。
性格がおかしいかもしれません。ご容赦を。

迎合

あの後俺たちはタイムマシンをバラバラに分解した。
勿論売るためだ。

まあ、時間矛盾を起こさない為にそこまで売れる部品があるわけ
はないのだけれども。

時代が時代だったためか結構な値段で引き取って貰えて当面の資金
は工面出来そうだった。

「あの、岡部さん」

「なんだ？」

部品を換金した後公園に戻ってきた時に、鈴羽は俺に喋りかけた。

「このバッジのことなんですけど……」

「…バッジがどうかしたのか？」

「いえ……私のバッジの番号はNO8じゃないですか。そして岡部
さんはNO1。その間の数字ってなんで空いているんですか？」

それに所々削れてアルファベットが読めなくなってますし。

と鈴羽はバッジを見ながら言った。

「ああ、それは……」

ラボメンだ。と言いかけて俺は口をつぐんだ。

「なんだって？」

削れてる？

馬鹿な。

「鈴羽。ちょっとそれ、貸してくれ」

「だから、私は鈴羽さんじゃないですって」

鈴です。と言いなからバッジをこっちに投げた。

投げられたバッジを受け取ると確かにアルファベットの文字が擦れ
たというか、削れていた。何か来てるようにも見えるが、視認出
来なかった。

俺のバッジを確認してみても特に変化は見られなかった。

「やっぱ、時空を超えた時に擦れちゃったんでしょうか？」
だとしたら残念です。

と鈴羽は肩を落とした。

「時空を超えた……」

その言葉がやけに耳にひっかかった。

時空、時間、時。

「世界線か……」

確かに1975年に跳んだ際に世界線が動いたのを感じた。
だとしたら、バツジの理由も説明できる。

つまりは、そういうことなのだ。

「どうかしましたか？」

「いや、なんでもない。多分擦れてしまったのだろう」

はあ、残念です。とまた肩を落とした。

「まあ、気にしても仕方がないだろう。大丈夫だ。昔の事は俺がし
っかり覚えてる」

そう言つて頭に手を置くと、鈴羽はニカツと笑った。

「そうですね」

なら平気です。と鈴羽は言った。

さてと……

俺達が入った金で1Kのアパートを借りた。

普通のアパートだ。

金はあるのだからもう少しレベルの高い物件も借りれたのだが、そ
こまで資金が潤沢ではないので我慢した。

なにより鈴羽が気にいつてる様子だったので、俺も不満はなかった。
あらかた、荷物も運び、二人して畳に寝転ぶ。

まだ簡単にしか掃除してないせいか、少し埃っぽかった。

「しかし……もう少し安くならないものなのだろうか……」

「なにがですか？岡部さん」

俺の一人言に鈴羽が反応した。

「いや、これなんだがな」

そう言うと俺は先ほど買った雑誌を見せた。

「IBN5100……パソコンですか？」

「そうだな。パソコンだ。この時代では最先端の技術だから高くて正直個人じゃ手が出せない」

「こんなもの買ってどうするんですか？」

鈴羽は心底不思議そうな顔を向けた。

「そうだな……ラボメンを救うかな」

実際に救えるかどうかは知らないが、少なくとも俺はそのためによつてきたのだ。

「へえ……じゃあなんとしても手に入れなきゃダメですね」

鈴羽はそう意気込んだ。

「……なんだか、私にも関係がありそうですからね。このパソコン」
鈴羽は、そう一人で呟く。

やはり何かしらの因縁は感じているのかもしれない。

「ちよつと夜風に当たってくる」

考えても解決しなさそうなので俺は起き上った。

「あ、私も行きます」

と鈴羽も立ちあがり後ろからついてきた。

この時代は2010年に比べて、まだあまり開発が進んでおらず、自然が数多く見られた。

「静かですね」

「そうだな」

最近という言い方もおかしいが、最近こんなにゆったりとした時間を過ごしたのは久々だった。

俺達は特になにも言わず無言でブラブラしていた。

ふと歩いていると、フェイリスが住んでたマンションが建つあたりに来ていた。

当然そんな高層マンションも建っているわけではなく更地に近い感

じだった。

フェイリス達が生まれるのは、大体あと20年後か……
もう会うこともなさそうだな。

そう思いながら歩いていると、夜には似合わしくない喧騒が聞こえた。

喧嘩か？

と思つて野次馬根性で覗いてみると、いかにもというステレオタイプの不良数名と育ちが良さそうな、高そうな本を持っていた青年が対峙していた。

「だから、ここ通るには交通料いるの！！分かってん？」

「ここは公道。むしろ君達がどけ」

余程自分に自信があるのか、それとも世間知らずなのか不良を挑発するような言動を見せた。

案の定不良たちはガンを飛ばし始めた。

「いいのかな。お兄さん。痛いだけじゃすまないかもしれないよ？」
という脅しに対して青年は、下らないというようにため息をついてその場を通りすぎようとした。

その行動で完璧に堪忍袋の緒が切れたのか、不良数名が青年に襲いかかった。

「岡部さん。ごめんなさい」

「え？」

俺の後ろにいた鈴羽が何か呟いた気がしたので振り向くと既に俺の前に立っていた。

「多勢に無勢はカツコ悪いですよ」

鈴羽の声に不良が注意をこちらに向けた。

ゴソッ！！

次の瞬間、不良の数名が倒れた。

「え？」

俺は間抜けな声を出した。

鈴羽も予想外だったのか目を丸くしていた。

「ふう」

青年が一仕事終わった後のように額をぬぐった。

「て、てめえなにしゃがった？」

「別に。ただ、この本で殴った」

そうやって持っていた本を不良に見せると、確かに少し汚れていた。勝ち目が薄いと悟ったのか、チツと悪態を吐くと不良は倒れた奴らを担いでいった。

「私に加勢する必要なかったみたいですね」
あはは。

と勢いよく飛び出てしまった為に引つ込みがつかなくなってしまった鈴羽は照れたように笑った。

その笑みを見て俺は心底安堵した。

確かに鈴羽は2010年にラウンダー達を倒しているから心配はいらないだろうが、それとこれとは話は別だ。

「大丈夫ですか？」

と鈴羽は青年に声をかけた。

「ああ、なんだかんだ言っただけであいつらの隙を作ってくれてありがとう」

本の汚れを軽く払うとその青年は言った。

「というか、なぜ、女が先に出てきて男はいつまでもそこに隠れてるんだ？」

バレてた。

しょうがないので渋々路地から出た。

こうして正対して見ると俺と同じ位の年かもしれない。

「俺は運動が苦手だな。戦闘要員ではないのだ。なぜなら俺は狂気の……」

「偉そうに言うことなのか」

青年はため息を吐いた。

俺達に敵意が無いと分かったのか先ほどと打って変わって友好的な態度だ。

「さて、助けて貰った礼だ。飯でもどうだ？」

「え……私達はなにもしてないですよ？」
そう言うな。

と青年は俺達を連れだつてそこら辺の店に入った。

店内は仕事終わりの会社員達が各々酒に耽つていた。

「お、幸ちゃん。お疲れさん」

青年が入ってくるのを見ていた会社員がそう言うと、他の会社員も口口にお疲れと言った。

「ああ、気にしないでくれ。みんな父親の会社の社員なんだ」

そう言つて適当に空いていた席に座つた。

「さつきは、それなりに助かった。私の名前は秋葉幸高だ」

「秋葉幸高……」

どこかで聞いたことがある。

秋葉……

「あ」

「どうかしたか？」

「あなたは秋葉原の名士だな？」

「ん？まあ、親父がこちらの土地をかなり持っているのは事実だな」

秋葉は、それがどうしたという顔をしていた。

この青年は、フェイリスの父親だ。

実際に見たことがないから分からないが、恐らく間違いないだろう。

秋葉なんて珍しい名字はそうもない。

それに、俺達が出会つた場所もフェイリスが暮らしていた高層マンションの近くであつた。

「そういうお前は学者かなんかか？」

秋葉は俺の白衣を見ながら訝しげな表情を見せる。

「ふふ、良いだろう。俺の名前を聞くがいい。俺の名前は、鳳凰院
凶真だ」

「え？岡部さん何を言ってるんですか？」
ぐ。

鈴羽のせいで鳳凰院凶真の名乗りは失敗に終わった。

クスツと笑い声が聞こえた気がした。

「で、鳳凰院さん（笑）そっちの彼女は？」

「今、お前、（笑）ってつけただろ？」

さあ？と惚けながらも秋葉の顔は笑っていた。

「あ、橋田……鈴です」

鈴羽が簡単に自己紹介をした。

「ふーん。二人ともこれもなにかの縁だ。よろしくな」

今日は俺が奢るから食べてくれ。

そう言つてメニューを俺達に渡した。

それから俺達は他愛もない話をしながら楽しいひと時を過ごした。

「中々面白いなお前ら」

帰り際にメモ帳から紙を一枚破つてペンでさらさら何かを書いて俺に渡した。

「これが私の電話番号だ。なにかあつたらかけてきても構わない」

そう言つて、俺達と反対方向に歩いていった。

あれが、人の上に立つ人なんだと直感で理解出来た後ろ姿だった。

そして、俺はその後ろ姿に誰にも聞こえないように礼を言った。

ありがとう

と。

彼がいなければ、フェイリスが生まれなかった。

それに、2010年にIBN5100を俺達が手に入れることは無かったのだから。

迎合（後書き）

ありがとうございました。

これからも何人か出てくるかもしてません。

1975年（前書き）

さあ、いよいよ1975年は佳境に入って参りました。
ちなみに次は、話に場面を1985年頃にも移しますか…… W

1975年

「いい人でしたね」

帰り道鈴羽そんなことを言っていた。

確かに、いい人だった。

俺は手のひらの中の折りたたまれた紙を見る。

この番号にかけることはあるのだろうか。

何か困ったことがあるならかけて来いとのことだったが、正直かけたくなかった。

別にフェイリスの父親の人柄の問題ではない。

でも、フェイリスの父親に電話をかけることは、

そういうことだから。

安易にかけない。俺はそう決めた。

人柄と言えば、俺と年はそんな離れていないのに俺なんかよりずっとしっかりしている人だった。

「そんなことないですよ」

俺の心の声が聞こえたのか、鈴羽は一人で喋りだした。

「だって、秋葉さんや、他のどんな立派な人だって、私の為に過去に跳んでくれる人なんていませんから」

そう言うのと照れ隠しなのか、俺の数歩前を歩いて、くるりとこちらを向いてニカツと笑った。

台詞と笑顔に俺は顔がカアツと熱くなるのを感じた。

「あら、岡部さんもしかして照れてますか？」

案外可愛いところもあるんですね。と鈴羽は言った。

俺はそんな鈴羽の言葉に苦笑いで返した。

携帯もパソコンも普及していない時代。

こうして直に触れあうことしか出来ない時代。

そんな時代も悪くないと感じた。

「あ、見て下さいよ。岡部さん」

そう言つて鈴羽が指を指した先には神社があつた。

縁日でもやつていのかやけに明るく出店も多く見られた。

「ねえ、行つてみましょうよ」

俺の腕を掴んで、鈴羽は強く引つ張る。

連られて俺もそちらの光の方へ向かつた。

ピークの時間を少し過ぎたせいか、そこまで混んでいるという印象は受けなかつた。

そういえば、縁日なんて来たのはいつぶりだろうか……

大学に入つてからは勿論のこと、高校時代も行つた記憶がない。

恐らく、まだ小学生の頃にまゆりで行つた程度だろう。

「見てくださいよ。岡部さん」

そう言つて鈴羽はある出店の前に立ち止まつた。

小物や、アクセサリーを扱っている店のようだった。

「へいらっしやい兄ちゃん。もしかして、そつちの可愛い娘は彼女かい？」

「ふふふ。やつぱそう見えるみたいですよ岡部さん」

鈴羽は、ギョツと俺の腕を抱えて店主にアピールをした。

ふと、抱えられた拍子に柔らかい感触がしてなんとも言えない気持ちになつた。

妬けるなあと店主は笑いながら俺達を見ていた。

「あ、これ可愛いですね」

鈴羽は、一つの指輪を指さした。

サファイアを模した安い指輪だった。

「お、お嬢ちゃん。なかなかいい目をしてるね」

「はい。私九月生まれなんで」

そう言つと鈴羽は、顔を綻ばせる。

「なんで、サファイアを選んだんだ？」

「えーとですね。私、実は九月生まれなんですよ」

ですから誕生石はサファイアなんです。と鈴羽は、俺に説明した。

「そうなんだよ。兄ちゃん。石言葉は、『慈愛』さ」

いい彼女じゃねえか。兄ちゃんよと店主は俺を冷やかす。

「そこまで言うなら、店主よ。あなたに乗ろうではないか。これを一つ貰おうか」

店主は、毎度ありーと意気のいい声を上げた。

「え、いいんですか。岡部さん。あのお金は……」

「大丈夫だ。値段も安いし、俺のポケットマネーで十分買える。それにあの金はお前の思い出の結晶だからな。お前の為に使うのなら悔いはない」

そう言っつて鈴羽の頭の上に手を置いた。

すると鈴羽は、大人しくされるがままにしていた。

指輪を買つと俺達はその出店の集団を抜け出した。

人ごみで少し疲れたので、神社の縁側に腰かけた。

丁度死角になっているので、誰にも咎められることはないだろう。

「なあ、す、鈴」

「はい。なんですか岡部さん」

「ゆ、指を出せ……違った。て、手を出せ」

俺が言い間違えることも気にも留めずに、はい。と鈴羽は、手を差し出した。

端正な手だった。細くて長いしなやかな指には思わず息を飲んでしまふ。

「ほら、どの指にはめてくれるんですか？」

鈴羽は、俺で遊ぶかのように目の前で手をひらひらさせた。

「くつ、鈴よ。これではめられないではないか」

「別にいいですよ」

そう言つと俺の手からひつたくつて自分で勝手に指にはめた。

「こんなところで岡部さんに指輪をはめて貰ったら勿体ないですからね」

次の機会を期待してます。そう言っつて鈴羽は、照れ笑いを見せた。その笑い顔はとても気持ちのいいものだった。

俺達はまだ新しい住居に慣れていないせいか、結局家に着いたのは大分夜中になっていた。

「やっと着きましたね。岡部さん」

「そうだな。凄い遠周りをした気がする」

二人共疲れたのか家に着くなり、居間に倒れ込んだ。

電気も点けていないので月明かりだけが部屋を照らす。

月明りに鈴羽が勝手にはめたサファイアの指輪の光が反射していた。

「岡部さん」

「なんだ？」

「手を繋いでもいいですか？」

ああ。と俺が頷くと、鈴羽は、おずおずと自分の指と俺の指を絡めた。

「今は月明りしか見てませんね」

「そうだな」

俺が相槌を打つと、ふと俺の視界から月明りが消えた。

目の前に鈴羽の顔があった。

口唇に柔らかい感触が押しつけられる。

一瞬にも永遠にも感じられる。

まるで相対性理論かと思いだして、自嘲的に笑う。

「な、なにがおかしいんですか」

表情はうかがえないが、口調には焦りが見られた。

「別に大したことじゃない」

そう言つと俺は自ら鈴羽の唇を奪った。

誰も見ていない。

月明りの晩の出来事である。

1975年（後書き）

読了ありがとうございます。

最初から読んでくれる方も、最近読み出してくれた方も本当に感謝の気持ちで一杯です。

1975年 - ? (前書き)

どうも遅れてすみません。

少しづつですが読んで下さっている方も増えてきたようですね。限りです。

前回もチラッと言いましたが、この1975年は次回で終わって、次の時代に移ります。

1975年 - ?

あれから何事もないまま数日が過ぎた。

生活面には全く不満は無く、むしろ好調だった。

俺は一人暮らししたことこそないが、一応、洗濯も料理も掃除も人並みには出来る。

まるで、主夫みたいですね。と鈴羽に笑われた。

なにもない日々。

平穏な日々。

鈴羽と過ごす毎日は悪くなかった。

「では、おやすみなさい岡部さん」

「ああ、おやすみ」

そう言っつて鈴羽の頭を撫でると気持ちよさそうにしてすぐに規則正しい寝息が聞こえた。

「ふう」

俺は鈴羽が寝たことを確かめてから、バレないようにそっと部屋を出た。

「さてと……」

これからどうすればいいのだろうか。

別に俺は1975年に片道切符の旅行に来たわけではないのだ。

「IBN5100……」

全ての元凶となったレトロ、いやこの時代では新品のPCの名前を無意識に口走った。

俺はここ数日鈴羽が寝静まった後にフラリと外に出ていた。

別に目的は無かった。

ただ歩いている方が考え事はまとまりやすい気がした。

しかしまだ道を完全には覚えていないのでいつも同じルートを辿った。

「同じ道を毎日同じような時間に通るとはどうも御苦勞なことだな」

「え？」

丁度十一時を過ぎた所だっただろうか、そう言って誰かに声かけられた。

声のした方を向くと、秋葉幸高がいた。

この間会った時とは違い本もなにも持っていないかった。

格好もラフな感じで、彼も散歩をしている途中だったのかもしれない。

「秋葉……さん」

秋葉さんとはまた随分他人行儀だなと一笑に伏すと秋葉は俺に近寄ってきた。

「今日は、橋田鈴さんとは一緒じゃないのかい？」

あ、もしかして喧嘩でもしたのか。とニヤニヤしながら肩をポンと叩いた。

「いや、そんなことはない……」

俺の返答のトーンから何かあると彼は悟ったのか、どうしたと真面目な顔をして俺を見た。

「い、いや別に……」

「水臭いな」

恩返しとでも思ってくれよと彼は言った。

俺は彼になら話してもいいかもしれないと思った。

そうだ。結局彼の所にアレは行くのだから過程が多少変わった所になにも起きることはないのだ。

この世界線ではなにが起こるのか分からないが、前の世界線ではそう収束した。

今回もそれは変わらないだろうと漠然と考えた。

「実は……」

「待った」

俺が話始めようとする、彼は手で俺を制した。

「まあ、時間も時間だ。俺の家に来い。話はそこで聞いてやる」

「い、いやそこまで……」

俺が拒否する言葉も聞かずに彼は歩きだした。

しょうがないので俺もそれについていくことにした。

当然この時代に2010年の様な高層マンションは建っていないなかったが、それでも秋葉の家は大きかった。

「ここまで来て何を遠慮している」

「……」

俺が圧倒されていると、玄関口で秋葉が呆れた顔をしていた。

家の中に入ると客間に通された。

客間というだけあって豪華だった。

腰をかけてくれと言われた椅子は、今まで座ったことのないような柔らかさで落ち着かなかった。

「さて、聞こうじゃないか」

テーブルを通して俺の前に座った秋葉はそう言った。

「……単刀直入に言う。IBN5100はこの家にあるのか？」

「ない」

即答だった。

「そもそも俺は今まさか岡部からそんな単語が出てくるとは夢にも思わなかった」

お前は一体なにが専門なんだ？と俺を不思議そうな顔で見る。

「IBNってあれだろ、PCだろ。なんでも独自の言語システムによつて動くとか言う」

俺は首肯した。

「しかし、なんでまたそんなことを俺に聞いてきたんだ」

「実はな……」

俺はそこで言葉を止めた。

内心しまったと思った。普通に秋葉の立場なら、理由を聞いてきて当然である。

しかし俺にはその理由が答えられない。

未来から来たという台詞を誰が信じるのだろうか。信じてくれるはずがない。

「どうかしたのか？」

「い、いやなんでもない」

「そうか……と秋葉は俺を見た。」

「まさか、未来から来たとかって言うなよ。実は俺は未来から来てIBN5100がないと世界は滅亡してしまう。だから俺はそんな100年先の未来から来た未来人だとか言ったら笑えるな」

「そう言いながら秋葉は笑っていた。まるでそんな夢物語なんてありえないとでも言うように。」

「ビクッ！！」

自分でも分かる位動揺していた。

「おい、顔色が悪いぞ」

水でも飲むか？と水差しから水を注ぐと俺の前コップを置いた。

俺は水を一口飲んで、覚悟を決めた。

「秋葉：さん、聞いてくれるか？」

「ああ」

「俺は未来から来た」

後悔は無かった。

もしこれで帰れと言われたら、迷わずまわれ右をする気持ちだった。

「ほづ……」

俺の言葉に対して秋葉は眉を少し動かした程度だった。

「なあ、岡部。もう少し話してみてくれないか」

「ああ……」

俺はこの時代に来るまでの話をした。

何故この時代に来た理由を。

全部話終わると肩の荷が大分降りた気がした。

「やましいというわけではなかったが、やはり隠しごとをし続けるのは大分辛いものがあるだろう。」

「ふむ……面白いな。初めて会った時に秋葉原の名士と聞いてきた

のは偶然ではなかったのか」

秋葉の口から出たのは意外な一言だった。

「信じてみるよ。岡部、お前の話」

「ほ、本当ですか!？」

まず敬語を使うな気持ち悪いと言われた。

「正直な話は、お前が未来から来たというのは信じられないし、今時詐欺師ですら使わないような手口だ」
ただな。

秋葉は、俺を見て、目を細めた。

「お前が、橋田鈴さんを大好きなことは分かった」

「な……」

俺の顔が途端に熱くなったのを感じた。

「そう照れるな。橋田鈴さんとの話の所だけやけに感情が入ってたからな」

目の輝きの強さが違ったな。と秋葉は笑った。

「自分の愛する女の為に全てを投げ出した岡部は凄いと思う」

俺には出来ないな。色々なしがらみのせいで身動きが取れないからな。と苦笑した。

「いや、きつと秋葉にもそんな女性が現れるさ」

自称未来から来たって人間に言われるとそれはまた説得力が増すなと互いに笑った。

「とまあ……ひとまずは信じていいが、それとこれとは別だ」

「……どういうことだ？」

「なに、簡単な話さ。未来から来たのは分かったが、それと俺がI BN 5100を手に入れるということは関係ないだろ？」

「それは、その通りだ……」

「まあ、手に入れないこともない。俺もあのPCには興味を持って
いたのだからな」

ただ、手に入れるきつかけが欲しいなと俺を見ながら言った。

「何が言いたい？」

意外に学者って察しが悪いのなと秋葉は口を歪めた。

「この時代で幸せになれって言ってるんだよ」

随分とクサイ台詞を吐くなと秋葉は言いすてた。

俺は絶句してなにも言えなかった。

「まあ、二人が幸せそうだったら、例えば、結婚祝いとかで、俺の持つてるPCを贈ってしまいかもしれないからな。それが、偶然IBN5100を贈ってしまうこともあるかもしれない」

……俺は、

……俺はただ……頭を、下げた。

この時代でもこの人は俺達を助けてくれた。

目に熱いものがこみ上げてきたのを必死に隠した。

「それよりだな……その…岡部の2010年の話に出てきた私の娘の話なのだが……」

「はい」

「娘って言うのも変な話だな……その、秋葉って女の子は、楽しそうに生きているのか？」

俺は秋葉の眼を見てすっかりとうなずいた。

俺は、口が緩んだ秋葉の顔が容易に想像できた。

1975年 - ? (後書き)

読了ありがとうございました。

私の力不足もあり、ある種オリジナルに近い秋葉幸高氏を出してしまい賛否はあると思いますが、少しでも気にいってくれる方がいれば幸いです。

何かあれば遠慮なくお願いします。

1975年 ? (前書き)

更新遅れましてすみません。

アニメでは 鈴羽が出てきましたね!!

勝利宣言では思わず泣いてしました……

1975年？

俺が秋葉に俺達のことを話してから数日経ったある日、俺がまた夜道を歩いていると、

「よう未来人」

そう言っつて秋葉に呼びとめられた。

「また会ったな未来人くん」

「その割には随分と作為的な偶然だな」

まあな。と秋葉は笑った。

俺はあの日以来、秋葉に言われた通り敬語を止めていた。

なんでも、敬語はを使う人は皆、俺の肩書きに喋りかけているようで気分があまり良くないのだと言っつていた。

「さて、別に岡部に声をかけたのは勿論偶然でもなんでもないのだけれどな」

俺の家に来い。そう言っつと自分の家の方向に歩きだした。

俺も鈴羽も寝たし、別段用事もなかったので、大人しく付いていくことにした。

「一つ気にはなっつていたんだがな」

道中で秋葉は振りかえらず、まるで一人言のように呟く。

「岡部達は戸籍とかどうしてるんだ？」

まさか、生年月日が未来の年号の保険証なんて持つて行つても誰も信じちゃくれないだらうしな。と秋葉はこちらの意を気にせず喋る。

「戸籍がなければ、その人はいないも同じ。日本はそういう国だしな」

「……ッ」

俺は唇を噛んだ。そうだったのだ。俺はここで暮らす上で重大な事を忘れていたのだった。

戸籍。それは秋葉の言っつた通り何をすることも必要なことだった。

身分を証明できるものは全て2010年のものだ。俺の手持ちの一

番年号が古く印字されているので、俺の生まれた1990年代のもので、今から約15年後のことであった。

この国の人間が全て秋葉のようにもの分かりがいい人間であるはずがない。

これから、暮らしていくには金が必要だ。会社でもなんでもそれを証明するものが必要だった。

俺の心は、かつてないほどの絶望感苛まれた。

「さて、着いたぞ」

「ああ……」

俺は導かれるままに秋葉の家に入り、またあの応接室に通された。

「さて、大方さっきの俺の一人言を聞いていたか顔色がよくないみたいだが？」

秋葉は椅子に座ると、俺も座るように促す。

俺は命じられるままにただ座った。

「一人言を律義に聞いているもんだなお前は」

秋葉はクスツと笑うと視線を机に移した。

「何が：おかしいんだ秋葉？」

今の俺の心境は例えるならば、鈴羽とまゆりの死を永遠に保留し続けていた時と通ずるものがあった。

不穏な感じを俺から感じ取ったのか秋葉は笑みを消した。

「だから、さっきの一人言と言ったろう。つまりはこういうことだ」

そう言うと、どこから出してきたのか封筒を二枚出してきた。

俺は黙ってその封筒を開けた。

開けたはいいが中には数枚書類が入っているだけだった。

その中から無作為に一枚取り出して目を通す。

なにやら難しい言葉が羅列されていて、理解が難しかった。

「まあ、簡単に言えばこういうことだ。戸籍がないなら作っちゃまえっつてことだ」

秋葉そういってニヤリと笑った。

「まあ、そんな大それたことではないんだが、今そこにある書類は養子縁組に関する資料だ。苦勞したぜ、一応名前は重要かと思って、岡部姓と橋田姓の人の息子と娘にしておいた」

「なっ……」

俺は絶句した。そんなことが簡単にできるのだろうか。

「向こうの家族には許可とってあるし、お前らは戸籍を借りるだけだ。気にするな」

「面倒なことにはならないのか？」

「気にするな。会社内でやってることさ、誰にも文句は言われまい
「そうか」

俺はそれでようやく安堵して肩の力を抜いた。

「ただし条件がある」

「……なんだ？」

「岡部でも橋田さんでもいいが、俺に協力してもらおう」

「具体的に、なにをすればいい？」

「なに簡単なことだ。岡部達にしかできないことだよ。時代の節目を教えて貰いたい」

「時代の節目？」

「一体どういうことなのだろうか。俺にはさっぱり理解できなかった。」

「今は1975年岡部達が来たのは2010年その間に何かしら大きな事件が起きているはずだ。それを事前に教えて貰えばいい。」

人は目の前に落とし穴があると分かっていたら落ちる者などいないということだ」

悪くない話だろうか？そう言った秋葉はの顔は経営者の顔だった。

「別にその程度で未来が変わるはずもないだろうし、もし変わるって言うのなら、岡部の話を聞いた時点で変わってるだろうしな」

俺はゆっくりと頷いた。

それを見て秋葉は相好を崩した。

「じゃあこれからよろしく頼んだぞ鳳凰院凶真（笑）」

「だから、（笑）をつけるな」

そう言いながら俺は差しのべられた手を握った。

書類を持って、俺が家に帰ると鈴羽が起きていた。

「あ、岡部さんお帰りなさい」

「どうしたんだ鈴？こんな時間に」

俺は携帯で時間を確認すると、まだ深夜帯と言っている時間だった。

「岡部さんの姿が見えなかったので少し探してみました」

結局見つからなかったですけどね。と笑いながら言った。

そうやって笑っている鈴羽の目尻に涙が少し溜まっているのを見て俺は鈴羽を抱きしめた。

「え、あ、ちよっ。なにしてるんですか岡部さん」

「いや、なんでもない。心配かけてごめんな鈴」

はい。と鈴羽は頷くと俺の頭をゆっくりと撫でた。

頭を撫でられるのは存外気持ちがいいものだが、気恥ずかしいものである。

「それは俺の役目だろう？」

と俺は照れ隠しに悪態を吐いた。

「たまにはいいじゃないですか」

たまにはね。と言つて鈴羽は笑った。

「そ、そういうえは鈴羽って今なにかしたいことでもあるのか？」

「え？なんですかいきなり」

「い、いや少し気になったんだ」

「そうですね……タイムマシンのことを勉強したいです」

「……そうか」

やっぱり両親には会ってみたいもんな……

「鈴、大学に行ってみるか？」

「大学……ってなんです？」

鈴羽のいた時代にはなかったのか大学というものがよく分からないらしかった。

「そうだな……勉強する場所だよ」

「そうなんですか……岡部さんも一緒に行くなら行きたいですね……」

「……」

どうかされました？と鈴羽は首を傾げる。
俺はこの時代を生きる代償として秋葉と条件を飲んだのだ。そんな簡単に物事が進むのだろうか。

「実は……」

俺は鈴羽に先ほどの出来事を全て話した。

鈴羽は時々驚いたような顔をしていたが、最後まで何も言わずに聞いてくれた。

「私、秋葉さんに頼んでみます」

そう言うとアパートの外にある公衆電話の方へ歩いて行ってしまった。

俺も付いていこうとすると、岡部さんはここで待っていて下さい。と念を押されてしまったので大人しく部屋で待っていた。

時計の秒針が刻む音がやけに大きく感じた。これが独りだということが分かった気がした。

鈴羽をこんな目に合わせなくてよかったと心から思った。

それから実際には数分程度経った位だろうか、鈴羽は笑顔で帰ってきた。

「ど、どうだった……」

「秋葉さんって話の分かる方ですね。二つ返事で快諾してくださいましたよ」

自分に思い通りに事が進んだので鈴羽は、笑顔だった。

「そ、そうか良かったな」

はい。と喜ぶ鈴羽を尻目に俺は一抹の疑念を抱いていた。

確かに、友人としてならば、喜んで快諾するだろうが、秋葉の見せた経営者の顔を俺は忘れなかった。

何か向こうにもメリットがあるに決まっているのだが、真意が凶れなかった。

翌日秋葉に電話してそのことを尋ねてみた。

俺が喋り終わると、秋葉はクスリと笑った。

「流石、学者……いや、学者もどきだな。素晴らしい考察だと思う。簡単だ岡部達が学んだ技術を供与してもらおうと思っただから、悪いが、岡部達に行ってもらおう学校は東京電機大学という所に勝手に決めさせて貰った。そこで学んだ技術と岡部の知ってる未来を合わせれば、想像はつくだろうか？」

「ああ……」

「ま。今言ったことは全部ウソで、未来で娘が世話になった礼をするための方便かもな」

秋葉の真意は読めなかった。

1975年 ? (後書き)

読了ありがとうございます。

1975年の話は終わり次の時代に移ります。

やっと彼らが出てきます。

毎度ながら読んで下さっている方がいることに万感の思いです。
なにかあれば遠慮なくお願いします。

橋田助教（前書き）

1975年から12年後の話です。

今回はその冒頭です。

手さぐり感は否めませんがよろしく願います。

橋田助教

もう十年以上前のことなのか……

俺は、無精ひげを手で触りながらテレビを見ていた。

「なにがですか岡部さん」

コトツと俺の前にコーヒーを置いて鈴羽は俺の前に座った。

「いや、別になんでもない」

わざわざ悪いな橋田助教。そう言うのと鈴羽は止めてくださいと手を顔の前でパタパタと振った。

仕事帰りに、鈴羽の研究室に立ち寄ってみたのだが、今丁度一段落ついたようですぐにコーヒーを淹れてくれた。

あれから、12年後の1987年。俺は31歳。鈴羽は30歳になつていた。

鈴羽は本当にダルの娘かと今でも疑ってしまうほど顔が整っていた。18の頃に比べてなにか落ち着いたというかなんとというか、大人の色香というのかまあ、なんにせよ綺麗だった。

余程母親の遺伝子が優秀だったのだろう。と会ったことのない鈴羽の母親に感謝した。

「というか、その若さで助教とは流石だな」

俺が褒めると止めて下さいと露骨に顔を赤くして照れていた。

全く30になつても中身を余り変わってないのか可愛らしかった。

「そ、そんなこと言ったら岡部さんだつて、未だに。俺の名前は鳳凰院凶真だ！」つてやってたじゃないですか」

「う。そ、それは、酒の席での話だろ？」

俺は酒が弱い。

元々飲みたがりではないのだが、大学に行き始めてからは付き合い程度には飲まなければならず、度々飲まされていた。

その度に、あの鳳凰院のポーズをしてみようのだ。

しかも、なぜか大学時代はウケがよく、たまにせがまれて厨二病的

な発言も絡めながらよくポーズを取っていた。

……そのせいで、俺もまだ中身が19から成長していないのかも
れない。

「岡部さんの方は平気ですか？」

伏し目がちにこちらをうかがいながら、鈴羽は呟いた。

「ああ、問題ないさ」

俺がそう言つと、鈴羽は顔をパアッと明るくした。

「それは、よかったです」

「だから、俺はそんなに危険な仕事をしているわけではないと言っ
てるだろうが」

今、鈴羽は物理学の方面の学科で助教を務めている。

俺は、まだ秋葉の助言役をやっていた。

ちなみに本当は、俺に研究員の話が来ていたのだが、秋葉は、「お
前にはなるべく目立って欲しくない」と言つたせいで断つた。

そのせいで鈴羽が助教になっているのだ。

仕事と言つても会社員のような仕事ではなく事前に大事件や、事故
を思い出して、秋葉に伝えるというだけなのだ。

一応、怪しまれないように背広を着て会社に行つて、社長室の横に
ある部屋で鈴羽の書いた論文を読んだり、自分で書いたり、それ
なりに自由に一日を過ごしていた。

ただ、それだけのことでそれなりの給料を貰っていた。

秋葉曰く、仕事が出来人間はいくらでもいるが、未来を知ってい
るの岡部しかない。

とのことで、詳しくは分からないが、岡部の活躍に見合つた給料だ
から気にするな。と言われた。

秋葉も社長になったせいとか、普段は仕事に忙殺されているが、夜の
散歩も欠かしていなかった。

忙しいのにどうしてだと聞くと、秋葉は、

夜の散歩は思わぬ拾いものがあるかもしれないからな。

と俺を見ながらそう言つた。

「でも岡部さんの書いたこの論文良く出来てますよ」
興味深いです。そう言いながら鈴羽は、鞆の中から俺の書いた論文を取り出した。

この間、秋葉の会社にいる時に書いていたものだった。

「2010年の時の記憶はありませんけど、もうその時代には過去に電子メールを送る方法が確立されているんですね」

まあ、残念ながら、この論文に出てくる『メールを送れる携帯』とか『42型ブラウンテレビ』などは私には想像つかないんですけどね。と鈴羽は頭をポリポリと掻きながら苦笑した。

釣られて俺も苦笑した。

そうなのだ。俺が大学時代研究していたのもまた物理学、とりわけタイムマシン理論についてだったのだ。

2010年から来た俺は理論もやり方も分かっている。

しかし、俺はそれをこの時代に摺り合わせることは出来なかったのだ。

とはいえ、理論は興味深いとして、学会でキワモノ扱いされながらも一部の研究者からは評価されていた。

しかし、タイムマシンの研究で学会を追われたと聞くと思わず、ドクター中鉢を思い出す。

そう言えば、あの人の理論は2000年のジョントайターの書きこみをそのまま転用したような内容だったなと今更ながらの思い出した。

「私達、タイムマシンを捨てたはずなのに結局研究してますよね」

「やはり……」

「シユタインズゲートの選択だ。って言うですね」

本当に昔から変わってませんね。鈴羽は言った。

むう俺が唸ると鈴羽は満足そうに顔を綻ばせた。

…… 本当は、やはりダルの娘だな。と言おうとしたのだが、もうそんなことどうでもいいかと思いとどまった。

「そう言えば鈴。今日の帰りは遅そうか？」

いえ、もうこのまま帰ろうかと思いません。

そう言うと鈴羽は立ち上がって、流しにコップを置くと荷物を整理し始めた。

「もう帰れるのか？」

驚いた。てっきり忙しいのかと思って、帰ってくるのは深夜かと思っていた。

「岡部さんが迎えに来てくれたのに、帰らなきゃ悪いじゃないですか」

鈴羽は荷物を整理しながらそう呟いた。

その言葉を聞いて俺の顔が熱を持った。

どうもこういう言葉には未だに免疫は出来ない。鈴羽の顔は見えないが、きつと普通の顔をしながら言ってるのだろう。

俺は鈴羽の準備が終わるまでテレビを見ていた。

テレビでやっているニュースはリアルタイムだが、俺からしたら、生まれる前の情報なんだなと思うとなんとも言えない感情に包まれた。

「さ、帰りましょうか岡部さん」

座ってる俺に向かって鈴羽は手を差し出す。

その差し出された手にデジャビュを感じながら俺はその手を取った。

橋田助教（後書き）

読了感謝です。

読者様に聞きたいのですが、今回は飛ばしてしまいました。岡部達の大学生活を見たいという方がいらっしやいましたら、何かしらで伝えていただけたら嬉しいです。

牧瀬という学生（前書き）

テストが終わったせいもあってか更新頻度が上がるかもしれません。いつか、読んで下さってくれている人たちとチャットでもなんでもしてみたいな。思います。

ちなみに私は、ドラマCDを聞いていないので、牧瀬氏の昔は想像です。あしからず。

牧瀬という学生

コンコン

俺と鈴羽が研究室から出ようとするのと不意にドアがノックされる音がした。

「はい。どうぞー」

と鈴羽が言つと、ノックの主は失礼します。と丁寧な口調で部屋に入ってきた。

多分学生だろう。

品のいいワイシャツにズボンという社会人さながらの服装だったが、雰囲気はどこか学生らしいものがあつた。

「どちら様ですか？」

「あ、はい。僕は、牧瀬、牧瀬章一って言います」

「牧瀬……？」

その青年は、牧瀬と名乗つた。

確か紅莉栖の苗字も牧瀬だつた気がする。

助手とか、クリステイナーとか呼んでいたからどうも記憶が曖昧なのだが、恐らくそうだつたに違いない。

「それで、牧瀬さん。教授に何かよ用事かしら？まだゼミ関係の話は出ていなかったと思うのだけれど」

こうして見ると鈴羽が大学で教員をやっている実感が湧く。

少し鈴羽が遠くに行つてしまつたようで寂しい気がした。

「あ、いえ。少し橋田先生に聞きたいことがあります……」

「私に？失礼だけど、私の授業に出席していた生徒かしら？」

牧瀬は首肯した。

「残念だけど、成績の方はちゃんと適正につけるわよ」

研究室までくる熱心さは少し考慮に入れといてあげるけどね。と鈴羽は笑つた。

「いえ、成績のことではないんです」

大体、多分優は来る位の出来だったと自負してますから。
と牧瀬は自信満々に答えた。

「そう。じゃ、なにかしら？」

はい。そう答えると、牧瀬は鞆の中から束になった紙を取り出した。
「あ」

俺は、その紙の束に見覚えがあった。

「それは、私の論文ね」

勉強熱心ね。と鈴羽は目を丸くした。

「先生のタイムマシンの理論についての論文読ませていただきました。学生の僕にとっては何を言っているのか分からない部分もあつたんですが、世界線などの話は読んでいて感銘を受けました」

そう言つて力説する牧瀬の眼は好奇心の塊と言つていいほど目が輝いていた。

鈴羽は、そう。珍しいわね。その年で教授にもなつてない人の論文に目を通すなんて。と随分と冷静に受け答えをしていた。

「いえ。単にたまたま目についたから手に取つてみたら面白くて…

…それより先生」

タイムマシンって実際に存在するんですか？

牧瀬はそう聞いた。

ただの勤勉な学生の疑問だろう。

その質問に、鈴羽はクスリと笑つて、チラリとこちらを見ると、

もし、それがなかったら私はここにいないわ

と言つて研究室を出た。

牧瀬と俺も釣られて部屋を出る。

「なるほど……」

牧瀬は恐らく、成功する見込みのない研究が専門で助教になんてな

れるわけがないと合点したのだろう。

じゃあ、私達はここで失礼するよ。

牧瀬くんさようなら。

そう言うと、牧瀬はありがとございました。と軽く一礼して俺達と反対方向に歩いていった。

「中々面白い学生だったな」

俺が学生の頃とは大違いだ。

「そうですね。岡部さんは未来ガジェット研究所を作っていましたからね」

「そうだったな」

昔を懐かしむように鈴羽は目を細めた。

「ところで鈴羽。さっきの学生に最後に言った言葉の真意はどっちだ？」

「岡部さんが思ってる方できつと正解ですよ」

鈴羽は俺の指に自分の指を絡めながら言った。

まあ、確かに、タイムマシンが存在しなければ、俺達はここにいないんだからな。

この時代に作る事ができるかは別として。

そう考えると鈴羽はただ理論を語っているだけかもしれない。

「ま。そんな小難しいこと考えなくていいじゃないですか」

それより今日の晩御飯、何にしましょうか？

と鈴羽は俺を引っ張った。

「どうせ俺が作るんだからそこまで手のかからないものにしてくれると嬉しい」

「私を作ってもいいんですけど……」

「いや、遠慮しとく」

そうですか。と残念そうに鈴羽は肩を落とした。

別に鈴羽の料理は下手というわけではないのだが、材料が2036年の感覚なのか、虫やら、草やらで得体のしれない物が多いのだ。

味もおいしいのだが、いきなり「今日は、イナゴとカブトムシの幼

虫ですよ」と言われて気持ちよく食べれるほど俺の精神は強くなかった。

それに、一度、なんの料理だったか分からなかったが、体質的に受け付けなかったのか二日間ほど腹痛で寝込んだことがあってから料理は絶対に俺が作ることにしている。

それ以外の家事は大体折半している。

「じゃ、じゃあ肉じゃが作って下さいよ」

岡部さんの作る肉じゃががってジャガイモがホクホクしてて美味しいんですよね。

なんか、食べた記憶はないんですが、お母さんの味って感じがします。

「そうか？まあ、別にかまわないんだが……」

俺も自慢出来るほど料理がうまいわけじゃないから、そこまで褒められると逆にハードルが上がって辛い。

俺が作る料理のほとんどは2010年の時にラボで試しに作ったものか、母親の作ってる姿を後ろから見ていた程度のものだ。

なんにせよ、鈴羽が喜んでくれるのならば、特になにも言うことは無かった。

俺達は八百屋によって材料を買って帰路に着く。

「それにしても……」

俺が作った肉じゃがを美味しそうに頬張りながら、鈴羽は話を切り出した。

「あの学生さん。なんか変えたい過去でもあるのですかね」

それくらい意志がなきゃ大学の授業を受けているだけの教師の論文なんて読んでもわけありませんしね。

「もしかしたら、鈴に惚れたのかのしれないな」

「……ッ」

予想外のことを言われて驚いたのか、思いつきりむせていた。

「な、なにを言い出すんですか……」

びっくりしましたよ。と鈴羽は言う。

「強ち間違つてないと思うんだがなあ……」
「なんでですか？」
俺が惚れているからとは言えなかった。

晩御飯を食べ終えた後俺達は居間で二人して何をするわけでもなく、ただお茶を飲んでいた。

「鈴は……鈴。ちよつと散歩するか」

はい。と鈴羽は頷いて、外に出る準備を始めた。

「こんな夜に二人して歩くのは久々ですね」

「そうだったか」

「そうですね」

そう言うと鈴羽は俺の腕に抱きついてきた。

「お、おい」

腕に当たる、柔らかい感触に俺はドギマギする。

「いいじゃないですか。誰も見ていないんですから」

そう言うとさらに俺の腕に抱きつく力を強めた。

「まあ、そうだな」

幸い夜だし、知り合いに会わなければ一向に構わないか。

「ねえ……岡部さん」

「ん？なんだ」

「2010年のことをなんか話して下さいよ」

別に私のことじゃなくてもいいですから。と鈴羽は言った。

「そうだな……」

それから、俺は道中色々なことを話した。

ここらへんは、2010年には電気の街と同時に漫画やアニメの聖地になっていることや、メールどころかテレビも見れる携帯電話があるなど他愛のないことを話していた。

その一つ一つに鈴羽は驚いたり、興味を持ったり様々な反応していた。

「2010年……遠いですね」

その時私達は、50歳は超えてますね。と遠い目をした。さて、帰りますか。

と鈴羽は満足したように言った。帰り道、来た道をそのまま帰るのはつまらないと鈴羽が言ったので、違う道を通って帰ることにした。

「あ、見て下さいよ岡部さん」

鈴羽が指差した先には公園があった。公園にしては珍しくジャングルジムまであった。

鈴羽は俺の腕から離れてジャングルジムに昇った。

すると、年不相応な位流れるような動きで頂上まで昇ってしまった。

「ねえ岡部さん」

鈴羽は頂上から俺を見下ろした。

月の影になって表情はよく見えなかった。

「なんだ？」

鈴羽さんって誰ですか？

そう言った。

「だから、前に、鈴によく似た知り合いがいたんだよ」

嘘ですよ。と鈴羽は言った。

「別に、2010年にいた時に好きだった人の名前だったとしても構いませんよ」

岡部さんはその娘より私を選んでくれたんですから。

「……もう一度聞きます」

鈴羽さんって誰ですか？

十五夜の月が俺達を静かに照らしていた。

牧瀬という学生（後書き）

読了ありがとうございます。

何かあったら遠慮なくどうぞ。

考えてみると、2010年って凄い発展してますよねえ……

2010年の片鱗(前書き)

こんにちわ。

シユタゲ終わりましたね。

でもこっちはまだ終わる気配はなさそうです。
見て下さってくれる方には感謝を。

2010年の片鱗

俺と鈴羽の間だけ時間が止まったようだった。

多分時計の針は五分も動いていないが、俺にはそれが無限のように感じられた。

時間はいつも一定じゃない。

どこかの脳科学者が言っていたことを思い出す。

「それで……」

「まあ、待て」

鈴羽が同じ言葉を三度紡ぐ前に俺は鈴羽を制した。

「なんです？」

鈴羽は別に不機嫌な様子でもなく怒っているわけでもない。ただ、焦っているように見えたのだ。

「私の中にですね……最近あたしがいるんです」

鈴羽はこちらを向くのを止めて月を見た。

「別に病気とかそういうわけじゃなくて、岡部さんの言う2010年の頃の記憶かもしれません」

「……」

「まあ、そのあたしも今の私も岡部さんのことが大好きみたいですから余り気にはしてないんですけどね」

「鈴……」

「なんです？」

もうこっちに来てから10年以上経った。

別に話してしまっても何かが変わるわけではないはずだ。

それにいくら未来が変わろうが、どうでもよかった。

元々未来は未定なのだから。

「鈴……。鈴羽は、鈴だ」

俺がそう言つと、鈴羽はやっぱりですか。とため息を吐いた。

「まあ今まで隠していたのも辛かったでしょうから黙っていたことは不問にします」

心中は察します。と鈴羽はこちらに視線を移した。

「……」

それで、岡部倫太郎？

確かに鈴羽はそう言った。

確かにそう言った。

「す…鈴…羽？」

「あたしは阿万音鈴羽。けれど私が思い出したのはこのことだけです」

それですね。鈴羽は続けた。

「教えて下さい。なんで岡部さんは2010年を捨てて私について来てくれたんですか」

まあ、今となつては栓無きことなんですけどね。

と俺の返答を待たずに、鈴羽はジャングルジムから飛び降りた。

「全く…若くないのに無茶するな」

「失礼な。まだ、岡部さん位なら倒せますよ」

そう言つて拳を二、三回前に突き出した。

「それでだな。鈴……。俺がお前と共に来たのは……」

「いいんです」

私も岡部さんの気持ち分かってますから。

と鈴羽は笑った。

「分かってますよ。岡部さんが…その、私のことを…だ、大好きな事ってことくらい」

言つてて自分で恥ずかしくなったのか、鈴羽は顔を赤くして、目線を逸らした。

恥ずかしくなるなら自分から言わなきゃいいのに……

そう思ったが言わなかった。

「お、岡部さん！私はお腹が空きました！」

気恥ずかしさを紛らわす為か、鈴羽は、努めて明るいい声を出した。

「そうか、家でアイスを冷やしてあったと思うから帰ってから食べるか」

はい。そう頷くと鈴羽は俺の手を取って……

キスをした。

「んん！？」

人目を気にしたのか、一瞬だった。

しかし確かにキスだった。手を掴んだ不安定な体勢だったのでしっかりと唇を押しつけてきた。

「い、未だに慣れないんですね……」

ささっ早く帰りましょ。

鈴羽はそう言うと、俺の先を歩きだした。

「お、おい鈴」

俺は、反射的に鈴羽の肩を掴んだ。

「はい……ん」

やはり、10年以上経った今でもやはり慣れないものだな。

俺は気恥ずかしさからか唇を軽く拭くと今度は逆に鈴羽の手を引いて先を歩いていく。

「え、あ、ちよつと岡部さんつてば……」

夜風がやけに気持ちよく感じた。

俺達が家に帰るとドアの間に手紙が挟んであった。

「ん？なんででしょうかねこれ」

鈴羽が紙を取ると、そこには、岡部倫太郎へ。と書いてあった。

「岡部さん手紙ですよ」

ほら、と鈴羽に渡された手紙を俺は受け取る。

この時代で俺の事を知っている人間と言えば、大学の同期か、秋葉

位のものか。

案の定手紙は秋葉からだった。

秋葉の文字は硬質で読みやすかった。

要約するところである。

明日、彼女とデートをしてくるという内容だった。

正直拍子抜けした。

手紙をわざわざ渡してくるくらいだから緊急の用事なのかと思った。いや、本人にとっては緊急の用事なのだろう。

秋葉は確かに何でも卒なくこなす。

それはここ10年一緒にいて分かった。

しかし、仕事に熱心だった為か女っ気がなかった。

勿論、仕事上の付き合いは得意らしいのだが私事の方は余り得意じゃないらしい。

加えて、見合いも用意されるらしいのだが、どこぞの令嬢とか資産家の娘ばかりでなにか面白みに欠けるらしかった。

しかし最近、

「いい娘をがいたんだよ」

と上機嫌に俺に話してきた。

「岡部さん。秋葉さんに彼女さんが出来たんですか？」

後ろから手紙を覗いていた鈴羽が楽しそうに俺に聞いてきた。

俺は分からないとだけ答えた。

「そうだ。明日デートしましょうか岡部さん」

「は？」

鈴羽の提案に俺は呆気にとられた。

「鈴羽、お前大学の方は？」

確か明日は平日だったはずだ。

俺は秋葉がいないから休むことは容易に出来るが、鈴羽の方はそうもいかないはずだ。

「実はですねえ……」

そう言うと、鈴羽はペロリと手帳を開いてスケジュールを確認した。

「明日は休みなんですよ」

とまるで今書いたようにスケジュール帳には赤く『休み』と書いてあった。

まあ、鈴羽も大人だ。

自分のことは自分で管理しているのだろう。

「なら……久々にどこか行くか」

思えば最近鈴羽の仕事が多忙のために久しくどこにも行っていなかったと思いがす。

はい。とにこやかに鈴羽は頷いた。

その晩秋葉に電話をした。

俺は向こうで受話器を取る音が聞こえる。

「秋葉か？あの手紙は……」

「ああ、岡部か。明日は会社来るなってことだ」

じゃあな。そう言うのと秋葉は電話を切った。

ツイッターと電子音が耳に響く。

心なしかいつもより声が弾んでいた気がした。

全く30歳を超えているのに彼女とデートではしゃぐなと言いたい。

「まあ、俺が言えた義理じゃないか」

俺はそう呟くと、軽い足取りで布団の中に潜った。

2010年の片鱗（後書き）

読了ありがとうございました。

読んで下さっている方がいらっしやることは本当に励みになります。

これからも読んで下さるとつねしいです。

ある秋の日のこと（前書き）

こんばんは。

書きたいことが多くてどうにも長くなりそうです。

やはり二次創作いいものだと思います。

ある秋の日のこと

「起きて下さいよ岡部さん」

そう言っただけで誰かが俺を揺する。

俺が目を開けると隣にいた鈴羽が俺の顔を覗きこんでいた。

「おはよう……鈴」

おはようございます。と鈴羽は言った。

そうか。今日は久々にどこか行こうという話だったな。

鈴羽も大学が休みらしいし、俺も秋葉の都合で休みになった。

俺は寝ぼけ眼を擦りながら洗面所で顔を洗った。

「ふう」

冷たい水が顔に染みて一気に意識が覚醒した。

俺がタオルを探していると、鈴羽が、はい。と言って俺にタオルを手渡した。

全くよく出来たことだ。そう思いながら俺は礼を言ってタオルを受け取った。

顔を拭き終わるとタオルを洗面所にかけて窓の外を見た。

「ん？」

まだ少し薄暗かった。

確かに季節が季節だし、日の出は遅いはずだから、まだ薄暗いのも分からなくないが……

「鈴……今何時だ？」

「えっと……5時半です」

鈴羽は時計を確認しながら、にこやかに俺に言った。

「5……5時半だと」

思わず俺の顔が引きつった。

5時半起きなんて2010年でもした記憶がない。

普段はもっと遅く起きるか、徹夜して寝ていないかのどちらかだった。

最近30を超えてから、少し体力も衰えてきたと感じていたから、この早起きは少し辛かった。

「あの……迷惑でしたか？その……楽しみであんまり眠れなくて……」

上目遣いで申し訳なさそうに鈴羽は言った。

その目を見て俺は、うっと心に刺が刺さった。

「い、いや、確かに俺も楽しみだったし、早く起きて損はないから気にしてないぞ」

ありがとな鈴。そう言って、俺が頭を撫でると、もう子供じゃないんですよ。という台詞とは裏腹に鈴羽は、満更でもないという顔をしていた。

「そうなんですよ。岡部さん。どこ行くか決めて無かったじゃないですか」

思い出したように鈴羽は話しました。

「昨日、私が寝ちゃったんでどこ行くか決めてませんでしたよね」

「ああ、そう言えば、どこいくか決めてなかったな……」

そうだな……最近パンダが上野動物園に来たのはニュースでやっていたが2010年にパンダなんて見飽きていたし、混んでいるに決まっている。

そう考えてしまうとどこにも行きたいという場所が見つからなかった。

「鈴はどこか行きたい所でもあるのか？」

私ですか？と自分を指差して鈴羽は目を丸くする。

「実はですね……私は、岡部さんといればどこでもいいんですよえへへ。と少し口が緩みを隠しながら鈴羽はそんなことを言った。

これには思わず赤面する。

どうも、鈴羽は感情表現が素直だ。

そして素直な分聞いているこっちも照れてしまう。

「って待て。そしたら、どこ行きたいとか無いのか」

「そうですね。ただブラブラするのも悪くないですかね」

それならば、こんな早起した意味がないじゃないか。

口には出さないが、俺にはそんな思いがあった。

「あ、そうだ。行ってみたい所ありました」

「どこだ？」

「海に行きたいです」

また随分と突発な意見だった。

「随分と季節がずれていないか？」

今はもう九月だ。流石に海に入るのには肌寒い。

というか第一俺は水着を持っていなかった。

「なに言ってるんですか。泳ぎませんよ」

ただ海を久々に見てみたいなあと思っただけです。

「そうか……」

鈴羽の意見で海に行くことになった。

海か……。

久しく行った記憶がなかった。

30も超えたし、子供もいなければ、余程のことが無い限り海になんて行かないだろう。

だから、たまには海に行くのもいいかもしれない。

そう思った。

「じゃあ、そろそろ朝飯にするか」

そうですね。と鈴羽はエプロンを着けながら台所に立った。

ずっと俺ばかりに作らせるのも悪いと思ったのか、それとも料理の一つ位出来なきゃ、みつともないと思ったのか、朝など、時間に余裕がある時は鈴羽が、たまに作るようになった。

まあ、料理も慣れれば、ある程度の物は作れるだろうし、レシピさえあれば大外れするものもないだろう。

鈴羽は元々料理が下手なわけではないのだ。

ただ使う材料が少し一般受けしただけだったのだ。

最初の頃に比べて大分おいしくなったし、見た目も綺麗になっていた。

「はい。どうぞ」

そう言つて、鈴羽は机に鮭と御飯と味噌汁、それに青菜と納豆を置いた。

純和風な食卓風景である。

「こうして見ているとさ」

「はい？」

料理が終わつて使つた容器を水に漬けてエプロンを外しながら俺と反対側に座る。

その様子を見ながら俺は目を細めた。

「鈴つてよく出来た奥さんみたいだな」

「ひゃい!？」

鈴羽が変な声を出した。

動揺しているのか足をぶつけて、机が少し揺れる。

俺は味噌汁がこぼれる前にお椀を浮かせた。

「な、なにをいきなり言いだすんですか。お、岡部さん」

「いや、別に大した意味はない」

そつといいながら俺は味噌汁に口を付けた。

微妙な塩加減がなんとも美味しい。

「た、大した意味はないつて……」

なんですかもう……と言いながら自分も味噌汁に口を付けていた。

さつき言つた言葉は別に嘘でもなんでもないのだが、どうもこの年になつても俺は鈴羽と違つて素直に言うのは苦手だった。

俺と鈴羽が1975年にタイムマシンを使って来てから早10年。

もう十年も一緒にいるのだ。

秋葉には、ことあるごとにいつ結婚するんだ。とか、友人代表の挨拶はやらせる。とか、仲人は任せた。と言われている。

まあ、若干しつこい気もしいが、言いたいことは分からなくもない。

俺も、結婚……はしてもいいと思う。

まあ、時期が来たらその旨を鈴羽に伝えてみよう。

「岡部さん？どうかされましたか？」

俺が考え事をしている時間が長かった為か少し心配そうに鈴羽は声をかけた。

「あ、いや、鈴羽の作った料理に舌鼓みを打っていたのだ」

そうですか。それは良かったです。そう言つと鈴羽は、俯く。

それから、二人は黙々と朝食を食べた。

と言つても二人とも食べるのは早い方なので十分程度で食べ終わつた。

俺より先に食べ終わった鈴羽が俺が食べ終わったのを見ると、

「さ、さてじゃあそろそろ食べ終わったみたいですし、準備しましょうか」

スツと立ち上がつて、食器を重ねて流し場に持っていった。

「あ、俺がやるから、鈴は準備でもしておいてくれないか」

俺は流し場に立つた鈴にそう言つた。

そうすると、鈴はありがとございます。と言つて居間の方へ歩いていった。

ジャーと水を出しながら食器を洗つた。

洗い終わった食器に顔が反射していた。

そろそろ髭も剃らないと不格好だな。

俺は自分の顎を撫でながらそんなことを考える。

ジヨリつとザラザラした感触がした。

剃刀はどこだったか……俺は手を拭いて居間の方へ目をやった。

「あ」

「ん？なんですか？」

俺は着替えている鈴羽と目があつた。

別に今までも一緒に住んでいるのだから着替えには遭遇するのだが俺はまだ慣れない。

向こうは全く気にしていないようで普通に着替え出すから本当に目のやり場に困る。

まあ信用されていると考えれば悪い気はしないのだが。

「そのスタイルは反則だと思うぞ……」

「何か言いました？」

いや、なんでもないと俺は首を横に振った。

30 超えても肌にツヤがあるし、MTBにもたまに乗ってるせいか体全体は引き締まってる。

そのくせに女性的な所はちゃんと出ている。

……まじまじと観察してしまった。

「……流石にジツと見られる恥ずかしいんですけど」

鈴羽は、今まで着ていた服で体を隠した。

普段は見ない恥じらいの姿に何か感じるものがあつたが、俺の理性が堪えきつて剃刀を探す。

「何を探しているんです？」

俺が剃刀と答えると、それは洗面所ですよと言われた。

ああ、確かに。

剃刀は洗面所に置いてあるのを思い出すと俺は洗面所に向かった。髭を剃って俺が居間に戻ると、鈴羽は着替え終わっていた。

「岡部さんも早く着替えて下さいよ」

分かった分かった、と俺も着替える。

と言つても俺は余り服を持っていないのでシンプルな服に袖を通した。

先ほどまで着ていた服を押し入れにしまおうと襖を開けた。

「ん？」

押し入れの奥の方に俺が1975年時に着ていた白衣があつた。

この白衣は2010年の記念として、痛めたくないからと言って、この家を借りた時からこうして押し入れに入れていたものだ。

流石に古くなってしまふところ痛んでしまっていたがまだ着れなくないな。

おっと話が逸れそうだった。

その白衣のポケットをが妙に膨らんでいるのが気になった。

取りだしてみると中には携帯があつた。

勿論2010年の携帯なので電話をすることもましてやメールなんて出来ない。

試しにボタンを押してみるが流石に十年も持つ電池なんて存在していないので何も反応しなかった。

まあこれも思い出だ。

そう思つて白衣の中にまた忍ばせる。

「なにしてるんですか。岡部さん早く行きますよ」

先に玄関に行った鈴羽が俺に向かって叫ぶ。

俺は、悪い。と言つて白衣をまた押し入れの奥にしまつと鈴羽の方へ歩を進めた。

ある秋の日のこと（後書き）

読了感謝です。

長くなるかもしれませんが、読者様も飽きずに暇な時にでも、読んでいただけたら幸いです。

ある秋の日のこと ? (前書き)

こんにちは。

頑張って一週間以内の更新頻度を目指します。

タイトルは別に手抜きでもなく同じ日の出来事を表しているの
で決して手抜きではありませんよあしからずww

ある秋の日のこと？

「早くしてくださいよ。岡部さん」

先を歩く鈴羽は振り向いて俺を催促する。

振り向いた時に鈴羽のスカートふわりと揺れる。

2010年の頃はジャージにスパッツという格好だったが、流石にこの年のなつてもそのままというわけにはいかない。と大分前から履くのを止めていた。

その代わりにこの時代はタイトなスカートを好んでいるように見えて思った。

鈴羽曰く、ピッチリしている方が好きらしい。

「鈴が、歩くのが早いんだよ」

俺は正直言つて運動は得意な方ではない。

歩く速さも人並みだ。

対して、鈴羽は2010年に屈強なラウンダー達を倒しているのだ。どう考えても体力に差が出るに決まっている。

俺が息を切らしているのを見て鈴羽は、意外に体力がありませんねえ岡部さん。と言った。

い、いや確かに30歳を過ぎてから体力の衰えを感じたが……。

「ま。海は逃げませんから。気楽に行きますか」

そう言つと鈴羽は、ようやく追いついた俺の手を取る。

だから、これからは一緒に歩きましょうか。と小さな声で呟いた。

「お、おお」

俺は鈴羽の手を握り返す。

柔らかい。

鈴羽の手は俺の手に吸いつくように密着する

俺の知らないところでハンドクリームでも塗っているのだろうか。しっとりとしてそれでいてすべすべとしていた。

「鈴の手って……気持ちいいな」

俺がそう言っつて鈴羽の手を揉むと、鈴羽はくすぐったそうに、止めてくださいよと言った。

海と言っつてもそこまで遠出するわけでもなく、お互い明日は仕事もあるためそこまで遠くない場所を選んだ。

電車を乗り継いでいくにつれ、都会の喧騒から離れていく。

今日は平日ということもあってか電車に乗っている人は少ない。

「静かになってきましたね……」

「そうだな」

今俺達に乗っている車両は多く見積もっても十人には満たないだろう。

「本当に久々に遠出しましたね」

私たちがこっちにきてから初めてかもしれないですね。と鈴羽は言っつた。

「そうかもな」

こっちに來てからこの十年間は本当にあつという間だった。

勿論辛かったことも楽しかったこともあつた。

とにかく孤独だった二人は生きるのに必死だったのだ。

結果として、今では片方は大学の助教に、もう片方は未来の記憶を活かした相談役をやっている。

それはただの結果にしかすぎない。

十年間自分たちを口々に省みる機会もなかったんだ。

だから、ここらへんで一息ついてもいいだろう。

「岡部さん」

俺は鈴羽の声がしたので、隣にいる鈴羽の方に首を向けると、目の前に鈴羽の顔があつた。

「岡部さん」

「お、おう。な…なんだ鈴？」

俺は余りの顔の近さに圧倒された。

「なんで、さっきから私が話かけているのに『そうだな』しか言っつてくれないんですか」

もう。と言つて鈴羽は頬を膨らませる。

その年不相応の顔を見て俺は思わず笑いが漏れた。

「な、何が面白いんですか？」

鈴羽は自分がなぜ笑われたか理解できないように唇を尖らせた。

「いや、悪いな鈴」

そう言つと俺は鈴羽の頬を両手で押さえた。

「な、なんです……？」

突然の俺の行動に、困惑気味だった。

「なんとなくだ」

「そ、そうですか……」

むう……。とそう言われては返す言葉がないというように顔を少し朱に染めながら押し黙った。

事実、俺の行動に意味は深い意味はなかった。

本当にただなんとなくそうしてみたかつたのだ。

少し拗ねて頬を膨らます鈴羽の顔がたまらなく愛しかったから。

きつとこんなことを口に出して言える日は来ないだろう。

もしかしたらそう近くないかもしれないが。

「まあ、全ては運命石の扉の選択か」

そう言つと俺は唇を歪めた。

「30 超えても好きですねその言葉」

もう何回聞いたか覚えてないですよ。と鈴羽は言った。

「いつも、大した意味はないって言いますけど、岡部さんにとってはきつと大切な言葉なんですよね」

そう言つて鈴羽は窓の方に視線を向けた。

「わぁ、見てくださいよ、岡部さん。海ですよ。海」

そう言つて子供のようににはしゃいだ。

「私海見るのも初めてなんですよ。大きいですね」

鈴羽は、興奮気味に車窓の流れる景色に釘付けになった。

鈴羽の話によると2036年はSERENが構築したディストピアによって全ての人民が管理される世界になっているらしい。

住む場所さえも自由に出来ないのだから、海を見たことがなくても当然かもしれないな。

「海に来てよかったな」

俺がそう言うのと満面の笑みで、はい。と答えた。

俺にはその笑顔がただ、ただ眩しかった。

電車を降りると、海からの潮風が俺達を迎えた。

「なんか、海に来たって感じですね」

鈴羽は潮風に乱れそうになる髪を押えながら言った。

俺自身海に来るのは子供以来だったのでこの潮風は懐かしかった。

もう九月ということもあつてか泳いでいる人はおるか、砂浜にいる人もいなかった。

閑散としている。という表現がまさにぴったりな状況だった。

俺は砂にあまり汚れない座れる場所を見つけて鈴羽と俺の荷物を置いた。

「冷たいですね岡部さん」

バシャバシャと海の中に裸足で鈴羽は入った。

靴は水に濡れないように片手で持っている。

「ほら、岡部さんも来てくださいよ」

そう言つて鈴羽は俺を手招きする。

手招きされたので俺も大人しく海の中に入った。

冷たい。

それが第一印象だった。

こんな時期に海に来たことがなかったからか、余計に冷たく感じる。それでも少しすると体が慣れてきたようで冷たさを感じなくなった。鈴羽と同じようにバシャバシャと水を蹴ると、年甲斐もなく楽しかった。

「意外と楽しいものだな鈴」

ええ。と鈴羽は笑顔で頷いた。

俺達は二人でしばらくそうしていたが、お互いの体が少し冷えてきたので砂浜に戻った。

「気持よかったですねえ」

足についた砂を持ってきたタオルで拭きながら鈴羽は言った。

「ああ、まさかこの年で楽しいと感じるとは思わなかった」

遊びに年齢なんて関係ないんですよ。と鈴羽が得意げに言う。

俺はそうかもなと相槌を打って時計を見る。

まだ、13時を過ぎたところだった。

「鈴これからどうする？」

「そうですねえ……」

少し考える素振りを見せたのちに、もう少しここにいます。

鈴羽は、そう言った。

鈴羽の隣に黙って俺は座った。

二人の間に沈黙が流れる。

「ねえ、岡部さん」

そう言うと、鈴羽は、砂浜に降りた。

そして波がかかるか、かからないかギリギリのところまで何やら文字を書いていてた。

橋田鈴

どうやら自分の名前を書いているらしかった。

「あ」

名前を書き終わると同時に強めの波が来て鈴羽が書いた文字を消した。

その様子を鈴羽は、なんだか悲しい表情で見つめた。

「岡部さん」

「一ついいですか。と鈴羽は海を向いたまま俺に聞いた。

俺の方からは表情はうかがえない。

「なんだ？」

「私は、物理学者です。観念的に物事を考えるのは得意じゃないか
もしれません」

もし、私の……

阿万音鈴羽の記憶が、蘇ったら……
私はどうなるんでしょうか……？

鈴羽が砂浜に書いた「橋田鈴」という文字は跡形もなく消えていた。

ある秋の日のこと ？（後書き）

こんにちは。

あと一件でお気に入りが50になるそうです。

今まで見てくださった方、それにお気に入りまでしてくださいました方、さらにはお気に入りユーザーにして下さってくれている方のおかげで書く気持ちは湧いてきます。

作戦（前書き）

こんにちは。

本当はもう一つの小説の方を書こうと思いましたが、9月27日は鈴羽の誕生日ということで急遽こっちを書かせていただきました。やはり、岡部と鈴羽は幸せなっ欲しいものです。

作戦

「どうって……」

俺は返答に詰まった。

考えてもみなかった。いや、もしかしたら無意識の避けていたのかもしれない。

俺にとって今の橋田鈴としての鈴羽も、阿万音鈴羽としての鈴羽もどちらも鈴羽なのだ。

俺にはどちらかを選ぶ権利なんてなくて、どちらも選びたかった。

「ふふ……」

俺が返答に困っているのを雰囲気を感じ取ったのか、鈴羽はこっちを向いてニコリと笑った。

「今のは意地悪な質問でしたね」

さっきのは、冗談ですよ。さ、行きましょ。

そう言っただけ鈴羽は俺の手をぐいぐいと引っ張りながら砂浜を後にする。

嘘だそんなはずはない。

鈴羽が少なくとも橋田鈴があんな嘘をつくはずがない。

きっと自分の記憶が少しだけ戻ったあの晩、あの日から鈴羽が思っていたことだろう。

俺は即答出来なかった。

もし俺が、時間を戻すことが出来たら即答したかった。

鈴羽は鈴羽だ。

と。

「そう言えばですね」

鈴羽は砂浜から離れると先ほどとは違ってかわってテンションが高めに話をしている。

「先ほど駅のパンフレットを見た所この周り、というか電車の線

路沿いに料理屋さんとかが充実しているらしいですよ」

そう言っていていつ取ったのか、パンフレットを鞆から出しながら、にらめっこをしていた。

鈴羽のそんな様子を俺は辛そうと感じてしまった。

気丈に振舞っている。そう見えてしまった。

だからこそ、こんな時だからこそ俺がすっかりしなくてはいけない。漠然とそう思った。

「で、岡部さん。おやつはこのアイスクリームと、抹茶金時どちらがいいですか？」

「どっちも、冷たいものだな」

私が食べたいものですから季節は関係ありませんよと鈴羽は言った。俺が、抹茶金時と言うと、鈴羽は、実は私もそんな気分だったんです。気が合いますねと俺を見て笑った。

それから、その日は鈴羽がパンフレットを見て気になったものを見たり、食べたり、非常にゆったりとした一日を過ごした。

「楽しかったですね」

帰りの車内で鈴羽は少し興奮気味に言った。

もう車窓から見える景色は暗く、海も真っ黒に染まっていた。

「そうだな」

こういうことをデートと言うのだろうか。

「楽しいデートになりましたね」

そう言う鈴羽の顔を上機嫌そのものだった。

「……」

駄目だ。どうしても昼間の台詞が頭をよぎる。

あの時の鈴羽の顔は見えなかった。

どんな顔で言っていたのだろうか。

鈴羽が自分で言っていたように、「冗談に俺がどんな反応をするか伺う顔だろうか。

違うそれはない。そのことを否定する手段はなにもないのだが……。

「あ」

帰りの電車を乗り継いでいる途中に見知った顔が前を通ったので思わず俺は声を出した。

「ん？」

俺の声に聞き覚えがあるのか、その人物はこちらを見る。

「なんだ、岡部じゃないか」

仕事が休みでも会うとはな。と秋葉はクスリと笑った。

「お、会うのは久しぶりかな橋田さん」

こんばんはと鈴羽は軽く会釈をした。

「そういえば……」

秋葉も今日は彼女とデートがあるとか言っていたがどうだったのだろうか。

秋葉を見た所周りに誰か連れがいるようには見えない。

どこからどう見ても一人だ。

「秋葉まさか……」

またフツたのか。そう聞こうとすると秋葉は手で制した。

「まあ、その話はこれから酒でも飲みながら……」

そう言くと秋葉はおちよこで乾杯をするかのように手を動かす。

「まあ、久々に飲むのも別に構わないのだが……」

そう言っただけはチラリと鈴羽を見る。

鈴羽は明日も朝から授業があったはずだ。

流石に夜遅くまで飲んでいては辛いだろっか。

「大丈夫ですよ。岡部さん」

そんな俺の視線に気づいたのか鈴羽は少し笑った。

「うちで飲めば、寝たい時に寝れますから」

秋葉さんそれでいいですか？と鈴羽が聞くと、秋葉は勿論と答えた。

「こんな、自分の恋の話なんて出来る奴は周りにいないからな」

そう言っただけ、行こうか岡部と言った。

「ああ、そうだな」

こうして俺達三人は俺達の家に向かった。

「焼酎でいいか？」

ああ、と秋葉は頷く。

俺も正直強くないし、鈴羽はどうか知らないが二人で家で晩酌ということはまずしない。

それでも、たまに少しアルコールが欲しくなった時にちびちびと飲む為に焼酎一本は常備していた。

「芋か……」

お前らしいな。と秋葉が言った。

意味は分からなかったが敢えて聞くこともなかった。

「はい。どうぞ」

そう言っただけで鈴羽は、塩辛をテーブルに置いて床に座った。

そう言えば近所の人にどこかのお土産に塩辛を買ったのだった。

俺達は互いに晩酌すると、誰が言うでもなく乾杯した。

キンツとガラスの澄んだ音が耳に気持ちよかった。

「それでな」

お互いに酒が進んで徐々にアルコールが回ってきた頃に秋葉がそう切り出した。

「お前の予想とは反対に上手くいってるんだよな」

たまたま向こうの予定の関係で早く別れただけだったらしい。

「丁度、岡部達に会う数分前に別れたんだ」

そう言っただけでコップに入っている焼酎を一気に飲む。

度数は20度程度だが、ロックなのによく飲めるなと俺は思う。

「なんつうか、今回は上手くいきそうな気がする」

ボソツと秋葉そう言った。

「ちなみにどんな人なんです？」

鈴羽がそう聞くと秋葉は顎に手を当ててなにやら考える仕草をした。

「そうだな……背はそこまで高くない。うーん……あつ」

何かは思いついたように秋葉はこっちを見た。

「猫だよ。子猫とまではいかないがなんとなく、そんな表現が合うと思う」

自分の例え方が余程的を射たらしく自分で言っただけで自分で頷いていた。

「猫か……」

俺は秋葉の表現を繰り返す。

確かにフェイリスも自分でニャンニャンと名付けているし、猫耳もつけていて猫っぽい。

そういうものは、母親からの遺伝かもしれない。

「あの、岡部さん。大丈夫ですか？」

鈴羽が心配そうな顔でこちらを見ていた。

「顔が赤いですけど……」

「俺は飲むとすぐに顔に出るんだ」

まだ平気だよ。と言うと鈴羽はそうですかと言った。

「そういう鈴は平気なのか？」

はい。そう頷いた鈴羽の顔は素面と全く変わらなかった。

どうやら、この中で一番酒に強いのは鈴羽のようだった。

「さて、俺達も明日があることだし俺はそろそろ帰るわ」

そろそろ夜も更けてきた頃秋葉はそんなことを言っ立ち上がった。

「送っていくぞ」

俺はあの後酒を口にしていなかったたので、酔いは回っていないかった。

秋葉は俺の提案に悪いな。と言って賛同する。

「夜風が気持ちいい季節になったな岡部」

「…そうだな」

秋というより冬に近い夜風は俺達の火照った体を冷やす。

「で、なにか言いたかったことがあるんだろ？」

「え？」

秋葉の唐突な問いかけに一瞬思考が停止する。

「違ったら違ってたでいいんだけどな。なにか悩んでいる気がしてな」

そう言っつて、秋葉はまっすぐとした足取りで道を歩く。

「実は……」

俺の言葉が聞こえると秋葉は歩くのを止める。

俺は秋葉の後ろであたかも一人言のような口調で昼間のことを語った。

俺が話終わると、秋葉はまた歩きます。

「今からいうことは一人言だが……」
と前口上を口にした。

「きつと、橋田さんは不安なんだろうな。岡部のことだから、10年間好きだとも言わず、結婚しようとも言わず、なあなあな関係が続いてきた。自分がいた証が欲しいんだろう。もしこのまま橋田さんが消えてしまったら、俺達の記憶と、それから大学に名前がちらつと載っているだけだ」

そんなのは何も残ってないと同義だ。

そう言つて、秋葉は、喋りすぎたな。と大きな一人言を止めた。

「……なあ、秋葉」

「なんだ？」

「少し、お前の家で話したいことがある」

俺の言葉に何かを感じたのか、秋葉は、そうか。分かったと頷いた。

「……で、話したいことつてなんだ？」

家に着くとまた俺は応接室に通された。

数回入ってはいるがどうもまだ慣れない。

秋葉は、少し酔いが回っているのか、手短に頼む。と欠伸を殺しながら言った。

「お前の知り合いで、宝石……いや、指輪を扱っている人はいないか？」
「？」

「いるよ」

随分とあっさり答えられた。余りにあっさりと答えられて驚いた。

「サファイアでいいんだよね？」

「ああ……」

随分と話が早い。少し不自然なくらいに。

「なんだ？随分話が早く進むことが不思議か」

俺はは秋葉の問いかけに首肯する。

「なに。岡部なら、こうすると思っただけだ」

もう十年来の付き合いだしな。と素っ気なく答えた。

「橋田さんのサイズは？」

「なんのだ？」

「指のサイズだ」

「……知らない」

何分今さつき決心出来たことだったのだ。

そんな都合よく知っているわけがない。

「そうか……一応調べておけよ。こういうのは高価だから直すのも手間がかかるしな」

秋葉はそう言つと他になにかあるのか？

と言つような様子でこちらを見た。

「いや、今日の所は特にないな」

ありがとうと言つて俺は席を立った。

「まあ、一応指輪につける宝石はいくつか候補を出してやるから、それまでに調べておけよ」

じゃあな。と言つて俺は秋葉の家を後にした。

「……ただいま」

俺が帰ってきたのは大分深夜で鈴羽も寝ているだろうから静かにそつ言つた。

案の定鈴羽は寝ていた。

スースーと規則正しい寝息が聞こえる。

俺はその姿を見て安堵のため息を吐いた。

俺はチラリとカレンダーを見る。カレンダーは九月を示している。

もう残っている日曜日は27日しかないな。

俺は27日に作戦を決行することを決めた。

シャワーを軽く浴びて頭をドライヤーで乾かす。

この時期になると流石にシャワーだけでは寒い。

俺は布団に潜り込んだ。

横を見ると鈴羽の顔が間近にあった。

「鈴羽……」

愛してるよ。

誰に言うわけでもなく俺は呟く。

後になって気づいたが、奇しくも9月27日は鈴羽の誕生日だ。

これも、運命石の扉の選択か……

そう言って自嘲気味に笑うと俺は眠りについた。

作戦（後書き）

読了ありがとうございます。

なにかあれば遠慮なく言って下さい。ではまた近いうちに。

研究室にて（前書き）

おはようございます。

シユタゲのアニメが終わってもこの話は終わらないので見て下さってくれる方々には感謝です。

研究室にて

「岡部さん。朝ですよ」

起きて下さいと体を揺すられた。

「ああ……分かった……ありがとうな」

俺はとりあえず洗面所に行って顔を洗った。

冷たい水のおかげで目が覚めた。

昨日の酒は残ってないようで、意識もすっきりしている。

「昨日は随分と遅かったみたいですね」

二人分の朝食を準備しながら鈴羽はそんなことを言った。

きつとそのまま感じたことを言ってるだけなのだろうが、俺は少しドキリとした。

疾しいことなどなにもしていないのにも関わらずだ。

「す、少しな。秋葉の所で話込んでたんだよ」

そうですか。と鈴羽は納得すると配膳が終わったのか床に座った。

「ほら、食べましょうよ」

岡部さんと違って私は遅刻してはいけませんからね。と少し皮肉気味に言った。

はは。と俺は苦笑した。

確かに俺に定時の出社の義務はない。

だから今日は

「そつだ。鈴。今日は俺は少しやることがあるから一人で行ってくれないか？」

俺と鈴羽は目的地は違えど途中の駅までは一緒なので毎朝二人で行っていた。

分かりました。と鈴羽は頷くとひじきをつまんだ。

「じゃ、岡部さん片付けお願いしますね」

行ってきます。と鈴羽はいつも大学へ行く格好に着替えて大学へ向かった。

さてと……

俺は居間に向き直ってまず洗い物をした。

どうも汚いものがそのままというのは落ちつかないのだ。

洗い物が終わると俺は本来の目的にとりかかった。

「指輪はどこにあるかな……」

バカ正直に指輪のサイズを聞いたらきつと勘の良い鈴羽のことである。

勘づいてしまうだろう。

だからあくまで、バレないように調べたいのである。

「と言つても、指輪なんてあの時以来買った記憶がないんだけどな

……」

俺達が片道切符で1975年に来た時に出店で買った指輪以来買っていないかった。

その事実には素直に申し訳ないと思った。

「今度はちゃんとしたやつを買ってあげるからな」

その言葉に出して俺は誓った。

「あつた」

探し始めて数分で目的のものは見つかった。

鈴羽の私物を漁るのはいまいち気が引けたが、今回だけは許してもらいたい。

結果的に言つと俺はほとんど私物を漁ることはなかった。

鈴羽の貴重品箱の中で一番大事そうにソレが保管されていたのだ。

他にもそれなりの値段がしそうなネックレスなどもあつたのだが、

それよりも嚴重に。

思い出しに傷がつかないように。

自分の証明であるかのようにだつた。

「はは、安っぽいな」

慎重にソレを取り出して光に照らしてみる。

イミテーションのサファイアが安っぽく光つた。

それでもあの時の俺達には高級品だつたのだ。

昔を思い出して少しセンチメンタルになる。

2010年に置いてきたラボメン達はどうなっているのだろうか。ラボメンの顔ならば十年以上経った今でもありありと思い出せる。例え時代を超越しても、世界線を越えて二度と会うことが無くても宝であることは変わらないのだから。

そしてラボメンナンバー001狂気のマッドサイエンティスト鳳凰院凶真はラボメンの味方なのだ。

誰かが困っていたら迷わず助ける。

だからここに来たのも……

「いや、違うな」

尤もらしいことを言ってみたがどうも安っぽい。

本当は分かっているのだ。

言葉にするのは未だに憚られる。

昨日も言ってたじゃないか。と誰かに言われそうだな。

俺は鈴羽のことが……

「さあ、行くか」

俺は指輪を嚴重に包むとそれを鞆の中に入れて家を出た。

「よお。どうした。今日は遅刻じゃないか」

給料からひいておくぞ？と開口一番笑えない冗談を言われた。

「なに、ボケつとしてる？冗談もわからなくなったのか」

「冗談なのか」

それを聞いて少し安堵した。

「まあ、仕事をしているうちにはな」

この間は助かったよ。と秋葉は軽く礼を言った。

この間と言えば、秋葉に何かないか？と聞かれて、彗星がどうのこうのと言った記憶しかない。

彗星のことが何に役に立つのかは分からなかったが役に立ってよかった。

「あ、秋葉」

俺は持ってきた指輪を見せた。

「ん？」

あ、指輪か。と秋葉は納得したような顔をした。

「サイズは分からなかったから一応持ってきた」

俺は秋葉に手渡すと、秋葉は穴の大きさを見ながらブツブツと言っていた。

「大体9号位か……？」

そう呟いてメモに走り書きをしていた。

「よしよし、これでは大した問題じゃなくなったな」

指輪は給料三カ月分というから先に引いておくぞと秋葉は言った。

「しかし、ようやく決心がついたのか」

こちらら八年は待ったぞ。埃かぶったわ。と秋葉が言っていた。なんのことだろうか。

「いつどこで告白するんだ？」

「9月27日に公園で」

秋葉は公園？と不思議そうな顔を俺に向けてきた。

「そこが俺達の始まりの場所なんだ」

ラジオ会館もあつたがあそこは2010年の始まりの場所だ。

「なににせよ思い入れがあるんだな」

そう言つて秋葉は納得していた。

「というか、そんなこと聞いてどうするんだ？」

「ん？偶然その時間にそこを立ち寄ってしまうかもしれないというだけだ」

フフフと不敵に秋葉は笑った。

「俺はお前を信じるぞ……」

俺にはそれしか言えなかった。

俺達が話しているとコンコンと扉を叩く音が聞こえた。

秋葉がどうした？と聞くと秘書がひよっこりと顔を出した。

「お客様がお見えです」

客……？ああ分かった。と秋葉言った。

「そういうわけだ。指輪のサイズは任せろ」

お前はプロポーズの言葉でも考えろと言われた。

俺がお客さんが来るので部屋を出て、自分の部屋に入った。

秋葉に言われたわけではないがプロポーズの言葉を少し考えてみる。数個候補が上がったがどれもなにか決定打に欠ける気がしたので全て却下した。

全く昼間から何を考えているんだ俺は。

まあ仕事という仕事は与えられていないからすることがあるわけではないのだが。

「……よし」

秋葉には悪いが、少し会社を抜けさせて貰うことにしよう。

そう決めると、気づかれないように部屋を抜け出して、会社を抜け出した。

俺はその足で鈴羽の大学、俺の母校へと向かった。

正門から堂々と入れるのもスーツが成せる技なのだろうか。

むしろスーツで構内に入ってくる人間の方が怪しい気がするがどうやら認識は違っていたらしい。

俺は慣れた動きで研究棟に歩を進めた。

鈴羽のいる研究室の扉の前で足を止めた。

コンコンとノックする。

「どうぞー」

という声が聞こえたので俺は研究室のドアを開けた。

「あ、岡部さんこんにちは」

中には鈴羽が独りでなにやら調べ物をしていた。

こちらの室長、つまり教授は自分の講義がある時以外は大学に来ずに余所で研究をしているらしい。

だからいつ来ても鈴羽しかいない場合が多い。

個人的には突然の来訪に少しは驚いて欲しいものだが、週に2〜3回来ていれば慣れるというものか。

「今日は何をされにきたんですか？」

学生をあやすような口調で鈴羽は言った。

「いや、話相手になつて貰おうかと」

「なんですかそれ。と鈴羽は笑った。」

「その為にわざわざここまで来るとは……」

結構なことですね。と俺を見た。

「まあ、丁度一段落しましたからね。いいですよ」

お話しに付き合いますよ。と鈴羽は言った。

「でも……」

鈴羽はそう言うとき計をチラリと見た。

なにか予定でもあるのだろうか。

そんな時コンコンと外で誰かがドアを叩いた。

「どうぞ」

鈴羽がそう言うときドアが開いた。

そこには、この間見た青年が立っていた。

確か、牧瀬と言った気がする。

「なんだ？予定でもあったのか」

「いや、なんでも彼が質問があるらしくてね」

で、質問ってなんなのかしら。鈴羽は牧瀬を見た。

「あ、はい。実はここに所なんです……」

牧瀬は何やらレポートのような物を鈴羽に渡していた。

それを見た鈴羽はやれやれとでも言うようにため息を吐く。

「だから、牧瀬君。君がなにに興味を持つと勝手に勝手にね、タイムマシンなんて眉唾物に傾いちゃだめだよ」

「でも……」

「でも、じゃない。というか、タイムマシンの理論なんて勉強をし

てなにか目的でもあるのかしら？」

そこで牧瀬は押し黙った。

別に鈴羽は牧瀬のことが嫌いで言っているわけではないだろう。

むしろこれだけの熱意を他のことに向ければ大成するかもしれない

と思ってるのかもしれない。

「……分かったわ」

「……分かったわ」

沈黙に耐えかねて鈴羽はため息を吐いた。

「牧瀬君。君が物理学でもなんでもいいから学会で発表出来るレベルにまでなったら、科学者としてある程度の地位まで行くまで我慢することね」

そしたら私でもこの岡部さんでもタイムマシン理論についていくらでも教えてあげるわ。と鈴羽は言った。

牧瀬は、どうも納得出来ない様子だったのだが、一言ありがとうございませうと言った。

「まあ、私が暇な時は話を聞くくらいなら構わないけどね」

その言葉を聞くと牧瀬は少し安心したように一礼をして失礼しますと研究室を出た。

「彼は優秀なのか……？」

俺の問いに鈴羽はさあ？と答えた。

「タイムマシンなんてものに興味のある人間が素晴らしいとは思えませんけどね」

そう言っただけで鈴羽は苦笑する。

それは俺達を皮肉った言葉かもしれない。

未来を変える為に過去を変えろと言っただけで、いや神を超えた行為。

天に近づきすぎたイカロスは翼をもがれて死んだ。

俺達はどうなるのだろうか。

「あ、そういうのは岡部さん何か話すことがあるんですけどっけ？」

思い出したように鈴羽は言った。

「あ、そうそう。27日空いてるか？」

ちょっと待って下さいね。と鈴羽は手帳を開いた。

「はい。空いてますよ」

どこか行くんですか？と鈴羽は首を傾げる。

「ま、まあな。少し行きたい所があるのだ」

分かりましたと。鈴羽は赤ペンで『岡部さんとデート』と書いていた。

「随分と露骨に書くな」

「いいじゃないですか。事実なんだし」

確かにその通りなのだが。

直接的な表現は未だに苦手なのだ。

人前で鈴羽を彼女だと話すのも少し恥ずかしい。

「岡部行きたいところでもあるんですか？」

この間言ってくれたら良かったのに。と鈴羽は言う。

「今回はぶらりと買い物ものやらしてみたいと思ってな」

不自然がられないようにそう言った。

鈴羽はそれを、聞くと良いですね。ぶらぶらしたいです。と言った。

「そうか。なら良かった」

空けといてくれよ。と俺は念を押す。

はい。と鈴羽は返事をした。

その後は他愛もないような話をしながら時間を過ごす。

一時間位すると、鈴羽が時計を見て、そろそろと申し訳なさそうに言った。

「いや、こちらこそいきなり来て済まなかったな」

俺がそう言つと、いえいえ嬉しかったですよと言ってパソコンに向き直った。

釣られて俺もそちらを向く。

メールの受信画面だった。

何か海外とでもやり取りをしているのだろうか。

「あれ、珍しいですね。スパムですかね」

そう言つて鈴羽はそのメールをクリックした。

スパムと分かつてわざわざメールを開くというのもどうかと思うが。

「これってなんですかね？」

そう言つて鈴羽はパソコンの画面を指差した。

「なっ……」

そこには見知つた名前が表示されていた。

S
E
R
N
?

研究室にて（後書き）

読了ありがとうございます。

遂にSERENが出てきましたね。

これから先どうなるんでしょう………W
なにかあれば遠慮なくお願いします。

鳳凰院と中鉢（前書き）

こんにちは。

相変わらず短めですが投稿します。

読んで下さる方ありがとうございます。

鳳凰院と中鉢

SERN……

俺はその単語を聞いて2010年の出来事を急速に思い出した。

Dメールや電話レンジ、それにまゆりの死のことも。

強烈な感情が渦となって俺の中に押し寄せてくる。

感情が爆発しそうだった。

全ての元凶。

鈴羽が帰れないと分かっているのに片道切符の時空旅行を選ばざるを得なかった元凶。

感情の昂りに反比例するかのごとく俺の頭を急速に冷えていく。

「岡部さん。どうかされました？」

顔色が良くないですよ？と鈴羽は心配そうに俺の顔を覗きこんだ。

どうやら、俺はひどい顔をしているようだ。

顔を袖で拭くと嫌な感じの汗が袖についた。

「い、いや、なんでもない。それよりなんて書いてあるんだ？」

俺が大丈夫だ。と言った言葉を鵜呑みにしたのか分からないが鈴羽は画面に向き直った。

鈴羽は英語は話せないが一通りは読めるらしい。

「どうやら向こうもわざわざ英語で書き直してくれてるみたいで助かりました」

俺ではなんて書いてあるかさっぱりだが、鈴羽は時々頷いて見ていた。

「で、なんて書いてあるんだ？」

「えーとですね。単純に言うと、SERNで働かないかと誘われていますね」

なんでも私の論文の内容が興味を惹いたらしいですよ。と鈴羽は言う。

「SERNって確か表向きはタイムマシンは荒唐無稽だとか言って

ますけど絶対作るうと思ってますよね」

と鈴羽はそこで、はあ、とため息を吐いた。

「それで……どうするんだ？」

そうですねえ……

鈴羽はパソコンの画面をスクロールしながら少し考える素振りを見せた。

「別に行っても構わないんですけどね」

給料だって向こうの方が良いはずですからと鈴羽は随分現金的なことを言った。

「それは……本気で言ってるのか」

俺の口調に違和感を感じたのか少し鈴羽は眉をしかめる。

「嘘じゃあないです。研究をしたいという気持ちがないわけではありません。それに同じく日本人として、鳳凰院凶真に参加を依頼したいってありますよ」

「なに？」

俺は言われて画面に食らいついた。

そこには、ずらずら英単語が羅列されている中に、ローマ字で「hououin kyouma」と書かれていた。

確かに俺が大学生の時に発表した論文は全て鳳凰院凶真の名前で発表していた。

ふざけているように聞こえるかもしれないが、意外とちゃんと理由があつたりする。

論文を発表する際に秋葉に名前を隠してくれと言われていたのだ。

そこで俺の真名を使つたわけだ。

鳳凰院凶真が俺の真名といういつも鈴羽に、元の名前の方がかっこいいですよと言われていた。

「なんでも、岡部さんの理論は今の時代じゃ不可能かもしれないが将来性を感じられるって書いてありますよ」

俺の隣で見ていた鈴羽はそう付け加える。

「……」

正直個人的にはSERENに評価されても嬉しくないが、一科学者としてSERENに褒められるというのは悪くなかった。

「……さつきはあ言いました、私は行きませんよ」

その言葉に俺は鈴羽の顔を見た。

鈴羽は口を僅かに歪ませながらこう言った。

タイムマシンに興味ある連中が素晴らしいとは思えませんから。

ふふ。と鈴羽は笑う。

「そうか……」

俺は鈴羽の言葉に安堵の息を吐いた。

俺は身近にあった椅子に腰をかけた。

このわずか数分でかなり疲れた気がする。

俺にとつて10年以上前の2010年の記憶。

もうSERENなど存在すら忘れかけていた。

元はと言えばSERENがいなければ俺はこの時代にくることはなかったのだ。

その奇妙な因果に一抹の不安を感じた。

「ちなみにですね。私の論文は少しひねくれてまして、肝心な所を少しばやかして書いてます。だから鵜呑みにしてSERENが実験してもきつと失敗しますよ」

ああ、でも嘘は書いてないですよ。と鈴羽は付け加えた。

「なに不安そうな顔してるんですか、岡部さんらしくない」

こんなものはこうしちゃいますから。そう言うと鈴羽はメールをゴミ箱にドラックして投げ入れた。

「こんなものは忘れちゃいましょ」

だから岡部さんも気にしないでくださいと鈴羽に念を押された。

「鈴がそう言うなら……」

そつだ。別にSERENがこの世界線で絶対悪というわけではないのだ。

「どうも2010年のSERNのせいで穿った見方をしているのかもな」

それじゃ。と言って俺は鈴羽の研究室を後にした。

大学から抜ける途中に見知った顔と目があった。

「確か牧瀬……くんだったか」

「はあ、そうですが、何か？」

牧瀬はこの間のようないかにも大学生らしい格好をしていた。

「いや、なんでもない」

鈴羽と接している時とまるで正反対の応対だった。

露骨に敵意をむき出しにしている印象を受ける。

単に人見知りなのかそれとも知っているから敵意をむき出しにしているのだろうか。

「まさか…あんたは、橋田さんを狙っている機関の職員なのか？」

牧瀬は俺を訝しむような眼で見つめた。

「は？」

俺はあっけにとられて間抜けな声を出した。

機関？職員？どこかで聞いた気がする……

「何を言っているんだ？」

「とぼけても無駄だ。そうか、だからあんたはいつも橋田先生の近くににいるのか」

ちよっと待て。勝手に一人で納得している。

「橋田先生は渡さない。アインシュタインの弟子である宇宙を示す究極の形8を冠する中鉢の名に懸けて」

そう俺に宣言した。

「はあ……」

俺はまだ呆けている。

「どうした？核心を指摘されて慌てているのか？今すぐ橋田先生の元から立ち去るのであるならば命だけは助けてやるっ」

そう言っつて牧瀬はニヤリと口を歪めた。

ああ、そうか。

なるほど。

コイツは、俺と同じなのか。

「ん？中鉢？」

そうだ。俺は中鉢だ。牧瀬はそう言ってニヤリと笑った。

「中鉢という名前はだな、我が偉大なる師匠であるアインシュタインが俺にタイムマシンの研究に危険が付きまとうからと言ってつけてくれた俺の真名だ」

牧瀬章一は世を忍ぶ仮の名前にしかすぎない。と言っていた。

中鉢と言えば2010年に俺がインチキだと批判した相手ではなかったか。

それが牧瀬という名前……

「偶然にしては出来すぎてるな」

俺は笑いを噛み殺すように下を向いた。

そうか、そういうことか。

全く、あいつもこんな奴が親とは災難だな。

「何がおかしい」

俺が笑っているのを不機嫌そうに牧瀬は見つめる。

「よかるう。貴様が真名を名乗るならこちらも名乗らねばならないだろ」

どうやら鈴羽は俺たちみたいに変わり者に好かれるらしいな。

俺は2010年に戻ったような気持ちになる。

「俺の名は、フェニックスの鳳凰に院、それに凶悪なる真実とかいて凶真。鳳凰院凶真だ」

そう名乗って高笑いした。

白衣ではなくスーツなところが若干、年を感じさせた。

周りにいた学生が何事か一瞬こちらを振り向いたが、関わらないほうがいいと悟ったのだろ。

見なかったふりをして足早に歩いていった。

「どうやら、貴様と俺は時空を超えても対峙する運命にあったようだな」

そう言っ指を指した。

今度は牧瀬が呆気にとられていた。

「そうか……貴様が鳳凰院凶真か」

ギリツと歯ぎしりする音が聞こえた。

「荒唐無稽な理論を発表する不届き者が其の名であることは知っていたがまさか貴様のような人間とはな」

フンッと牧瀬は鼻を鳴らした。

「良かろう。貴様をこの中鉢の好敵手として認めてやる」

そう言っ、牧瀬は立ち去った。

俺はその後ろ姿を見ながら、ふうと溜息をついた。

「全く昔の俺がああいう風だったとは想像したくないな」

俗に言う黒歴史というやつか。

もしその時のムービーでもあったら俺は悶絶してしまうだろう。

話しているうちに分かった気がする。

あいつは鈴羽に恋をしている。

いくら恋愛に疎いと言われる俺でも理解できる。

恐らく叶わないとどこかで分かってながら。

だから、頻繁に質問をしにくるし、俺に対して敵意をむき出しだったのだ。

もしかしたら2010年の中鉢が発表したタイムトラベル理論はジョンタイターではなく、橋田鈴の論文を模したものではなかったのか。

約束通り物理学を学び、学会で発表し、ある程度の地位まで到達した牧瀬はタイムマシン理論に傾倒したのではないのだろうか。

自分の思いを寄せた師に教えを請うために。

「まあ、俺には関係ないことだな」

所詮俺の妄想にすぎない。

それにその予感が当たっようがいまいが、もうその世界線はなかったことになってるのだから。

「さて……秋葉の会社にも戻るか」

そうやって俺は大学を出て会社の方へと足を進めた。

鳳凰院と中鉢（後書き）

読了感謝です。

物語がそろそろ動きだしそうという感じになりました。

いやはや、厨二病を書くのは恥ずかしいですね。

独白（前書き）

連日の登場ですww

原作が終わったのにもかかわらず見続けて下さる方には本当にお礼を言いたいですね。

独白

……岡部さんが帰ると私はパソコンのデスクトップ上にあるゴミ箱のアイコンをクリックした。

当然パソコンは私の指示に従ってゴミ箱の中身を見せた。

何回見ても変わるはずはないのに。

私は何度もそれを見てしまう。

いつそのこと削除してしまえばなかったことに出来るはずなのに。

私はそれが出来なかった。

理由は分からない。

ただ、なんとなくだが、このゴミ箱の中身を消してしまおうという気にはならなかった。

SERN、SERN、SERN……

私のゴミ箱はSERNからのメールで一杯になっていた。

厳密に言うと一杯ではない。

だから、ゴミ箱から溢れることもない。

物理学者にしては妙に詩的だな。と言っていて自分で笑えてきた。

岡部さんの態度から見ても2010年にいた時にSERNとひと悶着あつたらしいですね。

それも悪い方向で。

それはきつと巡り巡ってあたしに関係のある話なんだと臆気を感じた。

私はゴミ箱を消すと頭を押さえる。

最近あたしの記憶がフラッシュバックすることがある。

SERNからメールを貰ってからは特にそうだ。

顔も名前も思い出せないはずの人達と楽しそうに話している夢。

真っ暗な闇の中をひたすら逃げ続ける夢。

あの赤みのかかった髪が印象的に彼女は誰なのだろうか。

彼女に対して狂おしいほどの憎しみとそれとは対照的な日向のよう

な温かい感情が渦巻いていた。

そして岡部さんはいつも何か一生懸命だった。気がする。そういう白昼夢を見る時がある。

「きつと夢なんじゃないんだらうなあ……」
薄々気づいている。

これはあたしの記憶だ。

阿万音鈴羽の記憶だ。

私と同じ体で18年間生きてきた存在。

果たして私はあたしの記憶が完全に蘇った時岡部さんと普通に接することが出来るんですかね……

珍しく弱気にもなってみる。

幸い、研究室には誰もいないから私の弱い所は誰にも見られることはなかった。

私のそんな気持ちを見無視してパソコンがメールを受信した。

「またSERENですか……」

一日に二通来たのは初めてですけど。

とりあえず開かないのも悪いのでそのメールを開いた。

今回は英語もほぼ書いておらず、意味不明な数字とアルファベットの羅列とURLが表示されているだけだった。

私はよしたら良いのにそのURLをクリックしてしまった。

クリックに反応してパソコンは指定された画面を表示する。

PDF形式のファイルのようだ。

なにやらパスワードを打つ形式のようで、パスワードを入力して下さい。と表示されていた。

そこで私はメールに書かれていた意味不明な文字の羅列を入力した。案の定それがパスワードだったようで、認証しましたと表示されてロックが外れた。

「ゼリーマンズレポート？」

PDFの一番最初にそう書いてあった。

ゼリーマンとはなんかの隠語なのだろうか。

私は好奇心にかられてさらに読み進めた。

「……」
「どうやらこれはタイムマシンの失敗例のようだった。」

「これが過去にSERENが送った人間の末路ってことかしら……」
レポートは数種類あったが、全てに赤文字で『human is
dead mismatch』と書かれていた。
つまりまあそういうことだろう。

全てのレポートの途中辺りで黄緑色をしたやや透明感に欠ける煮こ
りりのような物が混じった人型が映っていた。

どれも壁に埋まっていたり轢かれていたりしていて原型を留めてい
ないものばかりだった。

尤も原型を留めていたとしても体がゲル状になっている時点で無意
味だけだね。

カーブラックホールの特異点を使って過去に行くという方法みたい
だけど、まだまだ確立出来ていないな。というのが正直な感想だっ
た。

「ゼリーマンズレポートって全く捻りもとんちでもなくそのままの
様子を評したもののね……」

個人的には少しは捻って欲しいものだ。

しかし、SEREN側が私にこちらを見せた真意が掴めなかった。

こんなに犠牲を生むのなら参加したくないと考えるとという予測は立
てなかつたのだろうか。

それとも、秘密を知ってしまったては生かしておけないと、私を亡き
者にするための口実作りかしらね。

自分から秘密を見せてそれはないだろうに……

私はコップに注いだコーヒーを口に含んだ。

口全体に苦みが広がる。

やっぱり私はシロップを入れなきゃ飲めませんね。

そう言っただけの苦さのあまり顔を歪めた。

岡部さんがブラック飲みながら、『やはりコーヒーはブラックに限

る』と言っていたので、少し真似てみましたがやっぱり無理でした。私はシロップを入れてコーヒーを飲み直した。画面をスクロールしているといつの間にか最後のページになっていた。

『検体NO・X 橋田鈴』そう書いてあった。

そして例にも漏れず、赤字で『human is dead mismatch』と書いてあった。

レポートの中の私はゼリー状になって壁に埋まってました。

それを見て私は理解しました。

彼らが私にこれを見せたわけを。

これは警告だ。ということでしょうね。

我々の要求を飲まないのならこういう風になってしまうかもしれないぞという警告。

高々一人の極東の科学者のために大層なことです。

SERNも案外暇なんですかね。と軽口を叩いてみる。

努めて思考を冷静に保つ。

いつまでこの余裕が続くかは分かりませんが。

気づくと私のコップを持つ右手がカタカタと小刻みに震えていた。

コップの中に残っていた少量のコーヒーの水面が手の震えに合わせて小刻みに揺れる。

私は震える手で残っていたコーヒーを一気に飲み干した。

ふうとため息を吐くと震えは治まっていた。

「岡部さんは強いですね……」

誰もいない研究室でほそりと呟く。

日の入りも早くなってきたからか早くも研究室にも陰が差してきた。私の前のパソコンだけが煌々と光っている。

きつと岡部さんは2010年で似たような経験をしてきたのでしょうか。

それでもこの大きな組織に抗い続けた。

「私には無理だなあ……」

自分の白衣をきつく握りしめる。

爪が指に食い込んで少し痛かった。

ふと誰もいない研究室を見渡す。

この研究室は今の私の心のようにだった。

さながら私は、暗がりにも包まれた中、たった一つの光に導かれて飛んでいく羽虫か。

なに、言ってるの？あたしがいるじゃんか。

頭の中に自分の声が響いた。

正確には私の声も姿も一緒の別人。

2036年と2010年の記憶を持った別人格とでも言うのかな。

私は目を閉じる。

あたしと話すために。

初めまして。というのかお久しぶりというのか分からないけど

鈴羽さんですよ？

うん。

残念ですけど、私はあなたがいた時代のことをほとんど覚えてません。

うん。

こうして会話していることは幻想なんですか？

さあ？

そう言うと目の前にいる鈴羽は笑った。

まだあどけなさの残る明るい笑顔だった。

私はどうすればいいんでしょう？

あたしには分からないよ。だけど、あたしはあなた。あなたは

あたし。あなたの決めたことに文句は言わない。

だから頑張れ。橋田鈴。そう言って背中を押された気がした。

他ならぬ自分自身に。

私は目を開いた。

目の前のパソコンにはゼリー状になった私の画像が表示され続けていた。

もう恐怖も何も感じなかった。

私にはあたしもいるし岡部さんもいる。

何を恐れることがあるうか。

岡部さんに話して一緒に対抗する術でも考えましょう。

「でも、ま。今日位は甘えてみてもいいですよね」

私はそう独り言を言うと私は携帯を取り出す。

もう少し小さくなってくれると嬉しいんですけどね。

私は押し慣れた番号を押す。

数コールの後向こうが電話に出る音が聞こえた。

「もしもし、鈴か？」

「そうですよ」

「どうかしたのか？」

「いえ、岡部さん…今日一緒に帰りましょ。それにどこかで外食しましょ。岡部さんの奢りで」

電話口で岡部さんがえっと聞き返す声が聞こえた気がしましたが、私はでは駅で待ち合わせで。という電話を切った。

たまにはこんなのもいいですね。そう言っって私は笑った。

私の心はもう暗くなかった。

独白（後書き）

読了感謝です。

今回はほぼ鈴羽だけの登場でした。

個人的にはこつこつという独白は好きなので機会があればまた書きたいかもしれません。

帰り道（前書き）

お久しぶりです。

やっと戻ってきました

これからも応援お願いします。

帰り道

俺は鈴羽に呼び出された。

いきなり電話があつたから、もしやSERN絡みの話かと体に緊張が走つたが、どうやら夕飯のお誘いだつたようだ。

鈴羽の方から何か食べたいなんて言いだすのは珍しい。

俺は財布の中を確認して顔をしかめる。

足りないことはないが念のため……

俺は少し寄り道をして金を下ろすことにした。

「あ」

しまった銀行はもう閉まつている。

コンビニにATMは……ないだろうな。

流石にこの時代にATMがあるわけがない。

仕方がないので俺は道を戻つた。

俺は道中することがないので考え事をしていた。

確か2010年の鈴羽は1990年代に記憶を取り戻し錯乱状態で

最後は…自殺したはずだ。

しかし、今の鈴羽は記憶を少しずつ取り戻しているに違いない。

俺はあの晩を思い出す。

岡部倫太郎？

フルネームで呼ぶのは鈴羽の癖だつた。

この分だと鈴羽は記憶をとり戻しても平気な気がする。

その為に俺が来たのだからな。

俺は電車に乗って待ち合わせ場所に向かう。

待ち合わせ場所は俺達の住居の最寄り駅だつた。

電車の車窓から流れる景色を漫然と見ていた。

流れる景色は不可逆だ。

何かを忘れていてももうその地点に戻ることは出来ない。

それこそ俺達のようにタイムマシンでも使わない限り。

そこでふと俺は思い至る。

鈴羽の記憶喪失はある種確定事項だ。

しかし……

「俺自身が記憶を失っているとしたら……？」

いくら俺の体にリーディングシユタイナーが宿っていたとしても3
5年も時間を逆行すればなにかしら不具合を生じるかもしれない。

世界線が変わったという感覚は確かにあったのだが。

もし俺が記憶を失っていたとしてもその事象を確認する術はどこに
もない。

「否定も肯定も出来ない……か」

別に悲觀的になることもないが、言いようのない影に足を掴まれた
気がする。

何か大事なことをしていないのではないかと。

まあ良いだろう。

「全ては運命石の扉の選択か……」

もうこの言葉を使つてどの位経つのだろうか。

いつも大した意味は無いと言ってるが、あれは嘘だ。

この言葉を使うおかげで俺はいつも自分を奮い起すことができる。

そういえば、steinsはドイツ語のジョッキという意味だった
な。

誰かからそんな言葉を聞いた気がした。

そろそろ変えてみてもいいかもしれないな。

そんなことを漫然と考えているうちに俺の最寄り駅に着いた。

「あ、岡部さん」

お仕事お疲れさまです。と鈴羽は一瞬こちらを見ただけで視線を戻
すとそう言った。

鈴羽は何かを見ているようだった。

「なにを見ているんだ？」

「これです」

はい。と手渡されたのは十円玉だった。

「ここに描かれている建物の名前知ってますか？」
平等院鳳凰堂って言うんですよ。と鈴羽は言った。

「なんだか、響きが鳳凰院凶真と似てますよね」
そう言っただけで笑った。

平等院鳳凰堂と、鳳凰院凶真……似ているというか、半分くらい文字が被っている。

昔もそう言われていた気がする。
誰に言われたか分からないが。

「さて、行きましょうか」

鈴羽は、そう言っただけで手を差し出した。

俺はその手を握る。

鈴羽はどこか目的地があるらしく、俺を引っ張るその腕には迷いがなかった。

「さて、着きました。岡部さん」

そう言っただけで鈴羽はようやくこちらを振り向いた。
屋台だった。

それも赤提灯を掲げて『おでん』と書いてあった。

季節外れというわけでもないが、流石に少し早い気もする。

「いやですね。私、屋台のおでんって食べたことないんですよ」
だから。と言っただけで鈴羽は暖簾をくぐった。

いらっしやい。と屋台の親父がぶっきらぼうに言った。

「こんばんはー。繁盛してます？」

鈴羽がそう聞くと、親父はこの状況で繁盛してるってことはねえだ
る嬢ちゃんど苦笑した。

「お、彼氏さんかい」

そっちは繁盛してるかい？と親父は俺に聞いてきた。

「まあ、ぼちぼちですよ」

会社勤めしてるのにぼちぼちとは時化た兄ちゃんだなあ。と親父は
言った。

「まあ、こうして来ているんですからそれなりですよ」

俺がそう言つと、親父は違えねえと笑つた。空きつ歯が笑つた時に見えて愛嬌があつた。

「今日は、サービスだ。一本80円に統一してやるよ」

俺にはそれが良いのか悪いのか分からないがとりあえず礼を言う。

「それでこいつもサービスだ」

そう言つと、親父はコップに並々と透明な液体を注いだ。

「俺の生まれの特産品の日本酒だ」

旨いぞ。そう言つと、親父も自分で注いで一杯飲んだ。

「あ、そろそろ頼んでいいですか？」

鈴羽が申し訳なさそうに手をあげる。

「おお、済まねえ嬢ちゃん」

そう言つと親父は鈴羽の方を向き何がいかと尋ねた。

「そうですね……大根と、牛すじを下さい」

あいよ。という声と共に親父がおでんを掬つて皿に入れた。

鈴羽はいただきますと一礼をするとおでんを口に運んだ。

「お、美味しいでふね」

こんなに美味しいおでんは初めてです。と鈴羽は褒めちぎつた。

俺も自分のおでんを口に運ぶ。

大根に味が程良く染み込んでいてなんとも言えない旨さがあつた。

「確かにこれは旨いな」

俺もそう言つと、お前ら口が上手いな。と言つて満更でもないという表情だつた。

それから俺達三人は下らない話をして夜は更けていった。

「あ、岡部さん。そろそろ帰らなきゃ」

鈴羽は時計を見て俺にそう言つた。

「そうか……もう、そんな時間か」

俺は親父に金を払つとその場所を後にした。

「良い場所でしたね。岡部さん」

鈴羽の言葉に俺はそうだな。と頷いた。

確かに良い場所だつた。

親父も人の良さそうな人で実に気が和んだ。

俺達は家に帰ると鈴羽は風呂にを沸かし始めた。

その間に俺は居間に腰を下ろした。

少し飲みすぎたのか……

親父の人柄に押されていつもより早いペースで飲んでしまった。

「岡部さん大丈夫ですか？」

そう言うと鈴羽はコップに汲んだ水を俺に渡してくる。

俺は礼を言っ水を飲み干す。

水を飲んで落ち着いたのか、俺はふうという溜息を吐いた。

「あ、岡部さん。私先に入っちゃいますね」

鈴羽は梁に背を預けている俺に、風呂に入る準備をしながらそう言う。

俺がおお。とうなずくと俺は畳に寝転んだ。

「ふーッ」

屋台には背もたれがなく、背筋を伸ばしたままだったため、今になってその疲れが背骨に来て、ミシッと音を立てる。

そんな時だった。

鈴羽が風呂に入っている間にふと小さくはない携帯電話がやかましく鳴り響いた。

「はい。岡部」

「ああ、岡部か。指輪の件についてなんだが」
案の定秋葉からだった。

考えてみると大学の同期に限らず俺の携帯に電話をかけてくるのは秋葉と鈴羽位である。

まあ、だからどうというわけでもないのだが。

「予算内のものを数点用意したから今から見に来るか？」

「悪いな。今日はもう動けそうにない」

事実座ってからこれから立ち上がってどこかに行くという気力はなかった。

「まあ。明日にでも見せて貰いたい」

そうかそれは残念だな。

秋葉は特に気にかける風でもなく素っ気なく言った。
じゃあな。と俺は電話を切ると、ちょうど風呂上がりの鈴羽の目が合う。

「……………」

鈴羽の顔は風呂上がり特有の赤みがかつた顔をしていた。
それがまた随分と、服装と相まっていて、大人の女性の魅力があった。

そう。艶やかである。

というか、風呂上がり丁寧にTシャツって中々扇情的だ。

「なんですか岡部さん」

「そっちこそ。何かあるのか鈴？」

クスッ、ぷ……………」

お互いの目を見て俺たちを訳もなく笑いあった。

九月二十日の出来事である。

帰り道（後書き）

読了感謝です。

皆さんのおかげで書き続けることができます。

ありがとうございます。

決戦は日曜日（前書き）

連日投稿ですね。

読んで下さり感謝です。

決戦は日曜日

昨日は悪かったな。

俺が開口一番にそう言つと、秋葉は全くだ。と口を尖らせて言った。俺は昨日の電話の件について指輪を見るために少し早目に会社に向かったのだ。

少し早く着きすぎたかと思つたが、意外と秋葉も早くから仕事をしていた、俺が早く来るのが珍しいのか俺の姿を見つけると目を丸くしていた。

「まあ、指輪と一口に言つても色々あるわけで……」

そこから少し蘊蓄が混じつたので割愛させてもらうが、その中で秋葉が候補を三つに絞りこんでくれたらしいのだ。

「どうせ一杯あつたらあつたで選べないだろうからな」

「恩に着る」

そう言つて俺はぺこりと頭を下げる。

正直言つて女というものに疎いので、指輪などが、沢山あつてもただ困るだけだ。

俺は一つ一つに目を通していく。

三つだけでもそれなりに悩んだ。

結局ゴテゴテしたものじゃなくて一番シンプルなものにした。

装飾などで誤魔化しなくなかつた。

「お、やっぱりそれにしたのか」

俺が悩んでいるのを楽しそうに後ろから見ていた秋葉は予想通りと言わんばかりにニヤリと笑つた。

「なんだ予想でもしていたのか」

「いや、そんなことはしてないのだが……なにせ十年來の付き合いだからな」

岡部の好みなど予想はつくさ。と秋葉は言う。

「コーヒーでも飲むか？」

俺がうなずくと秋葉は自分でコーヒーメーカーを使って二人分のコーヒーを淹れた。

「俺の淹れるコーヒーを飲めるやつなんてそういないぞ」
ありがたく飲めと秋葉は淹れたてのコーヒーを差し出した。
秋葉が淹れてくれたコーヒーに口をつけた。

普段は淹れてないというだけあつて濃い。
濃厚なコーヒーの味が口に広がる。

コクや深みがあるというかコーヒー豆そのものを飲んでいるようだった。

どうだ？と得意がる秋葉の顔を見て俺はまあまあという顔をしておいた。

「とりあえず、その指輪の代金は給料天引きにしとく」
自分で淹れたコーヒーを旨そうに飲みながら秋葉は紙に何かを書いていた。

何を書いているかを覗いてみると零が一杯並んでいた。
数えるのも面倒だったが、数十万位だろうか。

「こいつはお前の指輪の値段だよ」

俺の視線に気づいた秋葉はそう言った。

「そ、そうか……」

俺はその金額に大きさに軽く苦笑いをした。

苦笑いというか、顔が引きつった。

「これでも大分値切ったほうだぞ」

最初はこれの三倍くらい高かったかな。と秋葉は思い出すように視線を遠くにやった。

「向こうも強気だったんだが、お互いの腹の読みあいをしているうちに仲良くなって値切れたんだよ」

だから岡部は中々得な買い物をしたということだな。と秋葉は万年筆を閉じるとそう言った。

「前から思っていたのだが、どうして秋葉は俺たちをそこまで気にかけるんだ？」

別に迷惑だなんて思ったこともなかった。ただ知りたいのだ。

経営者の秋葉からしたら俺たち二人を必要以上に気にかけるという行為は合理的でもなんでもない。

「人には人のものさしがあるんだよ岡部」

秋葉はそれだけ言うのと静かにコーヒーを飲む。

その姿は妙に様になっていて俺はそうか。としか言うことが出来なかった。

「そ、そういえば、お前は彼女とどうなんだ？」

俺はふと思いついた。

そう言えば秋葉も今付き合っているのだ。

しかも特徴を聞くだけだと、フェイリスの特徴とよく似ているのだ。その人と結婚しなければきっと未来は変わってしまうだろう。

「お？ああ、大丈夫だ。問題ない」

俺の質問に少し何かを思い出すかのような目をしながら答える。

「どうも、最近知ったのだが、彼女はどこかのお嬢さんらしくてな……」

全く気付かなかったよ。と秋葉は口に笑みを浮かべる。

「全然金があるわけではないらしいんだが、なんでも最初から言うのと政略とか、金目当てとか変に勘ぐられそうだったから、今になって打ち明けたそうさ」

そんなことを気にする俺じゃないんだがな。それでも秋葉は嬉しそうだった。

「それもそんなことを言うのに、ありったけの勇気を使ったらしい、言い終わったら泣いてたよ彼女」

俺はその情景がありありと思い描けた。

秋葉は、自分では普通に振舞っているつもりだろうが、実際中々オラがある。

この間たまたまテレビに出ていた秋葉を見たが、少し空気がピリツとしていた。

恐らくある程度親しくなっていないとその印象を拭い去ることは出来

ないだろう。

きっとフェイリスの母親であろうその人はそれでもきっと清水寺の舞台から飛び降りる位の気持ちで言ったのではなかるうか。

自分の気持ちを誤解される恐怖と闘いながら。

それでも、自分のことを知って貰いたくて。

もっと秋葉のことを知りたくなったから。

「まあ、やっぱり俺は彼女のこと好きなんだよな……」

そうボソツと言った秋葉の言葉を聞き逃さなかった。

その言葉を聞いて、やはり秋葉も俺と同じ人間なのだ。

当たり前の事実を今更ながら実感した。

「何かおかしいこと言ったか？」

いや、なんでもない。と俺は不思議がる秋葉にそう言った。

「まあ、とりあえずこの指輪はありがたく買わせてもらおうよ」

俺はそう言つとドアを閉めた。

それから時間はあつという間に過ぎた。

俺も勿論会社で秋葉顔を合わせていたが、その話には触れず、他愛

のないことや、また未来の話を少し話す程度だった。

「しかし、もうすぐか……」

丁度約束の日の前日俺が秋葉の部屋から出ていこうとドアノブに手をかけた時秋葉は誰にでもいうわけでもなく一人で呟いた。

この十年あつという間だったな。

……そうだな。

それでもやつとだな。

……そうだな。

今までどんだけ待たせたんだよ。

…ざっと数えて十年ほど。

そりゃあ長いな。

俺もそう思う。

「もうこれ以上待たせるなよ岡部」

じゃあな。と言って秋葉は俺を見送る。

俺はありがとな。と言って部屋を出た。

「ん？」

俺達の家のドアを開けようとしたが開かない。

鈴羽がまだ帰ってきてないようだった。

大方研究でも長引いてしまっているのだろう。

そう考えて俺は自分の鍵を使ってドアを開ける。

部屋の中は今朝と変わらないままである。

そろそろ七時近いので今日は久々に俺が作るでしょう。

台所に立つと俺は米を洗い始める。

それから適当にあり合わせのものを作って鈴羽を待つことにした。

俺が作っている最中に玄関のドアが開かれた。

「あ、岡部さん。お早いですね」

鈴羽が帰ってきたのだった。

聞くところによると少し研究が長引いてしまったらしい。

電話でもしようかと思ったが、まあ、すぐに帰れるから特に気にしてはいないとのことだった。

鈴羽はすぐにコートをしまつと、俺に悪いと思ったのか居間に現れた。

「なにか手伝うことがあります？」

「いや、もう出来るからいいよ」

ありがとう。と俺が言うといえいと鈴羽は返した。

「やっぱり、岡部さん料理がお上手ですねえ……」
俺の料理を食べながら鈴羽は言った。

もう十年経つが未だに鈴羽は俺の料理を食べるたびに美味しいと言ってくれる。

鈴羽は本当に出来た奴だと関心する。

「そう言えばですねえ……明日どこかに行くんですけどっけ？」
食事中に何かを言おうとして手帳を開いた鈴羽がそう言った。

「ああ、少しな」

極力何かを用意しているようには振舞いたくなかった。

「私の誕生日ですよな」

「そうだな」

俺が頷くと、また一つ岡部さんに近づきましたね。と顔を押しさえながら嬉しそうに体を揺らした。

「そうだ。誕生日プレゼントでも買いに行こうか」

「本当ですか!？」

ありがとうございます岡部さん。と今にでも飛びついてきそうな感じがした。

「そうだな。明日までに欲しいものでも考えておくんだな鈴羽」

はい。と鈴羽は元気よく頷く。

夕食後も鈴羽は機嫌が良いようで、鼻歌を歌ったり何にしようかなと言っていた。

そんな鈴羽を尻目に俺は自分の背広のポケットに手を入れて指輪の箱を確認する。

「決戦は日曜日ってか」

別に誰と戦うわけでもないのだが。

俺も鼻歌を奏でながら指輪をポケットにしまった。

決戦は日曜日（後書き）

まだこの時代は続きますよ

1986(前書き)

こんばんは。

三日連続ですネ。

よづやく良いところまできました。
応援をよろしく願います。

その晩俺は夢を見た。

2010年の時の夢であった。

俺が鈴羽を引き留めてしまった先にある未来を思い出した。

一人で過去に跳んだ鈴羽は記憶をなくした。

失敗した。

MRブラウンから貰った手紙の内容を思い出す。

失敗した失敗した失敗した……

「うわぁー!!」

俺は目を覚ました。

急速に現実に戻された。

2010年から1987年に。

「今のは……」

寝ぼけ眼のせいか視界が安定しない。

俺は鈴羽の姿を探す。

手当たり次第に体を回すと何かに触れた。

ようやく視界が安定してきた。

世界とピントが合い始める。

そこには安らかな寝顔の鈴羽がいた。

スースーと静かな寝息が聞こえる。

俺はその顔を見て安堵のため息を吐いた。

「鈴羽……」

良かった。

俺がいたからというのはおこがましいかもしれないが、この時代では少なくとも今は失敗していない。

これからどうなるか分からない。

それでいいじゃないか。
未来は未定なんだから。

「ん？岡部さん……？」

俺が起きているのを気配で感じたのか鈴羽はパチクリと目を覚ました。

「ああ、すまない。起こしてしまったか」

俺が頭を撫でると鈴羽はいえいえと首を横に振った。

「もしかして、今日が楽しみで起きちゃったんですか？」

意外ですねえ……岡部さん。そう言つと鈴羽は笑った。

「ああ、そうだよ。楽しみで起きてしまったんだよ」

俺は努めて笑顔で返した。

鈴羽にはあの未来を思い出して欲しくない。

あの世界線は無かったことにしたいじゃないか。

そう考えて俺はまた布団に深く潜った。

「あの時間に起きて結局起きるのが遅いつてどうなんですか」

岡部さん。という声が俺の頭上から聞こえた。

「わ、悪いな……」

俺が起きたのは結局8時過ぎだった。

「全く二度寝してどうするんですか……」

呆れたような鈴羽の声。

いつも通りの一日の始まりだった。

「岡部さん。私に何か言うことがあるんじゃないんですか？」

鈴羽は得意気に鼻を鳴らす。

「ああ、そうだな。鈴羽誕生日おめでとう」

はい。とにっこり笑った。

俺は体を起こすと布団を片付けて窓を開けた。

いかにも秋という風が心地よく部屋を通りぬける。

その風に乗って朝食の味噌汁の良い匂いが鼻をくすぐる。

「まあ、もう三十路超えて誕生日が嬉しいってのも恥ずかしい話ですけどね」

俺の後ろで鈴羽が配膳をする音が聞こえた。

「いいんじゃないか？」

鈴羽らしくて。

ま。岡部さんがそう言うならそうかもしれませんね。と笑う。

「考えてみれば岡部さんに祝ってもらせるから嬉しいですよね」

ふふ。と鈴羽は嬉しさを隠せないように口から笑みを漏らす。

「今日はどこに行きましようかねえ……」

朝食の最中鈴羽はテレビを見ながらそんなことを呟いた。

「あまり高いものは止めてくれよ」

ただでさえ指輪のせいで懐が少し寂しいのだ。

「当たり前じゃないですか」

私はいつも頂いてますから、と言った。

俺は何かあげていただろうか。

確かに毎年何かしらあげていた気がするが……

「うーん。決まりませんねえ……」

とりあえず百貨店に行きたいですねえ。

「意外だな。てっきり外に行きたいとでも言うのかと思ったんだが」

また海に行きたいとか山に行きたいとか言いだすかと思ったのだが。

俺がそう言つと、鈴羽は唇を尖らす。

「それは、デートの時じゃないですか」

たまには岡部さんに甘えて百貨店をウィンドウショッピングでもし

てみたいんですよ。

と鈴羽はボソボソと口をゴニョゴニョとしながら言う。

「そうだな……」

俺は相槌を打ちながら少し別のことを考えていた。

昨日の晩からやけに2010年の記憶がフラッシュバックする。

今だってそうだ。

こうして食事していると2010年のあの残念会を思い出す。

これは何かの暗示なのだろうか。

記憶がノイズのようにぶれる。

「岡部さん…どうかされましたか？」

ふと意識を現実に戻った。

焦点を現実に合わせてると鈴羽が心配そうに俺を見ていた。

「まだ、頭が寝ているんですか？」

なんなら、頭から水被せましようか。と俺の顔の近くに水の入ったコップを持ってくる。

「い、いや大丈夫だ」

ありがとう。と言って、俺は鈴羽の手を掴んでコップを机に置かせた。

「岡部さん。何か悩んでいるなら言ってお下さいよ？」

なにせ私達は二人ぼっちだったじゃないですか。

随分と懐かしい台詞を聞いた。

確か1975年に来た時の言葉だ。

「大丈夫だよ。鈴」

そう言っただけで俺が頭を撫でると鈴羽は分かりましたと素直に引き下がった。

鈴羽の髪は撫でてみるととてもさらさらしていて気持ち良かった。

髪の色はこつちに来てから少し色が落ちたのかダルの毛色に近い色になっていた。

やはり血だな。

俺達は朝食を食べ終わると、適当に後片付けをして二人してテレビの前に座った。

丁度テレビは番組が終わって次の番組までのつなぎの番組が始まるうとしていた。

「あ」

最初に鈴羽が声を上げた。

つられて俺も画面を注視した。

そこには秋葉の姿があった。

「本当に出ていたんですねえ……」

鈴羽はまだ信じられないように画面を見てうなずいていた。

先ほど俺が新聞を読んでいた時に偶然テレビ欄に秋葉の名前があることに気がついた。

「本当に出ているのか」

こうして画面越しに見ると秋葉は威厳がある。

流石は社長だ。という感じだ。

その番組の内容は、その人の大切なものというインタビューで五分程度の番組だった。

今度会った時にでも教えてやるか。

前に偶然見た時は余り見れなかったから特に言わなかったが、今回は見たことくらい言っておこう。

「今度会ったらサインでも貰おうかな」

俺が冗談めかしてそう言うと、それはいいかもしれませんがね。と鈴羽は笑った。

「さて、行くか」

俺は立ちあがると居間に行って着替える。

後ろで鈴羽も着替えているようで、衣摺れの音が聞こえた。

着替え終わった俺は鈴羽に気づかれないように指輪の箱を入れた。

俺達は近くの大型百貨店に来ていた。

百貨店というだけあって、品揃えも客も豊富だった。

俺達が一階の入り口から入ると多数の店員からいっらしやいませと頭を下げられる。

どうも未だにこうやってお辞儀をされるとこそばゆい感覚になる。

2010年では百貨店になんて余り行ってなかったから新鮮だった。

鈴羽は例のごとく一階の化粧品売り場で自分の好きなメーカーの新作を確認していた。

俺にはどれがどう違うとか店員から説明を受けたがチンプンカンプンだった。

「まあ、岡部さんじゃなくても興味ない人には分かりませんから」
気にしなくていいですよ。鈴羽はそう言って笑った。

化粧品をあらかた見て回り次に服などを見ていると丁度昼ごろになったので上の階で昼食を取ることにした。

「なんだか、私達偉い人になったみたいですね」

昼食のチャーハンを食べながら鈴羽はそう言った。

「どういうことだ？」

「だって昼間から百貨店でお昼食べてるんですよ」

ちよつと豪勢な感じがしますよね。とお茶を飲む。

「まあ、今日は特別な日だからいいんじゃないか」

それもそうです。と鈴羽は最後の一粒まで残さずチャーハンを食べる。

「今日は特別な日ですからね」

店を出ると鈴羽はまた百貨店を廻りたいと言いだした。

本人曰く、買わなくても見てるだけで楽しいそうだ。

結局何も買うこともなく4時頃には百貨店を出た。

「結局なにも買わなかったな」

「そうですね」

「何か欲しいものなかったのか？」

今からならまだ間に合う。

欲しいものを言ってくれば今スグにでも買いに行けるのに。

「いや、本当にいいんですよ」

鈴羽は体の前で手をパタパタと振って拒否の意を表す。

「そ、そうですね……あれです。今日の夜ごはんを岡部さんが奢ってくれるってことでいいです」

随分小さな誕生日プレゼントだ。

まあ本人がそれでいいと言うなら良いだろう。

「それでどこか行きたいのか？」

「え？そうですよね……」

暫く悩む素振りを見せていたが、やがて何とも申し訳ないような顔をしてこつちを見た。

「あの……岡部さん？」

「なんだ？」

「私がどこで食べたと言ってても怒らないですよね？」

「あ、ああ」

わざわざ確認するのが少し不気味に感じたが、今日は鈴羽の誕生日。多少高くてもなんら問題はない。

「実は、あのおでんが食べたいんです」

そう言うと鈴羽は俯く。

「おでんってあの？」

鈴羽はコクリと頷く。

「い、いや、別に鈴がいいならいんだが……」

俺がそう言うと、鈴羽は顔をあげて俺の手を握って早く行きましょと腕を引く。

「こんばんはーおじさん」

勢いよく暖簾を開けると、相変わらず繁盛していない屋台にオヤジがいた。

最初は誰だコイツと訝しむような目をしていたがすぐにようでいらっしやいと言った。

「聞いてくださいよ。私、今日誕生日なんですよ」

鈴羽が自分をさしながら言うと、オヤジは目を丸くしてそりやおめでとさんと言った。

「それですね。ここで食べたおでんがとても美味しいのを思い出しまして、来ちゃいました」

鈴羽の言葉にオヤジの顔がふと緩んだ。

「随分とまあ、嬉しいこと言ってくれるじゃねえか」

俺にも子供がいてよ、丁度嬢ちゃんみたいによく笑ってたっけなあ。昔を思い出すように遠い目をした後ふと目頭を押さえた。

「よし、こうなりや祝いだ。今日は半額にしてやる」

そう威勢よく言うと、オヤジは表に回って暖簾を外した。

「どうせ客なんてくることないだろが一応な」

そう言うと暖簾を俺の横に立てかけた。

「そんなに繁盛していませんですか？」

俺の問いにオヤジはそうでもねえよと言った。

「毎週来てくれる人も数人いるぞ」

そうそう。と思い出したように店主は何かを探し始める。

やがて見つけたようで俺達の前に一冊の本を差し出す。

「この人も来たよ。彼女さん連れて」

「あら」

その本を見て俺は軽く吹き出し、鈴羽は口に手をあてた。

「なんだ知り合いかい？この秋葉さんって人と？」

その本のそのページには秋葉の写真が載っていた。

俺達はコクリと頷く。

「なんだ。世間って狭いんだな。この人こんな本に出るけどそんなに偉ぶったりしなかったから好感が持てたわ」

彼女さんも可愛かったしな。オヤジは付け加えた。

そうなのか。秋葉がこんな店に。

というかデートで屋台ってのはどういう趣味してるんだあいつ。

「なんでも、彼女さんの方が入ってみたいと言いついたらしくて、

その人は渋ってたけどな」

意外な情報だった。秋葉の名前も知らない彼女は意外にこういうものが好きなのか。

「なんでも、こういう雰囲気のある所に入るの一人では怖いので誰かと入って見たかったらしくてな」

やっぱり女の子一人では入りにくいのかねえ嬢ちゃん。とオヤジは

鈴羽に話を振る。

「そうですね？私は全然平気ですよ」

鈴羽はいつの間に取りつたのか分からない大根をかじりながら言った。多分それは鈴羽だからだ。

一般女性からしたら一人で入るのは怖いだろう。

オヤジも強面だしな。

「それで、その女性とは仲は良さそうでしたか？」

おう。とオヤジは答えた。

「仲はよさそうだったな。彼女が少し酒入った時に男の方に大根を持って『あーん』とした所なんか見てるこっちが恥ずかしくなっちゃった」

オヤジはその時を思い出したのか照れくさそうに鼻の頭を掻いた。

「岡部さん」

俺とオヤジがそう話していると鈴羽が俺の肩をトントンと叩いた。振り向くと鈴羽が口を開けていた。

「あーん」

そう言って口を開けている。

どうやらやれということらしい。

俺はオヤジの眼を気にしながらも鈴羽の口にゆっくりとちくわぶを運ぶ。

俺が口まで運ぶと鈴羽はそれを口に含みゆっくりとそれを嚥下していく。

「ぶは。美味しかったですよ」

鈴羽はそう言っただけでニヤニヤした。

「随分とまあ、見せつけてくれるんなああんたら」

オヤジが居場所なさげにそう言う。

確かに恥ずかしい限りだ。

家の中でもやらないのに、初めてが人の前とは。

「岡部さんもいりますか？」

そう言っただけで鈴羽は熱々の大根をこちらに持ってくる。

したたるつゆと湯気の多さが尋常じゃない熱さだということをも物語っている。

「おい、鈴羽。もう少し冷めた奴は無かったのか？」

このままだと俺はコントさながらの行動を取ってしまうに違いない。

俺はそういうキャラではないのだ。

「はい」

俺の口の中に激熱の大根が放り込まれる。

とりあえずリアクションをとることなくやり過ごすことはできた。

「兄ちゃんも災難だな」

そう言つてオヤジは水を差し出す。

俺はそれを勢いよく飲むとようやく復活することができた。

まだ口の中が少しピリピリするが食べ物の味を判別することは出来るようになった。

それから俺達は三人で下らない話をしていた。

最近の野球がどうか、おでんの具で何が好きだとか、オヤジさんの身の上話を聞いていた。

「オヤジさん。そろそろお勘定」

おう。と言つてオヤジは値段を書いた紙を俺に渡す。

半額と言つていただけに随分安かった。

俺達は金を置くと店を出ようとした。

「ああ、兄ちゃんちよつと」

不意に俺だけ呼び止められる。

俺だけ屋台の中に残った。

「なんですか？」

「お前さん。あの子にプロポーズとかしてないのかい？」

「えっ……」

予想外の質問に俺は戸惑う。

「こりゃあ俺の見立てだが、彼女は相当良い女だぜ？逃したら一生捕まえられねえ位良い女だ」

オヤジは俺の顔を見据える。

「あんな良い女待たせるなんてお前さんも罪作りな男だな」

オヤジはシニカルに笑う。

「これからするつもりです」

俺の答えにオヤジはホウと目を細めた。

「もう待たせませんよ」

十年も待たせたんだから。

ずっと言えなかった。

「なんだ。俺のおせつかいだったわけか」

似合うことはするもんじゃないな。と親父は鼻を掻く。

「いえ、お節介じゃないですよ」

おかげで決心が付きました。

そう言っつて俺は屋台を出た。

「なに話していたんですか？」

先に外に出ていて待つていた鈴羽が俺に尋ねる。

「なに、男同士の会話さ」

私だけ仲間はずれですか。と軽く拗ねた様子だったが、やがて、まあ良いでしょう。と鈴羽は歩きだした。

「鈴羽、少し風に当たらないか」

俺の問いかけに鈴羽はそうですね。と言っつて俺の横を歩く。

「風が気持ちいいですねえ」

「そうだな」

おでんを食べて火照った体に秋の風は心地良かった。

やがて俺の目的地の公園にたどり着く。

「懐かしいですね」

今は夜だからか人通りも少なく閑散としていた。

やけに心臓の音がうるさい。

俺はポケットの中にある箱を握っつて心を静める。

「私達がここに来たのが10年前なんですよねえ……」

こつちの世界に来て以来ここに足を運ぶことはなかった。

何かを思い出しそう。

そし哀しくなりそう。

「す、鈴」

「なんですか？」

俺はありつたけの勇気を振り絞る。

鈴……

好きだ。

……愛してる。

だから……

俺と結婚してくれないか。

こういう時にどうやって指輪を見せればいいのか分からなかったの
でテレビドラマで見たように箱を開けて指輪が見えるようにして鈴
羽の方を向けた。

鈴羽は何も答えない。

風が強くなった気がする。

ばさばさと木々が擦れる音が聞こえる。

沈黙。

その沈黙は僅か数秒のことだっただろう。

それでも俺は永遠のように感じた。

「わ……」

鈴羽は口を開いた。

その唇は震えている。

「私は、岡部さんが好きだった2010年の阿万音鈴羽じゃないで
すよ？」

岡部さんと初めて会ったことも2010年でなにをしたかも知らな
いんですよ？」

「構わない」

俺がそう言つと鈴羽は俺の方をようやく見た。

その両方の眼には涙が溜まっているようで月明りに反射してとても
綺麗に見えた。

「前に私の…鈴羽の記憶がどうしますかって聞いたことがあったな」
そんなのはどうでもいいんだ。

「俺は……」

お前がいいんだ。

気づけばいつも隣にお前がいた。

健やかなる時も病める時も。

俺の記憶の中にお前がいない瞬間なんてなかった。
いつも隣にお前がいる。

それだけで俺がこの時代に跳んできた意味がある。

「だから……」

これからもずっと隣にいてほしい。

「……」

鈴羽はまた押し黙る。

返答を迷っているのだろうか。

「昔の……」

鈴羽はようやく口を開く。

「昔の約束覚えてますか？」

そう言っつて鈴羽は自分の両手を俺の前に差し出す。

「岡部さんの好きな指にその指輪を通してください」
そう言っつて鈴羽はいじらしく笑った。

俺は迷わず左手の薬指に指輪をはめた。

サファイアも輝きが良く栄える。

俺にはめられた指輪を見て鈴羽はにっこりと笑った。

その笑みから一筋の涙が零れおちる。

ふつつかものですが、これからもよろしくお願いしますね。

そ、その……倫太郎さん。

俺は答える代わりに鈴羽の唇を塞いだ。

1986(後書き)

やっと告白しましたね。

早くしろよって話ですよね。

読了感謝です。

たまには一人で(前書き)

こんにちは。

やっとプロポーズしましたね。

そういえば、これは全年齢対応なんであしからず。

たまには一人で

「聞いてくれよ」

開口一番に俺がそう言つと、秋葉はニヤニヤと口を緩ませた。

「どうした。遂に……」

俺は秋葉の口を手で塞いだ。

ここは俺に言わせてくれ。

「そうなんだ。実は……鈴羽と婚約したんだ」

俺の言葉を聞くと秋葉は指をパチンと鳴らして、やったなと俺の肩を叩く。

「いやー遂にか。俺が会つてから十年。えーと、その前から一緒にいたと考えると随分長かつたな」

秋葉は余程嬉しかったらしく、秘書さんと呼んでビールを二缶持つて来させていた。

「いや、ありがとね」

秋葉がそう言つて片手を上げると秘書さんはやれやれと言つた様子でため息をついた。

「いくら嬉しいことがあつても昼からアルコールはどうかと思いますよ」

自分で言つてもしょうがないと分かっているのだろう。

秋葉にそれだけ言つと一礼してすぐに部屋から出ていった。

「彼女も飲めば良いのにな」

そんな秘書の様子ももう慣れていいのか秋葉の方も意に介さず缶ビールのブルトツプに指をかけた。

「ほら、飲め。祝杯だ」

秋葉は俺の分のブルトツプも空けて俺に渡してくる。

キーンと冷えた缶が手の感覚を鈍らせる。

秋葉は乾杯をするかのように缶を机から少し高い所に掲げる。

そこで秋葉の動きが止まる。

何かかと思つたが目を見ると、お前が音頭を取れと合図をしていた。「え、えーと。俺婚約おめでとー」

乾杯。

そう言うのと俺達二人は軽く缶を当てた。

コップと違いアルミ缶特有の鈍い音が鳴る。

俺はビールに口をつける。

冷えているせいもあつてか喉を抜ける炭酸が気持ちよい。

昼に飲んでいるというある種の背徳感がビールのうまみを加算しているようにも感じた。

俺はあの公園で鈴羽に告白したあと、二人して家に帰った。

告白までして了解を得たのだから……と秋葉辺りなら邪推しそうなのだが、残念ながら何もしていない。

鈴羽が家に入る前に言ったのだ。

「岡部さん……今日はこの幸せを噛みしめたいのですぐに寝てもいいですか？」
と。

そう言われてしまつては俺もああと頷くしかなく、数秒お互いの唇を密着させただけで昨日の夜は終わった。

「しかし、昼に飲む酒は旨いな。癖になりそうだ」

秋葉は、口に付いた泡を拭う。

「さて、次は俺の番か」

缶ビールを持ちながら視線は遠くを見ていた。

「お前は最近順調とか言つてたが結婚する予定はあるのか？」

俺は缶ビールを半分ほど飲むと机に置いて一息吐く。

秋葉は俺の質問に微妙な顔をしながら、さあと答えた。

いつもの秋葉らしからぬ返答だった。

普段ならきつぱり答えるのだが、どうにも歯切れが悪い。

「まさか、まだ言つてもいないのか？」

「ああ」

今度はやけに即答だった。

質問した俺の方がそうかと黙ってしまった。
なるほど。

秋葉はプライドが高いというか少し恥ずかしがり屋な所もあるから自分の気持ちを伝えるのが気恥ずかしいのだろう。

「まあ、俺は俺で気楽にやるさ」

秋葉は自分でそう締めくくると残っていたビールを一気に飲んで缶を勢いよく机に叩きつける。

「ぶはあ。よし、仕事でもするか」

パシッと自分の顔を叩いて気合を入れると缶をゴミ箱に捨てた。

「岡部もやることないなら手伝ってくれ」

秋葉はそう言うのと俺の返答も聞かずに書類の束を渡した。

渡されたは良いがなにをしていいか皆目見当がつかない。

一応その書類に目を通してみたが俺に関係あることではなく内容もさっぱりだった。

「で、俺になんでこれを渡したんだ？」

俺がそう聞くと何かが飛んできた。

俺は反射的にその何かを手取る。

印鑑だった。

ちやんと『秋葉』と書かれた印鑑だ。

「判子押すだけだ」

うちの会社は稟議だからさ。と目を書類から離さず秋葉は言った。

俺は言われた通りに取締役の欄に秋葉の判子をポンポンと押していく。

しかし……

俺は判子を押しながら自分の横に積まれた書類の山を見る。

紙一枚の厚みはほぼないはずなのだが、それでもそれなりの高さがあった。

「いつもこんなことをやっているのか」

俺の問いかけにああと気のない返事が返ってくる。

集中しているのか書類を見ては何かを書きこみまた次の書類へ目を

移すという作業を繰り返していた。

俺はその様子を見ながら普段と違う秋葉を感じた。

俺も少しくらいは手伝おうと判子を正確に押していく。

「ふう」

秋葉がようやく書類から目を離し天井を仰いだ。

「どうやら一段落ついたらしい。」

俺の方もあらかた終わっていた。こっちを仕事と呼んでいいのか疑問ではあるが。

そろそろ右腕がピリピリと痺れていた。

「悪かったな仕事を手伝わせちまって」

秋葉はようやく俺を見た。

「別にどうってことはない」

むしろ少しでも手伝えたのなら嬉しい限りだ。

未来を話すっただけで給金が貰えるのは少し心苦しいものがあったからな。

「まあ、これで岡部が出来ることは大体終わった」

帰るなら帰ってもいいぞ。

秋葉は自分で淹れたコーヒーを飲みながら答えた。

流石に俺も自分の分からない分野まで口を挟むということとはしたくないので俺は素直に秋葉の部屋を後にした。

「あ、お疲れ様です」

俺は部屋を出た時にビールを持ってきた秘書さんと目が合う。

「缶ビールありがとうございました」

俺がそう言つと、秘書さんはいえいえとかぶりを振る。

「秋葉の指示ですからね。昼間から酒を飲むってのは初めて見ましたが、大抵のことは慣れました」

そう言つて秘書さんは自分の髪をじれつたそつに掻きあげた。

この秘書さんはずつと秋葉の秘書をやっている気がする。

思えば俺がこの会社に入入りし始めた時からこの人だけ変わってない気がする。

「あなたもよくここで働いてますね。えーと岡部さん？」

流石に十年もここに通っていると名前を覚えるのだろうか。

秘書さんは俺の顔を見てそう言った。

「えーとそうですね。そういうえーと……」

俺が秘書さんの名札を見ようとすると秘書さんはクスリと笑った。

「生憎私は今日は名札を壊してしまつてないんですよ」

まあ、私の名前なんて気にしなくていいんです。

さよなら岡部さん。橋田さんによろしくと言ってどこかに行つてしまつた。

「なんで鈴羽の名前知ってるんだろう？」

さっきの俺と秋葉の会話でも聞いていたのだろうか。

まあいいか。

気にしてもしょうがない。

俺は壁にかかっている時計に目をやる。

午後三時。

まだ家に帰るのにも早い時間だ。

かと言って特にどこか行きたい場所があるわけでもない。

「どうしようか……」

俺はとりあえず会社の外で出ることにした。

時間も時間ということもあってか、スーツを着た会社員は忙しそう
だ。

あと二時間で終礼だというのを感じてか、最後のラストパートを
かけている。

……そういえばこの辺りは歩いたことが無かつたな。

そう思うと駅とは反対の方向に歩きだした。

そこでふと鞆が震えているのに気づいた。

勿論鞆にバイブ機能が付いているわけではない。

俺はまだポケットに入れるには少し大きい携帯を取り出して通話ボ
タンを押す。

『あ、岡部さんですか？』

どうやら鈴からの電話だった。

『実は今日研究室で会議が長引きそうなんで外食してきます。岡部さんも一人で食べて下さい』

それじゃあ岡部さん。と鈴羽は言っただけで電話を切った。

今日は一人か……

なら別に早く帰る必要もないか。

俺はまた歩き始める。

歩いたことがないと言ってもここは元々ビル街なので特に見るものもない。

ただ、整然と並んだビルを見るのは爽快だった。

時間にして一時間ぐらいだろうか。

そろそろ歩くことにも飽きてきたので近場にあった本屋にでも入る。ちなみに俺は本を読むのは実はあまり得意ではない。

小説などはオチを読む前に飽きてしまうほどだ。

比べて鈴羽は大学時代に意外と本を沢山読んでいた。

なんでも自分の知らない世界を知ることができるのが素晴らしいらしい。

とりあえず俺は旅行関連の雑誌を手取る。

ハワイやらグアムなどの定番な海外旅行のハンドブックや東北や沖縄など国内旅行などの本もそれなりにあった。

俺は一冊の旅行雑誌を手取る。

そういえば、結婚したら新婚旅行とか行くのか……

俺自体飛行機なんて乗ったことないから海外に行くのは想像出来ないな。

沖縄なんて高校の修学旅行で行った以来一度も行ってないな。など意外にただ雑誌を見ているだけでも楽しめた。

ふと顔を上げて時計を確認するとそろそろ帰るのにはいい時間になってきたので俺は本屋を後にする。

「さてと、どこに行こうか……」

と悩んでみても今日は秋葉もないので居酒屋に入るといふ気分

もなかった。

となるとあそこしかないのか……。

最近外食と言ったらあそこに行っていない気がする。

俺は気づくとあの屋台の前にいた。

今日は時間が早いからかもしれないが相変わらず繁盛していなさそうだ。

暖簾の奥からはオヤジの陽気な鼻歌が聞こえる。

俺が暖簾をくぐろうとした時トントンと後ろから肩を叩かれた。

「はい？」

俺が振り向くとそこには秘書さんがいた。

「こんにちは岡部さん」

こんな所で会うとはまったく思ってたので俺は思わずはあと答える。

「えーとどちら様？」

秘書さんの後ろにもう一人いたらしくその人物がひよこつと顔を出した。

「あ」

俺はその顔に見覚えがあった。

写真でしか見たことがなかったが、会えばすぐ分かった。

血というものを感じられずにはいられない。

「初めまして、あなたは、秋葉と付き合っている人ですか？」

俺がそう聞くと、彼女はコクリと頷いた。

たまには一人で（後書き）

読了感謝です。

何かあれば遠慮なく。

無意識化の独白（前書き）

お久しぶりです。

私事のバタバタでろくに書けませんでした。

これからもよろしくお願いします。

無意識化の独白

店の前が騒がしいので何事かとオヤジが現れた。

喧嘩かと思つたのか面倒臭そうに指をポキポキと鳴らしながら現れたのだが、騒ぎの主が俺達だと分かると、途端に相好を崩す。

「おう、兄ちゃん今日は、違う女連れてるのかい？」

あの子に言いつけてやるぞと笑つた。

俺は、やめて下さいと苦笑しながらそう返した。

「あ、あの、岡部さん」

誰かが呼んだような声がして俺は声のした方を振り向く。

「あの、そのおめでとうございます」

秋葉の彼女さんはそう言つてぺこりと頭を下げた。

秋葉に伝えたのは今日の昼頃だつたはずだから随分と速い情報の伝わり方だ。

「秋葉に聞いたんですか？」

俺がそう聞くと彼女はコクリと頷いた。

「その、秋葉くんが珍しくお昼に電話をしてきて、何事かと思つたらそのことを……」

「そうか……」

秋葉もなんの意図があつてそんなことを伝えたんだろうな。

俺が考える素振りを見せた途端に不意に誰かから肩を叩かれて思考が一瞬停止する。

「まあさ、積もる話もあるでしょうし、取りあえず中に入りましようか」

そう言つて俺と彼女の肩を掴んで秘書さんは暖簾をくぐる。

「大将、日本酒皆に」

秘書さんの声を聞くとオヤジはあいよと答えて人数分のコップとその中に液体を注いだ。

「だから、私はお酒は……」

どうやら彼女はお酒が苦手らしかった。

「相変わらず、お酒飲めないフリするのね 안타」

秘書さんは彼女をジッと見つめる。

「初対面の人には自分がお酒弱い女の子って見せたみたいだけどそうじゃないから」

それまで彼女に向けていた視線を秘書さんは唐突に俺に向ける。

「岡部くん。実はあの子ってお酒飲むと軽く人格変わっちゃうんですよ」

「へえ」

俺は適当に相槌を打った。

確かに、今の話ぶりを聞いていると秋葉にアーンと口を開けさせた人物と同一人物には見えない。

「だから、そういう余計なことを言わないで下さいよ」

俺達の会話を聞いていたのか、彼女は秘書さんの肩をゆらゆらと揺らした。

そこからは楽しい時があつと言う間に流れた。

最初に俺が告白したことを根掘り葉掘り聞かれ、少し酒が入ってきて少し人格が変わってきた彼女が秋葉との惚気話を話しだした。

その後、俺達二人の話を二人の間で聞いていた秘書さんが私も彼氏作ろうかなあ……とぼやいていたのが印象的だった。

「それじゃ、俺はこっちだから」

明日も仕事があるので早めに解散することになった。

俺達三人は駅までは一緒だったがそこからは俺が独り違う方向だったのでそこで別れた。

彼女達もさよならと手を振って別れた。

帰り途俺はいつになく上機嫌で歩いていた。

気候もようやく残暑から解放され秋、そして冬に変化する季節が個人的には一番好きだ。

秋葉の彼女、下の名前の方は少し酔いが回っているせいか思い出せないが、確か副島さんとか言った気がする。

酒が入ると積極的になるみたいだったが、普段も可愛らしい容姿をしていたし、あの子に好かれていた秋葉は幸せものだと感じた。道中、不意にコンビニに目が止まった。

どうも学生の中から酒を飲むとアイスを食べたくなってしまった。

俺は誘惑に負け、一番安いアイスを口の中に放りこむ。

冷たいバニラの味が、口の中に広がる。

一応鈴羽も食べるかもしれないと思い念のためコンビニでアイスを一本余計にカゴに入れておいた。

そう言えば、鈴羽は今日研究室の集まりだとか言ってたな。

まだ帰ってないのかもしれないな。

あそこの研究室の持ち主である教授は普段は研究室にいないことなので、こういう機会には話が長くなってしまつらしい。

以前鈴羽がそうぼやいていたのを思い出す。

まあ、冷凍庫の中にも入れておけばいいか。

「ただいまー」

案の定まだ鈴羽は帰ってきておらず、俺は誰もいない部屋の電気を点ける。

人気のない部屋というのは気温以上に寒く感じる。

俺はそんな気持ちをつらわせるためにテレビの電源を入れた。

2010年ではデジタル放送になるからアナログから替えて下さい。というCMが頻繁に流れていたが、この時代にそんなことはあるわけがなかった。

「鈴羽のやつ遅いな……」

俺は部屋に掛けてある時計に目をやる。

そろそろ十一時を過ぎる頃だ。

それまで余り鈴羽を待つことのなかった俺にはこの時間が随分長く感じられた。

「たらいま帰りましひゃ」

俺がテレビで11時の時報を聞いていた時不意にドアが開けられる。その音に驚いて振り向くと鈴羽がふらふらになりながら帰ってきて

いた。

「おい、どうしたんだよ？」

「ふぁ？おかふえさん。ただいま」

ぐにやりと体を弛緩させたまま俺にぶら下がる状態になる。

ここまで酔う鈴羽を見たのは初めて見た。

とりあえず俺は鈴羽を壁にもたれさせた状態で座らせると、コップに水を汲んで持つてくる。

「ほら、飲め」

鈴羽は首肯すると水を一気に飲み干す。

「ぶはっ。美味しいですね。このお酒」

だめだ。完全に出来あがっていた。

それでも鈴羽は水を飲んで一息ついたらしく、大きなため息を一つ吐いた。

「私はですね……幸せ者ですよ」

どこか遠くを見るような目をしながら鈴羽は語る。

「1975年に、何も知らない時代にやってきて、不幸なことに記憶を失った」

それでも私には岡部さんがいました。

鈴羽はそう言っただけは笑む。

その笑顔に俺は言葉を失う。

「色々なことがありました……秋葉さんにも出会いましたし、それから大学にも行きました」

今じゃ私も大学の教員ですよ。ふふ。と鈴羽は何が面白いのか笑みを漏らした。

「そして、私は遂に岡部さんと……その結婚することになりました」
鈴羽は自分の左手の薬指に光るサファイアを見ながら、うっとりとした表情をしている。

どうにもまだ信じられませんがね。と俺を見ながら照れくさそうにはにかむ。

「今日は、研究室の飲み会だったんですけど、研究員の一人が目ざ

とく指輪を発見して、私を祝うパーティになったんですよ。

しこたま、飲まされました。体育会系のサークルでもないのに」

鈴羽はビールに焼酎……と自分の飲んだ種類をあげていった。

「そこですね。ふと昔のことを思い出したんですよ。2010年のことだと思えますけど、私の為に会を開いたことがありますよね」
「あ、ああ」

俺の記憶ではなかったことになっている変動した世界線であった出来事だ。

あそこで引き留めてしまったせいで、あの惨劇が起こってしまった。

「橋田至、推名まゆり、そして……牧瀬紅莉栖。今更2010年に一緒にいた人達の名前を思い出しても仕方がないですけどね」

あははは。と鈴羽は軽く流していたが、鈴羽が2010年の記憶を取り戻し始めているのは明白だった。

長い口上を話していたせいか、どうやら酔いは醒めてきたらしく、目をパチパチとさせて周りを見回す。

「岡部さん。私何か話していました？」

ポリポリと頭を掻く鈴羽は自分が何を喋っていたかあまり記憶にないようだった。

「秘密だ。とりあえずアイスでも食べるか？」

秘密にされたせいで余計に頭を捻って自分がなんて言っていたか思い出そうとしていたが、やがて諦めたのかアイス貰いますね。と冷凍庫を開けて、先ほど俺が買ってきたアイスを食べ始める。

「ああ、そうです。そうです。これ見て下さい」

アイスも食べてようやく頭も冷えてきたのか鈴羽は鞆の中から何かを取り出した。

見た所なにかのパンフレットのようなだが……

「大学の昼休みに抜け出してですね貰ってきたんです」

そう言っただけ出し出したのは結婚式場のパンフレットだった。

「最近のドラマとかテレビを見ていますね、私もちゃんと結婚式を挙げてみたいなあと思ってます」

最近景気がいいらしいですしね岡部さん。

「まあな」

「海外にも行ってみたいですし、国内も捨てがたいですねえ……」
鈴羽に連れられてパンフレットを俺も見る。

こうして俺達の夜は更けていく…。

無意識化の独白（後書き）

読了感謝です！！

ISBN 5100 (前書き)

お久しぶりですこんばんは。

さて、そろそろこの時代は終わるの…かもしれない。

「……以上のようなプランでよろしいでしょうか？岡部さん」
は、はい。と俺はやや緊張気味に頷く。

俺と鈴羽は結婚式の段取りやその他諸々を決める為に結婚式場を訪れていた。

あの晩に決めたプランを改めて見直すとどうにも酒が入ってる状態でこんなことは考えるものじゃないな。

そうお互いに納得出来るほどの内容だったので、また後日に現実的な方向で考えた結果今に至っている。

「しかし、最近少し景気いいんですからもう少し豪華なことをやっても……」

社員の方が去ってから鈴羽は俺にそう尋ねる。

鈴羽の言うことも尤もなのだが、いかんせんバブルが崩壊した1990年代に生まれた俺からしてみれば、これから辛い時期が待っている中でどうにも派手にお金が使えなかった。

「ごめんな、貧乏性で」

「いえいえ。考えてもみればそこまで豪華にしても誰か著名人が来るわけでもなく、大規模な人数でやるわけでもないのが岡部さん位の場合で丁度いいと思いますよ」

パンフレットを見ながら鈴羽はそんなことを言った。

「しかし……」

「ん？どうした」

「ここまで、手際が良いなんて、もしかして以前誰かとお付き合いされてたとか？」

「ああ、実は、阿万音鈴羽という娘と」

俺がそう答えると、鈴羽は驚いたように目を丸くした。

「それは、それは。その娘はどうされたんですかね」

「今日の前にいるよ」

俺の言葉に鈴羽は降参とでも言うようにため息を一つ吐くと笑った。
「話は変わりますが、正直な話岡部さんのお友達と私のお友達は
大分被っていますし本当に少人数でやることになりそうですね……」
「そうだな」

二人とも同じ年度に入学し、尚且つ同じサークルに所属していれば
自ずと交友関係が似てしまうのはしょうがないような気がする。
ちなみに俺と鈴羽の戸籍上の親であった方々はこの十年の内に亡く
なってしまうていた。

戸籍を借りる時に一度だけ会ったことがあったことがあるという程
度の関係だった。

しかし、その訃報を聞いた時には思わず黙祷を捧げずにはいられな
かった。

俺たちはあなた達のおかげでここまで生活できた。

そしてこうして式も挙げられるようになったといつかそれぞれの墓
前で一言礼が出来たらいいな。そう考えていた。

向こうからしたら、見ず知らずの中年が墓参りに来られても天国で
苦笑するだろうがな。

「おーかべさんっ」

「おう!？」

不意に肩を強く叩かれて俺は急に我に返った。

何事だと鈴羽を見ると、両手には緑茶のペットボトルが握られてい
た。

「また、ボーっとされているんですか？昔から考えごとをしだすと
本当に周りが見えなくなるんですよ」

ふふ。と鈴羽は笑う。

それに釣られて俺は苦笑を返した。

「そうだ。鈴」

「はい、なんですか？」

「そろそろあれだよな。俺たち結婚するじゃないか」

「……そうですね」

「だからさ……」

「はい」

ああ、もどかしい。

こういう台詞は恥ずかしいからなるべく言いたくないのだが……。

「それがどうされました？ 倫太郎さん」

「っと」

してやったりというような顔を鈴羽は浮かべた。

どうやら俺が言いたいことを知っていて敢えて惚けたようだ。

「どうかしましたか？ 倫太郎さん」

俺としては嵌められた形になるのだが、倫太郎と呼ばれて悪い気はしなかった。

以前に一回か二回呼んでくれただけだったからなあ……

俺が少し感傷に浸っていると不意に携帯がけたたましく震えた。

以前にも言ったが俺の携帯に電話してくる人間はそういない。

『よう、秋葉。どうかしたのか？』

案の定秋葉からの着信だった。

『いやな、岡部今どこにいる？』

『今？ えーと…… 式場？』

『式場？ ああ、なるほどそういうことか』

くつくつくと笑いを堪えているようだった。

『なるほどそれじゃ、時期も悪くなかったわけだ』

『時期？』

『いや、こつちの話。今日会社に出て来れるか？』

『えーと。ちよつと待て』

俺は一度耳から受話器を離すと鈴羽の方を振り向く。

「鈴。会社に呼び出されたんだが、これが終わってから行っても平気か？」

鈴羽はいいですよ。それなら私も大学の方に顔を出します。

俺は鈴羽に許可を貰えたのでその旨を秋葉に伝えた。

秋葉は、悪いなと少し申し訳なさそうに言っていたが、俺が気にす

るなどと言うと分かったと答えて電話は切れた。
ツーツーと無機質な電子音を聞きながら、秋葉が呼び出すなんてどんなことなのだろうかと少し考えていた。

あれから鈴羽とその他諸々の打ち合わせを済ませ、鈴羽は大学に。
俺は会社に向かった。

いつもなんだかんだ言って朝には出勤しているので二時過ぎに会社に来るのは学校に遅刻して入る時と同じような微妙な後ろめたさを感じた。

俺はいつもの通りエレベータの最上階を押し、秋葉のいる部屋へと向かう。

「あら、こんにちわ。今日は休みじゃなかったかしら？」

秋葉の部屋の前で仕事をしていた秘書さんに会った。

「ええ、そのはずなんですけど、どうにも呼び出されましてね」

俺は、はははと言いながら頭を搔く。

「秋葉が？　そういうえば、今日の明け方が社長室に運びこまれてたわね…」

案外荷物運びで呼ばれたんじゃない？　ほら、岡部くんって他の社員に比べて暇そうだし。そう言って秘書さんは笑った。

本当にそんな理由だったら苦笑するしか他にない。

まあ、それなりの給料は貰えているので文句を言えるわけもないのだが。

秘書さんが秋葉に俺が来たことを内線で伝えたと、秋葉は入ってくれと俺を呼んだ。

秋葉は部屋の中でまた判子を押していた。

「全く、日本ってのはいつも縦社会で、上の判断なしじゃ動けないのかったまに思うよ」

そう言いながらも書類からは目を離すことはなかった。

俺は大人しくその作業が終わるまで待つていた。

五分やそこらで仕事がひと段落ついたらしく、視線を机から天井に

向け、ため息を吐いた。

「お疲れだな」

俺が緑茶を持っていくと秋葉は悪いと言ってその緑茶を口に含んだ。
「いや、悪かったな。折角の休みだったのにわざわざ出てきて貰って」

「いや、それ自体は構わないんだが……」

「要件か？ほれあれを見る」

秋葉はそう言うのと部屋の隅を指差した。

そこには見慣れない……いや見覚えのある箱があった。

しかし、俺の記憶にある箱はもつと古かった。

当然だ。この時代に真新しい箱ならば2010年には古い箱になっているだろう。

「IBN5100か……？」

俺がそう呟いたのを聞くと秋葉は少し意外そうに眼を丸くした。

「なんだお前透視でも出来るのか？」

「いや……この箱に見覚えがあっただけさ」

「それにしても、もう少しリアクションを期待したんだがな」

残念そうに秋葉口を尖らせた。

「まあ、そういうことだ。結婚祝いにそのPCはお前にやる」

昔約束したる？もしかしたら結婚祝いにあげてしまっつかもなってな。

その秋葉の言葉を聞いて、俺は秋葉から顔を背けた。

秋葉の顔が見れなかった。

今見てしまったら涙を見られてしまいそう。

「し、しかし、秋葉。俺はそのPCがとてつもなく重いのを知っている。一人じゃどうやっても持つていくことは出来ないんだが……」
声が裏返ってないか心配になるような声音で俺は秋葉に問うた。

「確かになあ、ここに持つてくるのにも二人がかりでやっつという
ような感じだったからなあ……」

そう独り言をつぶやくと秋葉は内線でどこかにかけているようだった。

それを境に俺もようやく秋葉の方に振り向く。

「あ、これから俺の予定って何あるか分かるか？」

電話の相手は予定を述べているようで秋葉はスラスラとメモをとっていた。

「あ、出来れば、場所と時間も詳しく……」

そこまで聞いて何をするのだろうかと俺は不思議そうにその光景を眺めていた。

ようやく予定を全て書き出すと秋葉は、俺の方に視線を向けた。

「とりあえず、秘書の業務も全部聞いたから、外にいる彼女連れていっていいぞ」

「え……？」

「さすがにこの予定は外すわけにはいかないし、かと言ってお前が知らない人と運ぶのも苦痛だろうから顔見知りの奴に運ばせることにした」

「……」

こういう手際の良さは秋葉の長所なのだろうけど、秘書さんは納得してくれるだろうか。「秋葉がそう言ったならしょうがないわね……」

「すみません」

案外簡単に秘書さんは折れてくれた。

流石に二人で手で持っていくのは面倒なので地下で台車を借りて運ぶことにした。

もちろん精密機械なので、強い衝撃を与えないように丁寧に包装して載せるとやはりそれなりの重さになった。

「そついえばなんですけど……」

「なによ？」

一緒に運ぶと約束したはずが何故か俺が一人で頑張って運んでいるという状況には敢えて触れないがそれにしても一つ聞いておきたいことがあった。

「名前なんて言うんですか？」

俺がそう聞くと秘書さんが怪訝な顔をした。

「あんだ、もしかして婚約者いるのにナンパとかでも考えてるの？」
「違う」

「いや、今日は名札付けてるからてっきりそうかと
そう言っつて秘書さんは名札を見せる。」

『渡井』 そう書いてあった。

「わたいって読むのよ。まあ有名でも珍しくもない名字よね」

「そうですよね」

それから俺たち二人は特に喋ることもなく道を歩く。

「あ、岡部くん。そろそろ休もうか」

渡井さんは全く運んでいなかったのだが、長い距離を歩くのが得意
じゃないのか少し疲れが見えていた。

「こっちなよ」

俺は渡井さんに案内されるまま道を歩いた。

「ってなんで境内に来てるんですか？」

広い所に出たと思っつて辺りを見回すとどうもどこかの神社の境内だ
った。

「いや、やっぱり歩道とかで止まると他の人に迷惑じゃない？それ

にこの場所なら静かで休むには最適じゃない」

「そりゃそうですけど」

まあ確かにここは2010年の時も静かで俺も嫌いな場所じゃな
かった。

俺と渡井さんは座れる場所を適当に見つけると二人で腰掛けた。

「ああ、そういえばまだ言っつてなかったね。結婚おめでとっござい
ます」

「どうも」

俺は軽く頭を下げた。

こっつして秘書さんもとい渡井さんと話したのは初めてな気がした。

俺は改めて渡井さんの横顔をチラリと見る。

勿論鈴羽程ではないが目鼻立ちもすっきりしていて、肩にかかるよ
り少し短めな黒髪を敢えて揃えずに少しざっくばらんに切っている

感じが渡井さんらしい気がした。

ここでもし、巫女さんの格好して出てきたらそれこそルカ子に見えるかもしれない。

性格の方はどう見ても似つかないのでそんなことはないかもしれないが。

「こんなところでどうされましたか？」

不意に後ろから声をかけられた。

「え？」

俺達は思わず振り向く。

そこにはメガネをかけた神主のような人物が箒を持ちながら柔和な笑みでこちらを見ていた。

IBN5100(後書き)

何かあれば忌憚なくどうぞ。
今後の参考になるかもしれません。

柳林神社（前書き）

こんにちは。

よつやく頭の中で話の構想が見えてきたところです。

柳林神社

「ど……どうも」

俺はとりあえず頭を下げる。

神主風の男の方もこんにちわ。と丁寧に頭を下げた。

「んー？」

ただ一人この場において頭も下げず挨拶もせずに男を見ている人間が一人。

「もしかして……漆原？」

「はい。そういうあなたは渡井さんですね」

どうやら二人は知り合いらしい。

渡井さんは自分の記憶が合っていたと分かると、しげしげと神主風の男を見ている。

「まさか、本当に漆原が神主やってるとはねえ……」

「ええ。一応神職の息子をやっているもんでね」

二人の会話を聞くにやはり勘は当たっていたようで神主は漆原と言う名前らしい。

ん？漆原？

俺は頭の中でその名前を反芻した。

「あ、ルカ子の名字か」

なるほど、ここは確かに柳林神社だ。

2010年に比べて装飾品などが真新しく感じた。

「あ、岡部くん。紹介するわね。神主になるくせに大学で全然関係ないことをしていた漆原くん。私の……同期かな」

「初めまして。漆原と言います。岡部さんでしたね。よろしく願います」

礼儀正しい人。

俺がそう思っていることが顔にでも出ていたのか渡井さんは俺の顔を見ながら笑いをこらえている様子だった。

「岡部くん。一応言っておくけど彼は全然真面目じゃないわよ？」
「え？」

この神主が真面目じゃない？

渡井さんが、ねえ漆原？と視線を神主に向けると、神主は苦笑した。
「そんな、勘弁してくださいよ」

「随分とる猫かぶるわね。大学時代は色々あつたじゃない」

「あれは、忘れてください」

神主がはあとため息を吐いた。

とことん思い出したくない過去があるらしい。

そういえば思い出したがルカの父親はルカが男なのにも関わらず巫女服を着せていたことを思い出した。

「ところでこんな処に？何か用があるんですか？渡井さん」

自分に不利にな話題を避けるべく神主は渡井さんにそう尋ねた。

「そうだね。この箱を岡部くんの家まで届けなきゃならないのよ」

そう言つて渡井さんは自分の足元に置いてある箱を忌々しく指をさした。

運んでるのは俺だけなんだけどな……

そう思ったが、別にこの神主に言う必要もないと思つて俺は黙つておいた。

「そうですか。ま。汚さなければどうぞ、ずっといて下さつて構いませんから」

神主はそう言つて一礼して本殿の方へと歩いていった。

「ところで、漆原さんは何かされたんですか？」

俺がそう聞いてきたので渡井さんは一瞬目を丸くしたが、すぐににやけた表情に変わった。

「岡部くんも中々聞いてくるわね。えつとね……」

「なるほど」

若干渡井さんが話を盛っているという可能性も否定できないが、神主、漆原さんは真面目には見えなくなつてしまった。

「さて……運びますか」

渡井さんはベンチから立ち上がると、座っていて凝った体を伸ばしているのか首を回したり背中を伸ばしていた。

「運んでくれるんですか？」

若干の期待とかなりの諦めを込めてそう聞いてみた。

彼女は首を横に振った。

「へえ、ここが岡部くんの家なんだ？」

結局運ぶのを手伝ってはくれなかったが渡井さんは家にまでついてきていた。

「鈴さんはいるのかしら？」

何をしようとしているのかわからないが、ちょうどこの時間は鈴羽もまだ大学にいる頃だろう。

いや、そう信じたい。

流石に階段を一人で登らせるのは可哀想だと感じたのか階段を登る時だけ渡井さんも手を貸してくれた。

「岡部くん、意外に力あるのね……」

渡井さんは自分が持つて改めて箱の重さを知ったのか俺を褒めた。まあ、台車があったからそこまで苦勞はしなかったのだけれど。

俺は家のドアを開けるべく鍵を取り出そうとした。

「岡部くん？ドア開くよ？」

俺が鍵を取り出す前に渡井さんがドアノブに手をかけた。

ドアは何の抵抗もなく開く。

「あら、岡部さんお帰りなさい。早かったですね」

家の中には鈴羽がいた。

丁度帰ってきたばかりなのか二人で式場に行つたままの服装だ。

「こ、こんにちはー」

渡井さんはドアから顔を少しだけ出して会釈した。

「えーと、岡部さん。これはどういう状況ですか？」

「えーとなー」

俺は誤解を生まないように出来るだけ丁寧に状況を説明した。

「なるほど。つまり秋葉さんに頼まれてわざわざこの渡井さんは家

まで持ってきてくれたと」

俺は首を縦に振る。

正直な話渡井さんは何もしていないのだがそこは触れずにおこう。鈴羽は理解したようであるほど。と頷いて、渡井さんにお礼を言っていた。

「わざわざすみません」

「い、いえいえ。お気になさらず」

流石になにもやってないのに感謝されると座りが悪いのか渡井さんにしては珍しく恐縮していた。

渡井さんは時計を見るとそろそろ帰りますと立ち上がった。

まだ何も出してないのに。と鈴羽に言われていたが、仕事ありますのと言って渡井さんは帰ってしまった。

仕事の邪魔をするわけにはいかないと鈴羽は感じたのか、玄関先まで見送ると居間に戻ってきて俺の向かい側に座った。

「お仕事熱心な方ですねえ……」

「あの人が秋葉に付き合えってしきりに勧めたそうだよ」

「へえ……自分だってお綺麗なのに。自分のそういう話はないんですかね？」

そう言えばそういう話は聞いたことないな。

今度会ったら聞いてみるとするか。

「私はてつきり岡部さんが私がない隙に女の人を連れ込んでるのかと」

俺は鈴羽のその言葉に軽くむせた。

「い、いきなり何を言い出すんだ鈴羽……」

「いえ、ほら、岡部さんだつて狼ですからね」

何を根拠にそんなことを言い出すんだ鈴羽……。

「ひよつとして……妬いてるのか？」

鈴羽はふいと目を逸らした。

「全くり、倫太郎さんは、何を言っているんですかね？私がそんなヤキモチなんて……」

必死に誤魔化そうとしている鈴羽がそこにはいた。

そういう所は昔っから変わっていない。

案の定頭を撫でると堪忍したかのように目線を合わせる。

「なんだか倫太郎さんに手名付けられたようで癪に障りますね……」

ま。今は許してあげます。と鈴羽は言った。

その晩は特に何もなかったので二人で夕食を食べた。

「なんか、久々に家で食べる気がするな」

「そうですね。実際あのおでん屋さんに入り浸っていた感じもあり

ますしね」

正直な所そろそろ休肝日を作らなければと思っていた所だ。

「そういえば、あの箱はなんですか？」

鈴羽は今日俺と渡井さんが運んできた箱を指差す。

「ああ、あれは秋葉からの贈り物だ」

「それは聞きましたよ？」

「えーと、俺達が結婚するって言ったらお祝いにつてくれた。実際

の所何が入っているか知らない」

「へえ……」

「そこでなぜ開けようとするんだ。秋葉に式を挙げるまで開けるな

と言われているからな。流石に無粋だろ？」

俺の言葉を正論だと受け取ったのか鈴羽はさすが引き下がった。

今日は久々に時計が頂点を超す前に床についた。

「一緒に寝ますか？」

隣の布団で寝ている鈴羽が少しふざけ気味な口調でそう言う。

俺は言葉で答える代わりに鈴羽の手を握った。

あ。という声と共に鈴羽を俺の眼と鼻の先の所まで引っ張った。

「そっだな」

今更返事をして見たが、鈴羽は遅いですよと言って笑う。

顔が近いせいか鈴羽の息が鼻にかかる。

甘い匂いがした。

「ねえ、倫太郎さん？」

「ん？」

「もし、もしですよ。あの箱の中身がIBNだったら面白いですよ
ね」

「そうだな」

本当はそれなのだが。

「もし、IBNを手に入れば私は役目から解放されて幸せを手に入れますかね……」

俺はその問いに答えなかった。

そして俺たちは……

「倫太郎さんっ。何してるんですか？」

「わ、悪い」

俺達は結婚式当日、式場の中にいた。

今日他にも結婚式を行うカップルもいるのだろうが、まだ姿は見えない。

式場の職員達がちらほら見える程度だ。

俺達の呼んだ参加者の人達には迷惑かもしれないが、普通の結婚式よりも少し早めに時間を設定したのだ。

……もし、泣いてしまったら見ず知らずの人にその顔を見せたくないしな。

俺達は別々に着替えを済ます。

とはいえ、俺は服を着替えるだけなのだが。

鏡に映った自分の姿を見つめる。

無精髭も剃り髪をしっかり整えたそこには別人がいた。

別に自分を褒めているわけではないのだが、どうにも普段は髭こそ剃るようになったが、たまに寝癖がついていたりするのだ。

「携帯に写真を撮る機能があればな」

懐から携帯を取り出して写真を撮ることが出来たのに。

昔は出来たと言つと変な表現ではあるが、2010年であれば問題なく出来ただろう。

ダルや、まゆり。それに紅莉栖にも見せてやりたいものだ。

まゆりは、かっこいいと褒めてくれそうだな。

紅莉栖はきつと、興味ないふりをしながら小さな声で褒めてくれるのかもしれない。

鈴羽の方はやはりドレスを着るだけあつて時間がかかるのかまだ部屋から姿を見せない。

俺は鏡に映る自分を見ながら少し感傷に浸る。

2010年。本来では絶対に会うはずのない俺達だった。片やただの厨二病な男子学生。

もう片方は2036年から来たという未来を変えろという使命を持った18歳の少女。

普通に聞いてれば一笑に伏される所なのにな。

そんな未来から来たなんて漫画やゲームの世界じゃあるまいし。

まさか。とは思っていたが事実は小説よりも奇なりとも言おう。

鈴羽は真正銘未来からきた人間だった。

それもまさかダルの娘だったなんて。

鈴羽がラボメンに名を連ねるのはある意味当然で想定範囲内の行動だったのかもしれない。

彼女は任務を兼ねてラボメンに入ったのだから。

最初に会った時は紅莉栖を露骨なくらい敵意をむき出しにして睨みつけていたのを覚えている。

それも次第に薄くなり、彼女は任務を忘れて束の間の時を過ごした…と思う。

実際の所は俺の知らない所で苦労があったのかもしれないが。

そんな俺達は気づいたら1975年に来ていた。

「今は1986年か……」

鈴羽に入った部屋のドアをチラリと見る。

まだ出てくる気配はない。

ならば、まだ回想に耽るとするか。

秋葉との出会いが俺達の今までの人生を支えてきたと言っても過言ではない。

当然今日の結婚式には呼んである。

今は生まれていないがフェイリスの父。

そして、俺がかつていた世界線ではIBN5100を柳林神社に寄贈してくれた人。

本人にはもう恥ずかしくて言えないが感謝している。

「ん？世界線？」

自分で言った言葉であつたが少しその言葉がひっかつた。
世界線……

確かにこの時代1975年にタイムマシンで遡った時に俺の『リーディング・シュタイナー』が発動したのは覚えている。
しかし、今がいくつの世界線かは知覚出来ない。

ダイバー・ジェンスメーターなんて都合のいい話はない。

俺しか知覚出来ないし、別に知覚出来なくても困るわけではないんだが……

「まさかな……」

そんなことは……。

その時どこかのドアが開く音が聞こえた。

「り、倫太郎さん。これ……どうですか？」

「お……」

俺は思わず言葉を失った。

それまで考えていたことなど忘れて目の前の光景に目を奪われた。
純白のウェディングドレスに身を包んだ鈴羽は俺が今まで見てきたモノのどれよりも美しかった。

この姿が見れたなら今日死んでもいい。

そう思えるほどだった。

「いや、死なれちゃ困るんですけど」

ウェディングドレスに身を包んだ鈴羽が冷静に指摘をする。

「ああ、スマン」

「って、倫太郎さん。もう泣いてるんですか？」

早すぎですよ。と鈴羽はため息を吐く。

いや、確かに自分でも早いとは理解しているのだが、いかんせん自分の意志とは無関係に溢れてくるものは止めようがない。

「止めて下さいよ。私もつられてちゃうじゃないですか」

鈴羽は鼻を擦る。

「じゃ、行きましようか？倫太郎さん」

鈴羽はそう言うと俺に手を差し出す。

全くこういう時くらいは男らしくかつこつつけて鈴羽をリードしていきたいものなんだがな……

俺は苦笑しながら鈴羽の手を取る。

会場の入り口前にやってきた。

中の騒がしさが外にまで聞こえる。

『それでは、新郎新婦の入場です』

中から司会の声が聞こえると、急に喧騒が止んだ。

そして扉が開かれる。

会場から鈴羽の姿を見るとおおという声上がる。

見知った顔ばかりだ。

俺達は拍手の雨に包まれながら歩く。

この時点で俺は涙がギリギリまで溜まっていた。

ヤバイヤバイ。

せめて何か話すまで耐えなければ。

結局俺はボロ泣きして秋葉に大声で笑われた。

「いや、傑作だった」

ケーキ入刀が終わり、友人達と話していると秋葉に肩を叩かれた。

「お、秋葉。悪かったな」

流石にもう涙は止まったが目が少し腫れぼったいかもしれない。

「しかし……ま。橋田さん可愛いな」

「そうだろ」

「いや、本当に……って痛いから耳を引っ張らないでくれますか？」

「幸くんは私じゃ満足できないんですか？」

秋葉が鈴羽を見ているのを感じたのか秋葉の後ろから副島さんが耳を引っ張っていた。

傍から見ていると手加減している様子が無いから千切れそうで少し怖い。

「そ、そんなことない。次は僕たちの番だろ」

「え……あっ……」

副島さんはその意味を理解して秋葉の陰にさっと隠れてしまった。

「結婚するのか？」

「さあな……まあ岡部たちを見て羨ましくなったのは事実だ」
仲人は頼む。と言つて秋葉は他の友人達と談笑に消えた。

「なんで僕まで来てるんだろうね。一応神職なんだけど……」

「文句言つてもしょうがない。知らない仲じゃないでしょ？」

そんな会話が聞こえて振り返つてみると渡井さんと漆原さんがいた。渡井さんを誘つた時に、渡井さんから『漆原も誘つていいか』と聞かれ一応名簿に入れておいたのだ。

漆原さんと渡井さんはどうやら付き合い始めたらしい。

らしいというのは、渡井さんが酒の席でうっかり漏らしてしまったからだ。

翌日素面の渡井さんに尋ねるとそんなことはないと言顔を赤くして否定されたが。

渡井さんが嫁いだら、巫女さんの服を着るのか……。少し想像してしまった。

「二人とも元気ですね」

「あ、岡部くん。おめでとう。彼女可愛いね」

「そうですね。岡部さんおめでとうございます」

「漆原が言つとどうも気持ち悪いんだよね」

どうにも渡井さんが漆原さんに対する扱いが酷い気がするのには気のせいだろうか。

「じゃ、私達も秋葉と一緒に挨拶してくるね」

バイバイ岡部くん。そう手を振ると知人を見つけたのか手を振っていた。

「なぜです!？」

一際大きな声が聞こえた気がする。

その声には聞き覚えがあつた。

何故招待したのか俺には理解に苦しむのだが、鈴羽が招待していた人物だ。

俺はその人物の後ろに急に立ち高笑いをする。

「この、鳳凰院凶真の前に再び現れるとはな、命知らずとは貴様の
ようなことを言うのだな中鉢」

俺の声を聞くと鈴羽の方を向いていた中鉢が俺の方を振り向く。

「きつ、貴様。あの時忠告したはずだ。俺に殺されたくなければ橋
田助教から手を引けと」

「そんなことよりどうしたのだ？その目？やけに赤いが？まさか泣
きはらしたのか？」

ぐっと中鉢は齒噛みする。

正直俺もさつきまで泣いてたから人のこと言えないが。

言い返さない辺り凶星なのだろう。

意外に純情な奴かもしれない。

というかきつと俺に似ている。

「貴様見ているよ。俺もいつか……」

そう言う中鉢は鈴羽に一礼をして研究室の友人であろう人達と話
始めた。

「そっちは終わりました？」

鈴羽は挨拶が終わったのか、俺の隣に来た。

「まあ、あらかたな。しかし、どうして中鉢を呼んだんだ……」

「中鉢？ああ、牧瀬くんのことですか？いいじゃないですか。教え
子を招いても」

まあ、そうなんだがなあ……。

ひょっとして鈴羽は中鉢の思いに気づいていないのだろうか？

こうして結婚式は幕を閉じた。

「いやー疲れたな」

「そうですね」

結婚式をその他諸々を終わらせた後俺達は家にいた。

ジャーという風呂に水が流れ込む音が聞こえる。

秋葉とかにはホテルにでも行くのか？

と囁かれたがそんなことなく二人で家路についた。

「私お風呂入ってきますね」

鈴羽は一息つくつと洗面所に行く。
服を脱ぐ絹摺れの音が聞こえる。
柄にもなくドキドキする。

俺もやることがないので布団でも敷く。
勿論二人分だ。

「倫太郎さん出ましたよ」

「あ、ああ」

鈴羽は早く入ってきて下さいよ。と俺を催促する。

俺は風呂には長く浸かるタイプではないのですぐに風呂から出た。
風呂から出ると部屋が暗かった。

鈴羽が消したのだろう。

俺は手探りで布団まで歩いていく。

足が布団を触った感触があったので布団の中に潜る。

布団に入ると隣から柔らかさを感じた。

「わざわざこっちに入ってくるなんて倫太郎さんなかなかやります
ね」

「わ、悪い。鈴」

慌てて布団から出ようとしたが鈴羽に掴まれた。

「鈴？」

「逃がしませんからね」

俺は諦めて布団の中に戻る。

「倫太郎さんは私の体嫌いですか……？」

「いや、決してそんなことは」

正直大好きだ。

「鈴……」

俺は鈴羽の方を向く。

酒は入っていないはずだが、目が潤んでいた。

心なしか顔が赤い気がする。

もしかしてそれを隠すために電気を消したのかもしいれないな。

俺はギュッと鈴羽を抱きしめた。

あつという声が聞こえた。

柔らかい。

愛しい。

離したくない。

この晩俺達は一つになった。

そして俺たちは……（後書き）

何かあればお願いします。

まだまだ続きますよー。

1991……（前書き）

さて、そろそろ物語が動き始めますかね。
当初の構想ですと丁度折り返し地点とでも言いましょうか。

「最近景気が悪くなってきましたねえ……」
鈴羽はそう言うのとテレビを消す。

俺達はあのアパートから引越して少し交通の便のいいところに引越した。

表向きは秋葉の会社の社宅扱いなので家賃はタダ同然だった。

1991年と言えば俺が生まれた時代だ。

とはいえ俺は別に零歳というわけではない。

今こうして鈴羽と一緒に生活をしている。

もう一つ1991年で思い出すことと言えばバブル崩壊である。

このことを知っている俺は秋葉にそう言うと、秋葉は最初は信じていなかった。

しかし、俺の言葉だからと半信半疑ながらも手広く行っていた事業も縮小させ、採算の取れる事業に絞って事業展開をしたのだ。

それで俺の言った通りバブルは文字通り泡のように消え去り、不渡りや銀行の不良債権などが溢れる時代に突入した。

この状況を見た秋葉は俺に対して、さながら救世主だな。

そう言っ互いに笑いあった記憶がある。

俺達が結婚したその年、秋葉は結婚した。

なんでも秋葉はまだ結婚しなくても良いというような立場だった。

しかし、副島さんの方が俺達の結婚式を見て早くやりたいとせがんだらしくその年中に結婚式を挙げたのだ。

秋葉が言った通り俺が仲人を務めたのだが、正直何を喋ったのか覚えていない。

笑いを取るつもりではないはずが会場は笑っていた記憶がある。

それから渡井さんも漆原さんと結婚した。

意外と言えば意外だし、順当と言われれば順当である気もする。

とにかく渡井さん主導のような印象を受けた。

流石に漆原さんが神主なので、教会というわけにはいかず神社で結納をした。

この時は流石に秋葉が雇い主なので仲人をかって出た為に俺は喋ることは無かった。

式が終わったあと漆原さんが俺と喋った時に口を滑らせてしまったのか出た一言が忘れられない。

「何が、彼女に似た大人しい女の子が欲しいな」だよ……」

結局男だろうとお構いなしじゃないか。顔が良ければなんでもいいのか。とというツッコミをしようと思っただがすんでの所で呑み込んだ。

そして驚くべきはなんと中鉢が結婚したのだ。とは言っても最近結婚したのだが。

結婚式の時に尋ねた通りあいつは間違いなく鈴羽のことが好きだったはずだ。

失恋からの立ち直りの早さにも驚くが、それよりも意外なのは、中鉢の、いや牧瀬章一の破天荒振りに着いていける人がいたことに驚きだ。

初めて会ったのは結婚式の時だった。

随分とまあしつかりとしていて目がどこか紅莉栖に似ていた。

ただ話すだけで伝わってくる理知という言葉が似合う雰囲気を出していた。

紅莉栖の母親と会って分かったのだが、紅莉栖のあの髪は地毛だったのか。

ダルや、まゆりの家族と会うことは叶いそうにないがあいつらも少なからずダルに至っては今年中には生まれるのだろう。

「倫太郎さん？またどこかに意識が御留守になってるんですか？」

お父さんは困った人でちゅねー。

鈴羽は自らの体に語りかける。

鈴羽は妊娠していた。

もう傍から見ても膨らみが見てとれる。

1975年に来た時にはこういう展開になるとは思わなかったが後悔はしていなかった。

それは鈴羽も同じであった。

自分の選んだ道に悔いはないと俺の前で言い切った。

名前も決めてある。

男ならば、『鈴太郎』

女ならば……まだ決めていない。

まあ、生まれてから決めればいいだろう。

俺は自分の腕を見る。

何も無い。

別に体に不具合は感じることはない。

世界は俺達のことを観測していないのか？

幸いなことにこの世界線では俺、岡部倫太郎という人間は二人存在していない。

タイムパラドックス。

時間的矛盾。

2010年に鈴羽が言っていた世界線概念。

世界線とはより糸。

どのような道を辿っても最後には同じ結果に収束する。

言葉で言われてもいまいち理解し辛いが俺はソレを経験してきた。

だから体系的に理解出来る。

もし、その理論が正しいのならばこうして俺達が過去に遡る行為は無駄だったのか。

2010年と2000年。

違う世界線に移る転機となると鈴羽はかつて言っていた。

俺はカレンダーをチラリと見る。

1991年。

2000年に世界線を飛び越える機会あると言うのなら、一度世

界は収束するのではないだろうか。

俺や鈴羽は、世界から見たらイレギュラー以外の何者でもない。ならばその時にまとめて修正をかけてくるかもしれない。

これはあくまでも仮説の域を出ない。

もしかしたら明日にでもフラクタル現象で俺の体がゲル化してしまうかもしれない。

今ならば、俺はそれでもいいと自信を持って言える。

鈴羽が笑顔でいてさえしてくれば。

来る1991年12月14日。

今日は俺が生まれた日だ。

親にいつ頃生まれたかは聞いていなかった。朝なのか昼なのか、はたまた夜中かは分からなかった。

その日朝から俺は体調が優れなかった。

鈴羽の方もそろそろ出産が近いらしく、秋葉の知り合いの病院に入院していた。

だから俺は部屋に一人取り残された。

もし病気なら鈴羽には絶対に移したくないという思いもあった。

普段ならば特に気にするほどでもないのだが、体調の関係もあってか細かい。

熱があるというわけでもなく、風邪の類ではない。

嫌な予感が体全体に纏わり付いているのだ。

嫌悪感と嘔吐感。

胃の中のものが吐きだされそう。

とりあえず寝ておけば良くなるだろうと床についてみたがよくもならない。

「ッ！」

頭に電撃が走ったような錯覚。

薄れゆく視界の中で俺はあの感覚に包まれる。

目を開けているのか閉じているのか知覚出来ない。

そして、この世界には存在しない、いや、してはいけないものが俺の意識の中では目の前にあった。

世界線変動率メーター。

ニキシ 管に表示されている数字がせわしなく動く。せわしなく動く数字。

その一つ一つの数字を目で追うのは不可能だ。しかし、一つだけ全く動かないニクシー管があった。一番左側の管。

すなわち俺達がどの世界線に存在するかという数字。俺は言葉を失う。

0.8その数字だけは固定されていた。

俺達がいた世界の世界線は確か……0.337187。

1パーセントの壁は超えることが出来なかったようだ。

その数字の動きが止まると不思議と俺の体調も落ち着いてきた。体を起き上らせて炬燵の中に入る。

電源は点けていないがそれなりに暖かった。

俺は炬燵の上に紙を置いて今の状態を整理する。

今俺達がいるのは世界線の率は違えど、世界線の域を出ない。となると俺達の歩む人生は見えてくる。

震える指で紙に書きこむ。

そうならないように願いを込めながら。

この世界線は、2000年に鈴羽と秋葉が亡くなる世界線なのだ。俺はその線と平行してもう一本別の線を引く。

世界線を模したものだ。

どうにかこちらに移れないものか？

そうやって二つの平行する線をまたぐように線を書いていると新たな問題に直面する。

俺はどうしてすぐに世界線に戻すことをしなかったんだ？

まゆりが死ぬのを見たくないだけなのならばすぐにでも 世界線に戻せばよかったではないか。

勿論IBN5100が手に入らなかったということもあった。

しかし、俺は無意識に避けていたのではないのか……。

「牧瀬…紅莉栖……」

俺はある未来の天才脳科学者の名を口にする。

世界線とはすなわちこれから生まれるであろう牧瀬紅莉栖が死ぬ世界線だ。

俺は頭を抱える。

即ち秋葉と鈴羽を取るか、牧瀬紅莉栖を取るかと言う問いになる。

「人数の問題じゃないだろ……」

無数の線が描かれた紙がグシャッと音を立てて歪む。

そんな時電話が急にジリリリと音を立てた。

はい。と俺が電話を出ると電話の主は秋葉だった。

『おい、岡部。今、鈴さんの容体が急変して予定より二日早いが出産するらしいぞ』

秋葉はまだ何かを言っていた気がするが俺はガチャンと乱暴に受話器を置く。

自分の手に握られた紙をグシャグシャにしてゴミ箱に投げ捨てて着の身着のまま家から飛び出した。

1991……(後書き)

なにかあれば遠慮なく

はじめまして(前書き)

さて、いよいよ役者が出揃ってきた感じはありますねえ……

はじめまして

俺が病院に着くと秋葉が手術室と書かれた部屋の前の椅子に座っていた。

遠目から見ると頂垂れているようにも見える。

「秋葉！」

俺の声に気がついたのか秋葉は頂垂れていた頭を上げた。

「おお、岡部。病院の方は岡部に一度連絡を入れたが繋がらなかったらしく俺の方に入れてきたらしい」

じゃあ、後は任せた。

そう言うと秋葉はよれていた背広の襟を正し、どこかに電話をしなから足早に去っていった。

渡井という単語が聞き取れる。

恐らくここに来てしまったことで今日の仕事の予定に変更が生じてしまったのだろう。

他人のことなのだから無視してしまえば済むはずなのに……

秋葉らしいと言えはらしい。

そのらしさのおかげで俺はこうして間に合うことが出来た。

今度フェイリスが生まれる時は俺も何か恩返しが出来たらな。と俺は漠然と思った。

「そうだ鈴羽」

俺は赤いランプの灯った手術室を見つめる。

医学に明るくない俺では分からないがどの位手術に時間を要するのだろうか。

それから俺はどの位待ったのか分からない。

一時間だったか三時間だったかそれとももっとかかったのか。

どちらにせよその時間が永遠のように感じられた。

幾度足を組み変えただろうか。

赤く灯っていたランプは色を失った。

手術室の扉が開く。

俺は思わず中を覗きこむ。

看護師さんと目が合った。

彼女は俺と目が合うとにこやかに笑った。

その時ようやく室内にけたたましく響く泣き声に気づく。

泣き声など耳触りだろうと思っていた。

それは勘違いだったようだ。

その泣き声を聞けば聞くほど涙が止まらない。

男の子だった。

俺の血を受け継ぐ子供。

「あ……れ？倫太郎さん泣いてるんですか？」

「なっ……馬鹿を言うな」

俺は鈴羽に指摘されて顔に血液が集まる。

服の袖で涙をこしこしと拭くと得意気に鈴羽の方を見る。

「ふはは。ほら、どこらへんが泣いてるといふのだ」

俺の気丈な振舞いがおかしかったのか鈴羽は少しクスリと笑った。

とりあえず俺は一度退散することにした。

何かと生まれたばかりだとやることがあるらしい。

俺はいそいそとその場を後にすると公衆電話に向かう。

2010年ではレトロ扱いされて最早探すのすら難しいのだが、こ

の時代はそこら中にある。

自前のテレホンカードを入れると最早暗記している番号を押す。

トゥルルルルと受話器から音が流れる。

相手方が取るのが早かったようで一小節終わる前に相手が電話口に

出た。

「はい。秋葉」

「あ、秋葉か！」

「おう。俺だ。どうだった？」

「それが……」

「それが……？」

「男の子だった」

俺がそう言つと電話口で祝う声が聞こえた。

声から察するに渡井さんも近くにいたらしく、良かったですね。という声が聞こえた。

二人共子供が生まれるには二年後位か。

「おう。良かったな。岡部。俺は少しこれから用があるから切るが、向こうさんにもよろしくな」

そう言い残してガチャリと電話が切れた。

俺が電話をし終わると看護師さんが俺を探しているようだった。

「あ、ご主人様ですよね？」

「え？まあはい」

「赤ちゃんご覧になれますよ」

こちらへどうぞと俺は看護師の後ろを付いていく。

案内された部屋には沢山の赤ん坊がいた。

この病院にはこんなにも赤ん坊がいるのか。

俺は素直にその事実には驚く。

看護師の指の指すままに俺は赤ん坊を見た。

俺の子供か……

正直嬉しい。嬉しいのだが実感が湧かない。

俺は自分の子供をある程度堪能した後鈴羽の病室を訪れた。

麻酔が効いているのかスーと規則正しい寝息を立てて寝ていた。

俺は鈴羽が寝ているベッドの横の椅子に腰かける。

寝息を立てる鈴羽の顔を見る。

相変わらず目鼻立ちがすっきりしていて俺には本当に勿体ないくらいの美人だ。

俺は自然と鈴羽の手を握っていた。

ありがとう。

ただそれしか言えなかった。

「んあ？あ、倫太郎さん」

どうやら起こしてしまつたようでもまだ寝ぼけ眼だが鈴羽はこちらを

見て微笑む。

「すまない。起こしてしまったようだな」
いえ、別に構いませんよ。

目を擦りながら鈴羽は言った。

「それにしても男の子でしたね」

「ああ、名前は前に決めた通りか？」

ええと鈴羽は頷く。

「『鈴太郎』二人のりんたろうに囲まれるなんて私は幸せですね」
恥ずかしそうに鈴羽は身をくねらせる。

そんな鈴羽の仕草を見て俺は微笑む。

願わくばこの三人の幸せがいつまでも続けばいいと。

1992年7月25日

「何故貴様が俺の隣にいるッ!!」

「気にするな。これも運命石の扉の選択なのだ」

俺と中鉢はこの日二人揃って病院にいた。

理由は簡単だ。

今日は紅莉栖が生まれる予定の日なのだ。

鈴羽が出産して暫くしたある日のこと中鉢が一人尋ねてきたらしいのだ。

というのも俺は仕事をしていたので鈴羽からの又聞きだ。

中鉢は普通に遊びに来たようで少し世間話をして帰ったらしいがその時自分の妻も妊娠していることと病院を鈴羽に漏らしていた。

それを聞いた俺がこのまま指を啜えて見ているのは変な話だ。

幸い紅莉栖の誕生日には見当がついていたのでその日に病院に行ってみると案の定そわそわしている中鉢に出会って今に至るのだ。

「ごめんなさいね。牧瀬くん」

「いえ、経験者の橋田助教授がいて下さるだけで心強いです」

「待て。鈴は生んだ側だ。手術室の前で待っていたのは俺だ。だから経験者は俺になるのではないか？」

「貴様は、橋田助教授を奪っておきながら……うるさいわ！」
そう言つとムスツとした顔で椅子に深く座りこんだ。
ふむ。中鉢も慣れてくると随分と扱いやすい奴だ。
しかし、流石にナーバスになつてゐる時期だろう。
やりすぎた。と少し反省した。

「大丈夫だ中鉢。意外に女の人は強いぞ」
俺の激励ともとれる台詞が意外だったのか中鉢は一瞬目を丸くしたが、おう。と言つて俺から視線を逸らす。

「しかし、よく寝ますねこの子」
鈴羽が我が子を見る。

先程からすやすやと寝息を立てている。

鈴太郎はあまりぐずらなかつた。

そのせいで何か病気ではないか？

とさえ二人で疑つたほどだつた。

医者に見せたが病気でなくてもないとのことだつた。

しかし、俺が紅莉栖が生まれる瞬間に立ち会うとは……。

過去に跳んだとはいえ、まさかこんな状況になるとは思つてなかつた。

「おい、鳳凰院」

「なんだ中鉢」

「少し聞かせる」

「なんだ。暇つぶしの相手か？」

「嫌なのか？」

「いや、別にそういうわけではないが」

「そうか。なら答える。貴様は未来から過去に来て、未来を変える
ということはどう考える」

その問いに俺は一瞬言葉に詰まる。

「どういう意味だ？」

「この間とある洋画を見てな。主人公が過去に跳ぶという話だつた
のだが、その時両親の未来をつつかり変えてしまひそうになつた。

その結果家族で映った写真の中の主人公の兄が消えそうになったのだ」

貴様はこれをどう考える？

中鉢はそう聞いてきた。

その映画なら確か俺も2010年に見た記憶がある。

確かにそんなシーンはあった。

中鉢は俺が答えないのを無視して話を続けた。

「助教の論文や貴様の論文を読んでいる内にふとある推論に至ったのだ」

二人は未来から来たのではないのかと

その言葉に俺は極めて無表情を貫く。

俯いている為に表情は見えない。

「特に貴様の書いた論文は荒唐無稽で何を言っているのか皆目見当もつかない器具を用いて時空転移を可能とする試みのはずだったが、携帯電話というのは実際に出現した。このままかといつか42型という特大なテレビが出来るかもしれないそう考えた

中鉢の言葉を聞きながら俺は別の事を考えていた。

中鉢というのはただのイカれた科学者ではなかったのか。

@ちゃんねるに書きこまれたジョンタイタの理論を模倣しただけのインチキ科学者ではなかったのか。

姿は違えどそこには牧瀬の血を感じた。

「そこで鳳凰院。貴様に聞きたいことがある」

「なんだ？」

「貴様らの体はなんともないのか？」

ああ。俺は即答した。

どう見たって俺も鈴羽も健康体そのものだ。

「ほら……」

そこで俺の言葉が止まる。

手が一瞬ゼリーののように崩れたのだ。

慌ててもう一度見ると何事もなかったかのように俺の手はそこにあった。

「どうかしたか？」

「い、いやなんでもない」

そうか。そう言って中鉢が手術室の方を向くと丁度ランプが消える。

俺達三人に緊張が走った。

部屋の中から元気な赤ん坊の泣き声が聞こえた。

その声を聞いていの一番に中鉢は駆けだす。

俺も次いで扉の中に入る。

そこには看護師に抱き抱えられる牧瀬紅莉栖がいた。

正確には紅莉栖と名付けられる前の赤ん坊が。

俺は先程の不安を忘れ、ただ目の前の光景に微笑んだ。

おめでとう。そして初めましてクリスティーナ。

はじめまして（後書き）

なにかあれば遠慮なくお願いします。

外国から来た大男（前書き）

こんばんは。

そろそろ物語は終盤にむけて加速します。
多分。

外国から来た大男

「ほらー鈴太郎。こっちこっち」

俺が手を叩くと鈴太郎はその音が鳴る方向に歩を進める。

「なに？ぱぱ？」

鈴太郎は俺に向かって小首を傾げる。

正直可愛い。

口がどうしても緩んでしまう。

鈴羽が鈴太郎を生んでから早四年。

世界は依然不況のままだったが俺達は幸せに暮らしていた。

秋葉の会社も依然として順調だった。

秋葉曰く、昔に言ったが見えてる落とし穴に落ちる奴はいないからな。と笑っていた。

そういえば、そんな秋葉にも娘が生まれた。

留美穂という名前だったかな。

それがどうしてフェイリスと名乗るのかは甚だ謎なのだが、まあそれは追々分かるのだろう。

秋葉の娘が生まれたのも俺達と同じ病院だった。

秋葉も案の定仕事が手に付かず出産予定日の数日前からずっとそわそわしていたのを思い出す。

しかも渡井さんも産休を取っていたので、俺が秘書の代わりをする事になった。

俺が電話を取る度に病院からの電話じゃないのか？と聞かれたりと随分とナーバスになっていた。

きつと秋葉も親バカになるだろう。

秋葉の言動が二年前の自分と被った。

一方の渡井さんも八月に出産した。

漆原さんは秋葉や俺と違いやけに落ち着いている気がした。

秋葉の様子を見て来いと言われた俺一目でそう感じた。

「落ち着いてますね…」

「いえ、そりゃ、毎日願掛けてたらもう怖いものなんてありませんよ」

漆原さんがそう言って笑った顔もどことなく緊張の色が走っていたのは忘れられない。

鈴羽はいつの間にか教授になっていた。

というのも鈴羽の研究室の教授が一身上の都合で大学を辞めてしまつたらしく、繰り上げのような形で教授の席に座つたのである。

「まだ、教授なんて柄じゃないんですけどね」

鈴羽はそう言つたが満更でもなさそうだった。

俺も素直にその事実は嬉しいし、祝福してやりたかつた。

しかし、俺は紅莉栖が生まれた日以来あの考えから抜け出せないのだ。

世界線の矛盾。

このままだと鈴羽も秋葉も2000年に死んでしまふ。

縦しんばその事実を変えたとしても2010年に紅莉栖が死んでしまふ。

この二つを回避する方法を鈴羽にバレること無いように考えていたが特に画期的な方法は生まれなかつた。

1997年にタイムリープマシンなんて都合のいいものがあるわけではない。

それに俺、ダルそして牧瀬紅莉栖が揃つてない時点でそんな代物は生まれなかつたのだ。

「ばば。どうしたの？」

鈴太郎が心配そうに俺の頭を撫でる。

鈴太郎の顔を見る度に俺は勇気づけられる。

この子の未来を守らなければいけない。

既にこの問題は二人だけの問題ではなくなつていたので。

俺はふと時計を見る。

午後五時。

鈴羽からの連絡はない。

今日は早く帰ってくるのだろうか。

この時期は五時と言ってもまだまだ日が沈む気配はなく、西日が目に痛い。

「ただいま帰りました」

「おかえり」

噂をすれば主と言うが本当に鈴羽が帰ってきた。

鈴羽は俺の顔を見て少し驚く。

「あら、今日は全休でしたっけ？」

「まあ、秋葉も暇だって言っていたし、来ても無駄だから来る位なら俺の娘の世話しろ。って言われたから大人しく

家にいたんだよ」

ああ、秋葉さんらしいですね。と鈴羽は着ていた服をハンガーにかけた。

それから俺達は早めの夕食を取った。

今日はこの後少し秋葉の家に行かねばならない用事があったので三人で出かけた。

鈴太郎も秋葉の家は広くて大きいから気に行っているらしく行く時はいつも上機嫌だ。

俺の家から秋葉の家までの道も街灯が付いたせいか随分と明るくなった。

こんなに明るければ変なことなど起きるはずがない。

「？」

俺達の前に大男が現れた。

長髪に無精髭といういかにもホームレスに似た風貌をした大男。

しきりに俺に話掛けていているらしいが向こうは酔っ払っているのか発音が明瞭ではないせいで聞き取れない。

「岡部さん」

俺が辟易していると鈴羽が俺の前に立った。

流石鈴羽。

こういう手合いに慣れていて話を聞くのが上手なのだろう。
そう思っていた俺の期待はすぐ裏切られた。

「はっ！」

鈴羽は大男の体がくの字に折れるほど強烈な一撃を鳩尾に打ち込む。
酔っ払っていたせいもあってか大男は成す術もなくその場に倒れこむ。

「さ、行きましょ」

茫然とする俺と鈴太郎に対して特に何もなかったかのように振舞う
鈴羽。

俺は絶対鈴羽と喧嘩はしないと誓った。

「おおおお」

鳩尾を殴られた大男は一気に正気に戻ったらしい。
しきりに呻いていた。

「あの……大丈夫ですか？」

流石に心配になったので俺はその大男に問うた。

「ああ、平気なんだが……一体何が起きたんだ？」

そう答えた大男の顔に俺は既視感を覚える。

どこかで見たことがある。

そう2010年に……。

「もしかして、あなたは……MR ブラ……じゃなくて天王寺か？」

「あん？どっかで会ったことあったか？」

大男もといMR ブラウンこと天王寺裕吾は俺を訝しむような目で
見る。

「俺は最近つてか今日こつちに帰ってきたばっかりだから知り合い
なんているはずがねえんだが……」

「い、いや顔がいかにも天王寺って顔をしていたからな」

明らかに苦し紛れもいい所だったが、MR ブラウンは納得してい
たので一安心した。

「というか、なんであんたいきなり殴ったんだ……」

MR ブラウンは鈴羽を睨む。

「え？だってこの人今にも襲ってきそうじゃありませんでした？」
キョトンとした顔で鈴羽は言う。

鈴太郎も俺も、勿論MR、ブラウンも呆気に取られていた。

「私、間違っていましたか？」

「いや、そんなことはないありがとう。助かった鈴羽」

ならいいです。と鈴羽は頷く。

「それで、天王寺さんはどうしてこんな所をうるついていたんですか？」

鈴羽にそう聞かれ若干口が引きつりながらもMR、ブラウンは答える。

「いやな、久々にこつち帰ってきたのはいいんだが、どうにも知り合いも少ねえし、やることなく酒を煽って、気づいたらあんに殴られてた」

「へえ。それはそれは。つまり、あなたはホームレスってこと？」

「う……あんな意外にはつきりと言うんだな」

凶星だったようで口には苦い笑みが広がっている。

そつえば鈴羽が1975年に一人で跳んだ時も鈴羽の最期はMR、ブラウンが看取っていた。

どうやら俺と一緒に跳んだ所で世界線の誤差の範囲の内ではないようだ。

その時俺は秋葉の家に行く途中だったことを思い出す。

「鈴羽……そろそろ秋葉の家に……」

「待って下さい。倫太郎さん。流石に今になって少し罪悪感が出てきました……。せめて家の手配位はしたいです」

「なら、俺達の家隣空いてるからそこに住めばいいんじゃないか？」

それは名案ですね。倫太郎さん。

指をパチンと鳴らしてそれは妙案だとも言うように鈴羽は俺を見る。

「良かったですね。天王寺さん。家が決まりましたよ」

「お、おう」

急展開もいい所で自らの住まいが決まっちゃったMR、ブラウンはただ頷くしかなかった。

「それじゃ、私達これから行く所があるので失礼しますね」

「お、おい、あんた」

「なんですか？」

「い、いや、その住所を教えてくださいよ……。じゃなきゃそこに辿りつけない」

ああ、すみません。鈴羽はそう言うのとポケットからメモ帳を取り出しペー지를一枚破ると、サラサラとペンを動かして我が家の大家の住所を書いた。

「多分この大家さんは夜遅くまで起きてる方ですから丁寧に願いますれば何とかかなと思います」

MR、ブラウンは、悪い。と一言礼を言うとその住所を探して歩いていった。

「さ、向かいますよ。余り遅いと秋葉さん達も心配しちゃいますからね」

「そうだな」

俺は鈴太郎の手を引いて秋葉の家へと足を進めた。

「で。その大男はお前の知り合いなのか？」

鈴羽は秋葉の奥さんと一緒に子育てについて応接間で仲良く話している横の部屋で俺は先ほどのことを秋葉に話していた。

「勘がいいな。実はな……」

俺はそこで2010年の時の思い出を秋葉に語った。

「なるほど。その天王寺って人が部屋を貸してくれてブラウン管の店をやっていないければ、岡部達はこの時代に来なかったのか」

相変わらず秋葉は理解するのが早い。

「それで、その話を俺にしてなんの意味があるんだ？」

「俺がこの時代に来たのに世界が変わってないと思うんだ……。うん？秋葉は俺の言葉に興味を惹かれたのか顎で続きを促す。」

「俺は俺のいた世界における2010年の未来を変えるためにここに来たのは話したな？」

「ああ、なんか世界線がどうか言ってたな」

「俺の目標は世界線を越えて未来を変えることなんだ」

「成程。つまり今現在岡部がこつちに来たのにも関わらず、世界線の変動は世界から見たら誤差の範囲で、結局このままだと未来は変わらないってか？」

秋葉の言葉に俺は頷く。

そして俺は禁断の言葉を紡ぐ。

言葉にしたら現実になりそう。

それでも誰かに聞いて貰いたくて。

「このままだと……2000年に鈴羽は死ぬ」

秋葉も俺の口からそんな言葉が出るとは思ってもみなかったらしく珍しく動揺していた。

「それは本当の話なのか……いや、そんなこと聞くのも野暮ってもんか……」

秋葉は万年筆で机をコツコツと叩きながら何かを視認している。

「いまいち世界線なんて概念は想像つかないが、それってつまり2010年にしか存在しないはずの岡部達が2000年に存在している矛盾を世界が正しているという認識でいいのか？」

「多分……」

俺は曖昧に頷く。

流石に面と向かって秋葉も死ぬなんてことは言えなかった。

「まあ、俺には何も出来ない。出来ることがあったら教えてくれ」
そう言うと秋葉は表情を緩ませる。

「それよりさ……最近鈴太郎くんどうだ？勿論留美穂は可愛いが俺は男の子が欲しかったな」

「ああ、最近鈴羽に似て運動するのが大好きみたいだ」

そうかそうか。そりゃいいな。秋葉は笑う。

「俺ももつと構ってやればいいんだが、いかんせん仕事がな……」

俺はちらりと秋葉の机を見る。

会社で処理しきれなかった仕事であろう書類が束になって重なって
いた。

社長というのも楽しやないはずだ。

俺は秋葉の目の下に薄らとしたクマが見えて居た堪れない気持ちに
なる。

「そろそろ帰ることにするわ。鈴羽も仕事あるだろうし」

「そうか？分かった。夜だし、一応車出すか？」

俺は秋葉の申し出を断って三人で歩いて帰ることにした。

「そっぴや、目的は済んだのか？」

帰り道で鈴羽に問う。

「はい。それはばっちり」と

鈴羽は満足気に頷く。

ママ友とでも言うのだろうか。

鈴羽はもう仕事に復帰をしているので、そういう子育ての知り合い
が多くなかった。

だから一カ月に数回秋葉の家で副島さんと子育ての話をしなが
らお茶でも飲むことになったのだ。

理想としては昼の方が勿論いいのだが、鈴羽は大学の講義もあるの
で、余り遅くならない程度に集まることとなったのだ。

俺自身は秋葉とは毎日のように顔を合わせているから特になん
の感慨も湧かない。

しかし、鈴羽は副島さんと話すのをとても楽しみしているらしく、

秋葉の家に行く日はいつも機嫌がよかった。

秋葉に聞いた所によると、副島さんも似たような感じで、いつ来る
のか？と窓から外を見つめてそわそわしているらしい。

俺は、副島さんがそわそわしている情景を思い浮かべながら帰り道
を歩く。

家にさしかかった時自分の家の横に誰か立っていた。

「どうも。岡部さん」

MR ブラウンだった。

向こうからしたら当然なのだが、さん付けで呼ばれるとこそばゆい。

「どうかしたんですか？」

「さっき、大家と話をつけて、隣に住むことになったみたいだ」

これからよろしく。

MR ブラウンに頭を下げられた。

「あら、よろしく。天王寺さん」

隣にいた鈴羽が頭を下げる。

俺はその様子を見て感じた。

どうやら、世界は、俺の願いを嘲笑うかのように順調に収束して
るようだ。

外国から来た大男（後書き）

何かあれば。遠慮なく。

仏蘭西からの手紙（前書き）

お久しぶりです。

これからも応援お願いします。

仏蘭西からの手紙

俺達の家の隣にMR ブラウンが越してきたというのは家賃を取りに来られそうで少し落ち着かなかった。

まあ、実際はそんなことがあるわけでもなく、特に変わったことが起きなかった。

MR ブラウンは家賃を稼ぐために工事現場の仕事をやったりとにかく力仕事をよくしていた。

2010年に出会った時に、年齢の割に良い体つきをしていたのも頷けた。

聞くところによると、あの晩、酔っ払っていたとはいえ鈴羽の一撃で沈んでしまった自分を鍛え直しているらしかった。

それを聞いた鈴羽は、それは楽しみですね。そう一笑伏してお茶をすすっていたのを思い出す。

言っでは悪いが、鈴羽も若くないのだから無理に張り合わないで欲しいと思う心は俺が年を取ったせいだからなのだろうか。

「倫太郎さん、また考え事ですか？そろそろ手伝って下さいよ」

「じんぐるべーる。じんぐるべーる」

「ああ、すまん。少し外を見ていてな」

「雪でも降ってきましたか？」

「ゆきい？」

雪と聞いて鈴太郎が慌てて、俺の脇の下から興奮気味に窓の外を覗く。

予報では午後7時頃から降り始めるとのことだったがそういう予報は得てして当たらないものだ。

鈴太郎を見て俺も昔、こうしてまだ雪が降らないかと楽しみに見ていたこともあったと思ひ出す。

大学の同期にこういふ話をする雪国出身の友人からは、東日本の人間は気楽だなと苦笑された。

結局俺はこの年になっても雪国の生活を体験することなく人生を送っているが、たまに降る雪を見ると、子供の時のワクワクとした感情よりも頼むから積もらないでくれ。

という願いが勝ってしまう。

我ながら、年を食ったなとしみじみ感じる。

もし俺が2010年で同じ雪を見ていたら何と言っていただろうか

……

きつと、『ああ、俺だ。外を見ているか。そうだ。遂に奴らは自分達は天候を操ることも意のままだと脅迫してきている。……なに。

どうして心配そうな声をあげるのだ。俺がそんなモノに屈する訳がないだろう。天候を操ることが出来てもこの俺は鳳凰院凶真を操ることは敵わないからな』

「エル・プサイ・コングルウ」

こんな感じでどこにも繋がっていない電話に向かって囁いていただろう。

俺が、聞き慣れない単語を発した為か、不思議そうな顔で鈴太郎は俺のことを見上げる。

「もう、またその言葉ですか」

鈴羽はもう聞き飽きたとでも言うかのようにため息を吐いた。

「そういう、よく分からない言葉はあんまり真似させないで下さいよ」

「分かってるって」

「ならいいですけど。」

鈴羽はそう言うテーブルに料理を置いて時計にチラリと目をやった。

「遅いですねえ……」

俺も釣られて時計を見る。

MR、ブラウンと四人でクリスマスを祝おうという話になっていた。結構な頻度でうちを訪ねてくるMR、ブラウンは鈴太郎の年の離れた兄のような存在になっていた。

そこで鈴羽がお礼も兼ねて、家が隣同士ということもあり我が家でクリスマスパーティーを行うことになっていた。

MR、ブラウンはその日仕事が18時過ぎまであるらしいことを言っていたので19時に来るのは難しいかもと言っていた。

それでも、今か今かと待ってしまるのが人情である。

俺達のそんな心を読んだのか、ドアをノックする音が聞こえた。

「あ、天王寺です」

俺はその声を聞くとドアを開ける。

「こんばんは」

「あ、どうも」

MR、ブラウンはなにやら袋を俺に手渡すと部屋に入った。

渡された中身を見てみると何やらケーキのようだった。

それを俺は鈴羽に見せる。

鈴羽は驚いたように目を丸くした。

「天王寺さんわざわざ……」

「いや、気にしないで下さい。ただ自分が甘い物を食べたくなくなっただけなんで……」

照れたようにMR、ブラウンは言った。

自分が食べたいと言った証拠にクリスマスケーキではなく、全種類類の違うケーキが四種類入っていた。

俺と鈴羽はもう一度礼を言うと、四人で夕食を食べ始めた。

会話自体は他愛のないものだったが、いつもより一人多いだけで大分違ったものになったとを感じる。

「そういえば、天王寺さんってフランスにいたんですっけ？」

「そうですね。南フランスにいました」

「ってことは、フランス語はペラペラですか？」

ええ。とMR、ブラウンは少し自慢げに頷く。

「自慢じゃないですけど、他にも何ヶ国かの言葉は話せるとは思いますが」

それが本当なら見た目に反して随分とインテリなタイプだ。

もし2010年にMR、ブラウンが学生をやっているとしてもグローバルな人材と引く手数多だろうななどと考えていた。

「そんなこと言ってる割にはやってる仕事は力仕事なんだな」

「そりゃ、鈴さんに勝つためには一から鍛え直さなきゃならないですからね」

どうにもMR、ブラウンが俺に対して敬語を使ってるのが座りが悪い。

いや、向こうからしたら当然のことなのだろうが。

そのせいか、MR、ブラウンとは鈴羽が主に話していた。

鈴羽はMR、ブラウンと会話していて何か思い出すことはないのだろうか。

仮にも短い期間と雖も雇い主とバイトの関係だったのだから何か思い出しても不思議ではない。

「それに、俺がそういうバイトをしているのにはもう一つ理由がありました……」

俺が会話に参加にしていなかった間に話は進んでいるようだった。

とりあえず聞く耳だけは持っておこうと会話に耳を傾ける。

「まあ、給料がいいからなんですけど、それでソレを買おうと思いません」

恥ずかしそうにMR、ブラウンが指さした先にはブラウン管のテレビがあった。

「テレビですか？」

「鈴羽は不思議そうな声を上げる」

てつきりもつと高価な物とも思っていたのだろう。

我が家のテレビは一年前に買い換えたばかりのやつで画面が綺麗だった。

「こうして、岡部家に来ている時は団欒とテレビの映像で華やかですが、俺の部屋にはテレビもないですからね」

寂しいんです。

とMR、ブラウンは呟く。

思わず、お前は老人か。

そうツッコミたかったのだが、思えば俺も未来ガジェット研究所でダルが寝てしまった深夜などは、おもむろにテレビを点けて気を紛らわしていた気がする。

「へえ、テレビってあると無いのじゃ変わりますからね」

「そうっすよね」

それからどんなテレビが面白い、これはつまらないなどという話をして夜は更けていった。

話の途中で鈴太郎は眠くなってしまったのか、サンタのプレゼントを待つと言って寝てしまった。

俺が鈴太郎を布団に寝かせる。

時計を見ると午後九時を回っていた。

鈴太郎がサンタにお願ひしていたプレゼントも昨日のうちに買っておいたし準備は万端だ。

居間に戻るとまだ二人は話していた。

MR、ブラウンも話す人が少なくて鬱憤が溜まっていたのか口の動きが止まる気配はない。

最近どうだとか、フランスはワインがやっぱり旨いだとか内容自体は大したことはなかったが楽しそうに話すMR、ブラウンの姿が印象的だった。

「さてそろそろお開きにしましょうか」

鈴羽は時計を見ると手をポンと叩いた。

お開きと言っても鈴羽とMR、ブラウンが喋っているだけで俺はほとんど相槌を打つ程度しかしていないのだが。

「倫太郎さんすみませんね」

どうやら鈴羽は俺が先程から数回船を漕いでいるのをすっかりと見ていたらしい。

それで話は途中だったような気もしたのだが、スッパリ話を止めてしまったのだ。

気にしなくていい。鈴羽なら言うだろうが、少し罪悪感が生まれる。

「そうかい。岡部さん。俺も明日早いからどう切り出そうかと迷ってた所なんだ」

それじゃあな。MR、ブラウンはそう言っただけで上着を羽織るとおじやましました。と言っただけで俺の家を出ていった。

帰ると言っただけで俺の家は隣だから、すぐにガチャリと隣の家のドアが開く音が聞こえた。

「倫太郎さん。すみません。私ばかり喋ってしまった……」

「いや、構わない」

2010年を振り返ってみても特にMR、ブラウンとプライベートな会話をした記憶がなかった。

元々俺自身、鳳凰院凶真の時でなければ話すこともそこまで得意というわけではない。

「さて、私達も明日から仕事があるんですから寝る準備でもしますか」

そう言うのと鈴羽はおもむろに俺に近づいてくる。

「どうかしたのか鈴？」

「いや、私もクリスマスプレゼントが欲しいなあと思っただけ……」

そう言いながら落ち着かない様子で両手をせわしなく動かしている。

そういえば、鈴羽に何も買っていなかったのを思い出す。

俺も最近は普通に秋葉の手伝いはやるようになっていたので少し余裕がなかったのだ。

「えーと……それじゃ、プレゼント貰っていいですか？」

「すま……」

すまない。

俺はその言葉を最後まで言い切ることにはなかった。

唇に当たる柔らかい感触。

それは紛れもなく鈴羽の唇だった。

甘い。

先程食べたケーキの甘さとはまた別の脳の芯から溶けていくような甘さ。

もうかれこれ十年以上一緒にいるが未だに飽きることはないだろう。どの位時間が経ったのか分からない。

それは永久とも刹那とも区別がつかなかった。

鈴羽の唇が俺の唇から離れる。

俺達の唇を繋ぐ糸のように伸びる唾液がな艶めかしい。

「ふふ。貰っちゃいました」

じゃあ私先にお風呂貰いますね。

そう言うのと鈴羽は洗面所の中に逃げるように入った。

なるほど今のがクリスマスプレゼントというわけか。

翌日、鈴太郎は自らの枕元に置かれたクリスマスプレゼントに驚き、サンタにお礼を言っていた。

その様子を見て俺達は微笑む。

結局俺達にも両親がいないので、大晦日もどこにも行く所が無かった。

そして例に漏れず俺達の隣人も行く当てが無かったらしくまた四人で鍋を囲むことになった。

今度は大晦日ということもあってMR ブラウンが日本酒を持ってきていた。

俺も鈴羽も少し貰い温かい大晦日を過ごした。

そして新年を迎えた。

年が明けたと言っても特に変わったこともなく、ただ誰から年賀状が来ているのか確認する程度のことしか変わったことをしない。

ふと年賀状を振り分けていると外国からの手紙が混じっていた。

俺に外国の友人なんていない。

きつと郵便局の人が俺とMR ブラウンのポストを間違えたのだらう。

それに年賀状というより何かの封書のようなものだった。

明らかに年賀という感じの装丁ではないのに年賀状と一緒に入っているのもどうだと思うが。

俺はしょうがないので、MR ブラウンの家のポストにその手紙を

入れておいた。

まだ鈴羽達は寝ていたがどうにも俺は目が覚めてしまったため、年賀状を見ながらテレビの新年のバラエティ番組を垂れ流していた。すると、八時過ぎに誰かがドアを叩く音が聞こえた。

俺がドアを開けるとMR、ブラウンが寒そうに立っていた。

「あけましておめでとうございます。岡部さん、これ間違ってるんでしたんで」

そう言っつてMR、ブラウンが差し出したのは先ほどの手紙だった。

「え？だつて俺達に外国人の知り合いなんていないんだが……」

「そうなんすか？でもここに橋田鈴様とえーと鳳凰院凶真様って書いてあるんだが」

鳳凰院ってなんでしょうね？

MR、ブラウンはその意味が分からず首を捻っていた。

「ちなみに、それはどこから来てるんだ？」

「そりゃ、フランスですけど。えーと、SERNって書いてありますよ」

SERN……随分懐かしい名前だ。

出来ればもう二度と関わりたくない名前だった……

仏蘭西からの手紙（後書き）

何かあれば遠慮なくお願いします。

SERNZとIBNZ5100(前書き)

明けましておめでとございます。
今年もよろしく願います。

俺はその手紙を受け取ると封を切った。

鳳凰院凶真と橋田鈴。

加えてSERNが絡んでくるとなれば中身など十中八九予想がついていた。

あの日、鈴羽の研究室のパソコンで見たSERNからの招待状。

橋田鈴の隣に書かれていた鳳凰院凶真という名前。

俺の真名……いや、偽名であるために、鈴羽と俺の関係性を把握出来なかったために今まで何も起きなかったのだろうか。

中にはワープロで打たれた一通の手紙が入っていた。

どうやらこちらに配慮したのか文面は日本語で書かれていた。

日本語に不慣れなのか所々意味の取りづらい箇所は有ったが内容を把握するには支障はなかった。

要約するとSERNに研究員として働きに来ないか？

という内容だった。

鈴羽にもラブコールを送っていたが、文章を読む限りでは俺の方によりラブコールを送っていたように感じた。

中鉢も言っていたが、俺の書いたあの時代では荒唐無稽にも取れた論文の内容が急に現実味を帯びてきたからだろう。

全て出まかせで言っていたのがたまたま合っていたとは訳が違うのだ。

正解率百パーセントの未来予知。

それは最早予知ではない。

事実だ。

普通の人々は先見の明があった程度にしか考えないだろう。

タイムマシンなんて所詮は漫画やアニメの域を出ない物だと考えているのだから。

しかし、ある事象というのはその観測者によって全く違った形を得

るのだ。

日本では兎の餅つきに見える月が中国では蟹に見えると同じように、公にしないまでもタイムマシンを研究していた彼らには、過去に何人も人を送り込んで失敗していた彼らには、その事実は未来からやってきた人間であるということの証明になったようだ。

そして彼らは同時に危惧しただろう。自分達以外の人間。或いは組織が未来から過去への時間跳躍を可能にした事実。

もしSERENが未来から送りこんだ人材ならば、前回メールで事足りたはずなのだから。

こちらに来た際の待遇なども詳しく書かれていたが詳しくは割愛する。

よく調べたものだと関心するほど詳細に記されていた。

そしてその手紙の最後はこう締めくくられていた。

『尚、我々の要求が得られなければ、ゼリーマンズレポートに君達二人の名前が刻まれることになるだろう』

そう書いてあった。

随分と古臭い言い回しだ。

重要な所はそこではない。

ゼリーマンズレポート。

その言葉に俺は戦慄を覚えた。

それは2010年にダルが初めてSERENのコンピュータにハッキングした際に見つかったレポートのことだ。

あの時紅莉栖が読んでくれた内容こそ覚えてはいないが、最後に赤く印字された『HUMAN IS DEAD』という羅列は忘れることはなかった。

俺達を読んだのほんの一部だったが実験自体は大分前から行われていたのだろう。

この時代に行われていたとしてもなんら不思議はない。

俺の頭の中では、この状況をどうすれば切り抜けられるかという考

えが浮かんでは消えることを繰り返していた。

「この時代にタイムマシンはない……！！」

自らに言い聞かせるように俺は誰にも聞こえないように呟く。元々俺達を作った物も厳密に言えば人間を過去に飛ばすというわけではなく、意識、記憶を過去に飛ばすものだった。

しかし、この時代ではそんな都合の良い物は存在しない。

つまり、やり直しが利かない一発限りの大勝負となるわけだ。

例えばどこかで俺達が岐路に立たされた時、判断を誤ることは許されないのだ。

判断のミスはそのまま死に直結すると考えた方がいい。

仮に今の展開次第では俺達はめでたくゼリーマンにされ、世界線は変動することなく秋葉は死亡し、果ては10年後に……。

「新年早々辛気臭い顔ですね。倫太郎さん」

その声に戻ると鈴羽の顔が間近にあった。

鈴太郎は起きておらずまだ布団の中で寝息を立てているのだろう。

「起きてたのか」

俺は慌てて今読んでいた手紙を背後に隠す。

無駄な行為と知りつつも少しの間でも手紙の存在を隠しておきたかった。

「倫太郎さん。とりあえず今後ろに隠した手紙みたいなものをこっちに見せて下さい」

「い、いや別にいいじゃないか」

俺の狼狽ぶりに鈴羽は怪しいと睨んだのか訝しむような視線をこちらに向ける。

「なんの手紙ですか？」

「い、いやほら大学の同窓会のお知らせだよ」

「そんなはず不是吗。私達のクラスで外国の方はいらっしやいませんし、フランスに行ったという人も聞いていませんから」

「え？」

俺は鈴羽の予想外な一言に俺は鈴羽を見上げる。

鈴羽の視線は机に向けられていた。

俺もその視線の先を見る。

「あ」

しまった。

机の上に封を切ったままの封筒を置いていたのだ。

これではどこから来たかなど一目了然である。

「フランスからの手紙……天王寺さんのお知り合いじゃないんですか？」

「いや、どうやらそういうわけじゃないらしい」

俺は観念して鈴羽に手紙を見せる。

手紙を見た鈴羽はまたかというため息を吐いた。

「この研究機関もどうしてこう極東の研究者達にこうもアプローチをかけてくるんですかね」

様子から察するに俺が見ていたメールからも数回同じようなメールが来ていたらしい。

「鈴羽……一つ聞いていいか」

「はい？」

「『ゼリーマンズレポート』って知ってるか？」

鈴羽は数瞬の後にゆっくりと首を縦に振った。

やはり知っていたのか。

「俺が見たあのメール以降に見たのか」

「はい。見ましたよ。私も一応物理学の中でもそつちの方面を専攻してますからね。ああいう現象が起きることは理解出来ましたよ」

狭い入口に無理矢理突っ込むからゲル状になるんですね。

鈴羽はそう言いながら頭の中で数式でも組み立てているのがだろうか。

何かを思い出すかのように視線をどこか遠くに向けていた。

「鈴太郎は？」

「まだ寝てましたよ。昨日は少し遅くまで起きてましたからね。スヤスヤと寝てますよ」

それを聞いて少し安心した。

俺達がこういう話をしていても理解出来ると到底思わないだろうが、それでも昔を思い出す話を子供の前で余りしたくはなかった。

「それで倫太郎さんはどうされるつもりなんですか？」

「当然断る」

即答だった。

悩む余地すらない。

鈴羽が2010年に来なければならなくなった元凶。

まゆりを殺した元凶なのだ。

そんな奴らに与するわけがない。

「でも断ってどうするつもりなんですか？」

俺はそこで押し黙る。

そうなのだ。

高々俺一人がどうこうした所で何も動かないことは火を見るより明らかだった。

「まあ。その話は後にしましょう。鈴太郎起こしてきますね」

そう言って鈴羽は鈴太郎を起こしに消えた。

それから俺達は鈴太郎と雑煮を食べ、初詣に行きおみくじを引いた。運勢は凶だった。

神主に見せると、この時期には入れてないはずなんですけど……と困惑していた。

普段の俺なら逆にツいてる。

とか、この鳳凰院凶真の名前の一文字を冠する籤を引くとは世界は俺に跪いたのか。

などと高笑いをしていたに違いない。

しかし、今はハハハと乾いた笑いが漏れた。

俺達は神社から帰ると、年賀状の確認をしたり新春番組を見たりしていつもとは違う随分とゆっくりとした時間が流れた。

おせちも三人しかいない為昼には食べ終わってしまった。

「おやすみなさい倫太郎さん」

そう言つて俺達は床に着いた。

その晩俺は夢を見た。

「久しぶりだね。岡部倫太郎」

俺は暗闇の中でその声を聞いた。

随分と懐かしい声だ。

姿も声も2010年と同じそのままだった。

あの時のままのジャージ、スパッツという相変わらずのラフな格好だった。

「久しぶりって言ってるのに反応がないってのは少し寂しいね」

「ああ、悪かったな。鈴羽。まさか夢の中とは言えあの時代の鈴羽に会うことはないと思つてたからな」

「そうだね。あたしもまさか岡部倫太郎の夢の中に現れるとは思つてなかつたけどね」

やれやれと言つた様子で鈴羽は頭をポリポリと掻く。

「ま。多分それはあたしの記憶が甦りかけてるってことだろうけどね」

「そうなのか？」

「そうだよ。きっとそう。ああ、別に不安になることはないよ。あたしの記憶が甦つても特に今の私には影響は無いはずだから」

「そうなのか」

そうなのよ。と鈴羽は笑つた。

「積もる話もあるかもしれないけど、今はそんな場合じゃないよね。俺は首肯する。」

「まさかこの時代でもSERENが絡んでくるとは予想外だったけど、全くの想定外つてわけじゃなかつたでしょ？」

「出来れば絡んで欲しくは無かつたけどね」

「でも幸いなことに切り札はこちらにある」

鈴羽の言葉には確信的何かを感じた。

「IBN5100か……!!」

そうだね。

鈴羽は頷く。

「どう使えば未来が変わるかはあたしも残念ながら分からない。けどSERNを退けられるはずだよ」

その言葉を聞いて俺は考える。

誰かが言っていた。

SERNのページの中で現在のパソコンでは読むことは出来ない。

そのページを読むためにIBN5100が必要なのだと言う。

もしそのページにおいてSERNを退けるだけの情報があるのなら、俺達に勝算はある。

「しかし……俺はダルほどの技術は持ってない」

せつかく可能性を見つけたがまた壁にぶつかってしまった。

「あつははは。岡部倫太郎どうしたの？そこはほらね」

鈴羽は自分の事を指差した。

「ダル……橋田至は私の父親だよ？父親に出来て娘に出来ないこと
はないんだよ」

そう言っつて鈴羽は笑う。

大丈夫。

あたしと私を信じて。

そつと鈴羽は俺の頬に口づけをすると霧のように消えた。

俺がハッと目を覚ますと朝になっていた。

まだ、鈴羽も鈴太郎も規則正しく寝息を立てていた。

俺は押し入れを開いた。

押し入れの中には俺が入れた時と変わらぬ姿でIBN5100が鎮座していた。

俺はその姿を見てフツと笑った。

「全ては運命石の選択か」
いいだろう。

運命とは変える為にある。

未来とは未定なのだから。

SERNとIBN5100（後書き）

もう少しでお気に入りが1000超えそうです。
皆さんに満足していただけるように頑張ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0308v/>

steins;gate 二次創作 境界線上のクルーゼック

2012年1月3日01時00分発行